

# 黒百合

泉鏡花

青空文庫



## 序

越中の国立<sup>たてやま</sup>山なる、石滝<sup>いわたき</sup>の奥深く、黒百合となんいうものありと、語るもおどろおどろしや。姫百合、白百合こそなつかしけれ、鬼と呼ぶさえ、分けてこの凄<sup>すさま</sup>じきを、雄々しきは打笑い、さらぬは袖<sup>そでぎちよう</sup>几帳<sup>しやう</sup>したまうらむ。富山の町の花売は、山<sup>やま</sup>賤<sup>がつ</sup>の類<sup>たぐい</sup>にあらず、あわれに美しき女なり。その名の雪の白きに愛でて、百合の名の黒きをも、濃い紫と見たまえかし。

明治三十五年寅壬三月

一

「島野か。」

午少し過ぐる頃、富山県知事ながしの君が、四十物町の邸の門で、活潑に若い声で呼んだ。

呼ばれたのは、知事の君が遠縁の法学生、この邸に奇寓する食客であるが、立寄れば大樹の蔭で、涼しい服装、身軽な夏服を着けて、帽を目深に、洋杖も細いので、猟犬ジャム、のほうずに耳の大きいのを後に従え、得々として出懸ける処、澄ましていたのが唐突に、しかも呼棄てにされたので。

およそ市中において、自分を呼棄てにするは、何等の者であろうと、且つ怪み、且つ憤って、目を尖らして顔を上げる。

「島野。」

「へい、」と思わず恐入って、紳士は止むことを得ず頭を下げた。

「勇美さんは居るかい。」と言いさま摺れ違い、門を入ろうとして振向いて言ったのは、

十八九の美少年である。絹セルの単衣ひとえ、水色縮緬ちりめんの帯を背後うしろに結んだ、中背なかつせの、見るから蒲柳ほりゆうの姿に似ないで、眉まなじりも眦まなじりもきりりとした、その癖口くちもと許もとの愛くるしいのが、パナマの帽子を無造作に頂いて、絹の手巾ハンケチの雪のような白いのを、泥に染めて、何か包んだものを提げている。

成程これならば、この食客的紳士が、因つてもつて身の金箔きんぱくとする処の知事の君をも呼棄てにしかねはせぬ。一国の門閥もんぼつ、先代があまねく徳を布しいた上に、経済の道宜よしきを得たので、今も内福の聞えの高い、子爵千破ちはや矢家の当主、すなわち若君滝太郎たきたろうである。「お宅でございます、」と島野紳士は渋々ながら恭うやうやしい。

「学校は休やすみかしら。」

「いえ、土曜日はんどんなんで、」

「そうか、」と謂いい棄てて少年はずつと入った。

「ちよッ。」

その後を見送つて、島野はつくづく舌打をした。この紳士の不平たるや、単に呼棄てにされて、その威嚴の幾分を殺そがれたばかりではない。誰たれも誰たれも一見して直ちかちに館やかたの飼犬だということを知つて、これを従えた者は、知事の君と別懇べつこんの者であるということを示す、

活きた手形のようなジャムの奴が、連れて出た己を棄てて、滝太郎の後から尾を振りながら、ちよろちよると入ったのであった。

「恐れるな。小天狗め、」ときも悔しげに口の内に呟いて、洋杖をちよいとついで、小刻に二ツ三ツ地の上をつついたが、懶げに帽の前を俯向けて、射る日を遮り、淋しそうに、一人で歩き出した。

「ジャム、」

真先に駈けて入った獵犬をまず見着けたのは、当館の姫様で勇美子という。襟は藤色で、白地にお納戸で薩摩縞の単衣、目のぱツちりと大きい、色のくツきりした、油気の無い、さらさらした癖の無い髪を背へ下げて、蝦茶のリボン飾、簪は挿さず、花畠の日向に出ている。

二

この花畠は——門を入ると一面の芝生、植込のない押開いた突当が玄関、その左の方が西洋造で、右の方が廻廊下で、そこが前裁になっている。一体昔の大名の別邸を取

払った幾分の造作が残ったのに、件の洋風の室数を建て増したもので、桃色の窓懸を半  
 ば絞った玄関傍の応接所から、金々として綺羅びやかな飾附の、呼鈴、巻蓑入、灰  
 皿、額縁などが洩れて見える——あたかもその前にわざと鄙めいた誂で。

日車は荅を持っていまだ咲かず、牡丹は既に散果てたが、姫芥子の真紅の花は、ちら  
 ちらと咲いて、姫がもの言う唇のように、芝生から畠を劃って一面に咲いていた二三色  
 堇の、紫と、白と、紅が、勇美子のその衣紋と、その衣との姿に似て綺麗である。

「どうして、」

体は大いが、小児のように飛着いて纏わる猟犬のあたまを抑えた時、傍目も触らないで  
 玄関の方へ一文字に行こうとする滝太郎を見着けた。

「おや、」

同時に少年も振返つて、それと見ると、芝生を横截つて、つかつかと間近に寄つて、  
 「ちよいとちよいと、今日はね、うんと礼を言わすんだ、拜んで可いな。」と莞爾々々し  
 ながら、勢よく、棒を突出したようなものいいで、係構なしに、何か嬉しそう。

言葉つきなら、仕打なら、人の息女とも思わぬを、これがまた気に懸けるような娘でな  
 いから、そのまま重たげに猟犬の頭を後に押遣り、顔を見て笑つて、

「何？」

「何だつて、大変だ、活いきてるんだからね。お姫様なんざあ学者の先生だけれども、こいつあく分らない。」と件くだんの手ハンケチ巾ハンケチの包つまを目の前へ撮つまんでぶら下げた。その泥にじが染にじんでいる純ま白つしろのを見て、傾かたいて、

「何です。」

「見ると驚びっくりくぜ、吃びっくり驚びっくりすらあ、草くさだね、こりや草くさなんだけれど活いきてるよ。」

「は、それは活いきていますしょうとも。草くさでも樹きでも花はなでも、皆みんな活いきてるではありませんか  
。」という時、姫芥ひめか子の花はなは心こころありげに袂たもとに触ふれて閃ひらめいた。が、滝たき太郎たろうは拗すねたような顔か色いろで、

「また始はじめたい、理窟りくつをいつたつてはじまらねえ。可いいからまあ難ありがと有あうと、そういつて  
みねえな、よ、厭いやなら止よせ。」

「乱暴らんぼうねえ、」

「そつちアまた強情きやうじやうだな、可いいじやあないか難あ有う……と。」

「じゃアまああつちへ参まゐりましょう。」

と言いいかけて勇美ゆうみ子は身みを返かえした。塀へいの外そとをちらほらと人の通とほるのが、小こさな節穴ふしあなを透すか



して遙はるかに昼の影燈籠かげどうろうのように見えるのを、熟じつと瞻みまもつて、忘れたように跪居ついでる犬を、勇美子は掌てのひらではたと打つて、

「ほら、」

ジャムは二三尺飛退とびすきつて、こちらを向いて、けろりとしたが、衝つと駈出かけだして見えなくなった。

「生きてるんだな。やつぱり。」といつて滝太郎一笑す。

振向いて見たばかり、さすがこれには答えないで、勇美子は先に立って鷹揚おうようである。

### 三

「いらつしやいまし。」

縁側いぢに手を支つかえて、銀杏返いちょうがえしの小間使しとやかが優容あとしきに迎えている。後先あとさきになつて勇美子

の部屋に立向うと、たちまち一種身に染みるような快い薫かおりがした。縁の上も、床の前も、机の際も、と見ると芳かんばしい草と花とで満みたされているのである。ある物は乾燥紙の上に半ば乾き、ある物は圧板おしいたの下に露を吐き、あるいは台紙に、紫、紅あか、緑、樺かば、橙だいだいいろ色の名残なごり

を留めて、日あたりに並んだり。壁に五段ばかり棚を釣って、重ね、重ね、重ねてあるのは、不残種類の違った植物の標本で、中には罎に密閉してあるのも見える。山、池、野原、川岸、土堤、寺、宮の境内、産地々々の幻をこの一室に籠めて物凄くも感じらる。正面には、紫の房々とした葡萄の房を描いて、光線を配らった、そこにばかり日の影が射して、明るいようで鮮かな、露垂るばかりの一面の額、ならべて壁に懸けた標本の中なる一輪の牡丹の紅は、色はまだ褪せ果てぬが、かえって絵のように見えて、薄暗い中へ衝と入った主の姫が、白と紫を襲ねた姿は、一種言うべからざる色彩があつた。

「道、」

「は、」と、答をし、大人しやかな小間使は、今座に直つた勇美子と対向に、紅革の蒲団を直して、

「千破矢様の若様、さあ、どうぞ。」

帽子も着たままで沓脱に突立つた滝太郎は、突然縁に懸けて後さまに手を着いたが、不思議に鳥の鳴く音がしたので、驚いて目を睜つて、また掌でその縁の板の合せ目を押えてみた。

「何だい、鳴るじゃあないか、きゆうきゆういつてやがら、おや、可訝いな。」

「お縁側が昔のまままでございますから、旧もとは好事ものずきでこんなに仕懸けました。鶯うぐいす張すばりと申すのでございますよ。」

小間使が老実まめだ立たつていうのを聞いて、滝太郎は恐入おっつきった顔色で、

「じゃあ声を出すんだらう、木だの、草だの、へ、色々なものが生きていら。」

「何をいつてるのよ。」と勇美子は机の前に、整然ちやんと構えながら苦笑する。

「どう遊あそびしましたの。」

取とり為な顔がの小間使に向つて、

「聞きねえ、勇さんが、ね、おい。」

「あれ、また、乱暴おつしやなことを有あ仰おつしやいます。」と微笑ほほえみながら、道なれなれは馴た々しなしく窘たじなめるが

ごとくに言つた。

「御容ごようす子すにも御身分ご身分にもお似合お似合い遊あそばささない、ぞんざいな言ことばつかし。不可いけえだの、居いやがるだのツて、そんな言ことは御邸ごていの車夫くるまだつて、部屋へやへ下くだつて下の者もの同士どうしでなければ申しません。本ほん当とうに不可いけませんお道楽みちがくでございませぬえ。」

「生意気せいきなことをいつたつて、不可いけえや、畏かしこまつてるなあ冬のこツた。ござつたのは食物しょくぶつでみねえ、夏向なつむきは恐おそれるぜ。」

「そのお口だものを、」といつて驚いて顔を見た。

「黙つて、見るこつた、折角お珍らしいのに言句をもんくいってると古くしてしまふ。」といひながら、急いで手ハンケチ巾を解ほどいて、縁の上に拵つかみげたのは、一掴あて、青い苔こけの生えた濡土である。

勇美子は手を着いて、覗のぞくようにした。眉を開いて、艶あて麗やかに、

「何です。」

滝太郎は背せなを向けてぐつと澄まし、

「食くいつくよ、活くきてるから。」

#### 四

「まあ、若様、あなた、こつちへお上り遊ばしましな。」と小間使は一塊の湿った土をあえて心にも留めないのであつた。

「面倒臭くつぬぎいや、そこへ入り込むと、畏かしこまらなけりやならないから、沢山あつだい。」といつて、片足を沓くつぬぎ脱ぬぎに踏伸ふみのばして、片膝を立てて頤おとがを支えた。

「また、そんなことを有おっし仰しゃらないでさ。」

「勝手にございますよ。」

「それではまあお帽子でもお取り遊ばしましな、ね、若様。」

黙っている。心易こころやすだ立てに小間使はわざとらしく、

「若様、もし。」

「堪忍まぶししねえ、炫まぶしいやな。」

滝太郎はさも面倒そうに言い棄てて、再び取合わないといった容子を見せたが、俯向うつむいて、足に近い飛石ほとりきつの辺を屹かと見た。渠かれは炫まぶしいといって小間使に謝したけれども、今瞳を据えた、パナマの夏帽の陰なる一まなこ双の眼は、極めて冷静なものである。小間使は詮せん方かたなげに、向直つて、

「お嬢様、お茶を入れて参りましょう。」

勇美子は余念なく滝太郎の贈物を視ながめていた。

「珈琲コオヒイにいたしましょうか。」

「ああ、」

「ラムネを取りに遣わしましょうか。」

「ああ、」とばかりで、これも一向に取合わないのので、小間使は誠に張合がなく、

「それでは、」といって我ながら訳も解らず、あやふやに立とうとする。

「道、」

「はい。」

「冷水が可いぜ、汲立のやつを持って来てくんねえ、後生だ。」

「いいも終らず、滝太郎はつかつかと庭に出て、飛石の上からいきなり地の上へ手を伸ばした、疾いこと！ 掴えたのは一足の小さな蟻。」

「おいらのせいじゃあないぞ、何だ、蟻のような奴が、譬にも謂わあ、小さな体をして、動いてら。おう、堪忍しねえ、おいらのせいじゃあないぞ。」といいいい取って返して、縁側に俯向いて、勇美子が前髪を分けたのに、眉を隠して、瞳を件の土産に寄せて、

「見ねえ。」

勇美子は傍目も触らないでいた。

しばらくして滝太郎は大得意の色を表して、莞爾と微笑み、

「ほら、ね、どうだい、だから難有うツて、そう言いねえな。」

「どこから。」と行って勇美子は嬉しそうな、そして頭を下げていたせいであろう、耳朶に少し汗が染んで、眶の染まった顔を上げた。

「どこからです、」

「え、」と滝太郎は言淀いよいよんで、面かおの色が動いたが、やがて事も無げに、

「何、そりや、ちゃんと心得てら。でも、あの余計にやあ無いもんだ。こいつあね、蠅こわじやあ大きくなって、駄目なの、小さな奴なら蜘蛛くもの子位は殺やっつけるだろう。こら、恐こわいなあ、まあ。」

心なく見たらば、群がった苔の中で気は着くまい。ほとんど土の色と紛まがう位、薄樺うすかばいろ色で、見ると、柔かそうに湿しめりを帯びた、小さな葉が累かさなり合つて生えている。葉尖はさきにすくすくと針を持つて、滑なめらかに開いていたのが、今蟻を取つて上へ落すと、あたかも意識したように、静々と針を集めて、見る見る内に蟻を擒とりこにしたのである。

滝太郎は、見て、その験げんあるを今更に驚いた様子で、

「ね、特別に生きてるだろう。」

## 五

「何でも崖がけ裏か、藪やぶの陰といった日陰の、湿った処で見着けたのね？」

「そうだ、そうだ。」

滝太郎は邪慳に、無愛想にいつて目も放さず見ていたが、

「ヤ、半分ばかり食べやがった。ほら、こいつあ溶けるんだ。」

「まあ、ここに葉のまわりの針の尖に、一ツずつ、小さな水玉のような露を持っててね。」

「うむ、水が懸って、溜っているんだあな、雨上りの後だから。」

「いいえ、」といいながら勇美子は立って、室を横ぎり、床柱に黒塗の手提の採集筒と一

所にある白金巾の前懸を取って、襟へあてて、ふわふわと胸膝を包んだ。その瀟

洒な風采は、あたかも古武士が鎧を取って投懸けたごとく、白拍子が舞衣を絡うた

ごとく、自家の特色を發揮して余あるものであった。

勇美子は旧の座に直って、机の上から眼鏡を取って、件の植物の上に翳し、じつと見て、

「水じゃあないの、これはこの苔が持っている、そうね、まあ、あの蜘蛛が虫を捕える糸

よ。蟻だの、蝸だの、留まると遁がささない道具だわ。あなた名を知らないでしょう、これ

はね、モウセンゴケというんです、ちよいとこの上から御覧なさい。」と、眼鏡を差向け

ると、滝太郎は何をという仏頂面で、

「詰らねえ、そんなものより、おいらの目が確だい。」と、いって傲然とした。



しかり、名も形も性質も知らないで、湿地の苔の中に隠れ生えて、虫を捕獲するのを発見した。滝太郎がものを見る力は、また多とすべきものである。あらかじめ書籍ほんに就いて、その名を心得、その形を知つて、且つかなる処で得らるかを学んでいるものにも、容易あさに求あさられない奇品であることを思い出した勇美子は、滝太郎がこの苔に就いて、いまだかつて何等の知識もないことに考え到いたつて、越中の国富山の一箇所で、しかも薄暗い処でなければ産しない、それだけ目に着きやすからぬ不思議な草を、不用意にして採集して来たことに思い及ぶと同時に、名は知るまいといつて誇つたのを、にわかさしかに恥じて、差さしか鬚ざした高慢な虫眼鏡を引込めながら、行儀悪くほとんど匍匐はらばいになつて、頬杖ほおづえを突いている滝太郎の顔を瞻みまもつて、心から、

「あなたの目は恐こわいのね。」と極めて真面目まじめにしみじみといった。

勇美子は年とし紀しも二ツばかり上である。去年父母に従うてこの地に来たが、富山より、むしろ東京に、東京よりむしろ外国に、多く年月を経た。父は前さきに仏蘭西フランスの公使館むこうづきであったから、勇美子は母とともに巴里パリイに住んで、九ツの時から八年有余、教育も先方むこうで受けた、その知識と経験とをもて、何等かこの貴公子に見所みどころがあつたのであろう、滝太郎といえばかねてより。……

## 六

。「よく見つけて採って来てねえ、それでは私に下さるんですか、頂いておいても宜しいの  
。」

。「だから難<sup>ありがと</sup>有<sup>と</sup>うツて言いねえれば、はじめから分つてら。」と滝太郎は有<sup>したりがお</sup>為<sup>が</sup>顔<sup>お</sup>で嬉<sup>よろ</sup>し  
そう。

。「いいえ、本当に結構でございます。」

勇美子はこういつて、猶<sup>ためら</sup>予<sup>ち</sup>つて四<sup>あたり</sup>辺<sup>り</sup>を見たが、手をその頬<sup>あたり</sup>の辺<sup>もた</sup>へ齎<sup>もた</sup>らして唇<sup>くちびる</sup>を指<sup>ゆび</sup>に触<sup>ふ</sup>れ  
て、媽<sup>えんぜん</sup>然<sup>ぜん</sup>として微笑<sup>ほほえ</sup>むと斉<sup>ひと</sup>しく、指<sup>ゆびわ</sup>環<sup>わ</sup>を抜き取<sup>と</sup>つた。玉<sup>たま</sup>の透<sup>とお</sup>通<sup>と</sup>つて紅<sup>あか</sup>い、金<sup>こん</sup>色<sup>じき</sup>の燦<sup>さん</sup>た  
るのをツツと出して、

。「千破<sup>ちんぱ</sup>矢<sup>や</sup>さん、お礼<sup>れい</sup>をするわ。」

頤<sup>あごづえ</sup>杖<sup>づえ</sup>した縁<sup>えん</sup>側<sup>がわ</sup>の目<sup>め</sup>の前<sup>まへ</sup>に、しかき贈<sup>くわ</sup>物<sup>ぶつ</sup>を置<sup>お</sup>いて、別<sup>べつ</sup>に意<sup>い</sup>にも留<sup>とど</sup>めな<sup>い</sup>風<sup>ふう</sup>で、滝<sup>たき</sup>太<sup>た</sup>郎<sup>らう</sup>は  
モウセンゴケを載<sup>の</sup>せた手<sup>て</sup>巾<sup>ハンケチ</sup>の先<sup>せん</sup>を——ここ<sup>こ</sup>に耳<sup>みみ</sup>を引<sup>ひ</sup>張<sup>は</sup>る<sup>べ</sup>き猫<sup>ねこ</sup>犬<sup>いぬ</sup>も居<sup>い</sup>ないから——摘<sup>つま</sup>ん  
では引<sup>ひ</sup>きながら、片<sup>かた</sup>足<sup>あし</sup>は沓<sup>くつ</sup>脱<sup>ぬぎ</sup>を踏<sup>ふ</sup>まえたまま、左<sup>ひだり</sup>で足<sup>あし</sup>太<sup>た</sup>鼓<sup>こ</sup>を打<sup>う</sup>つ腕<sup>うで</sup>白<sup>しろ</sup>き。

「取つておいて下さいな。」

まるで知らなかったのでもないかして、

「いりやしねえよ。さあ、とうとう蟻を食つちやつた、見ねえ、おい。」

勇美子は引手繰られるように一膝出て、わずかに敷居に乗らないばかり。

「よう、おしまいなさいよ。」といったが、端なくも見えて、急ぎ込む調子。

「欲かアありませんぜ。」

「お厭。」

「それにや及ばないや。」

「それではお礼としないで、あの、こうしましょうか、御褒美。」と莞爾する。

「生意気を言つていら、」

滝太郎は半ば身を起して腰をかけて言い棄てた。勇美子は返すべき言葉もなく、少年の顔を見るでもなく、モウセンゴケに並べてある贈物を見るでもなく、目の遣り処に困った風情。年上の澄ました中にも、仇気なさが見えて愛々しい。顔を少し赤らめながら、

「ただ上げては失礼ね、千破矢さん、その指環。」

「え、」と思わず手を返した、滝太郎の指にも黄金の一条の環が嵌っている。

「取替ツこにしましょうか。」

「これをかい。」

「はあ、」

勇美子は快活に思い切った物言いである。

滝太郎は目を円つぶらにして、

「不可いけねえ。こりや、」

「それでは、ただ下さいな。」

「うむ。」

「取替えるのがお厭なら。」

「止しねえ、お前めえ、お前めえさんの方がよッぽど可いいや、素晴らしいんじゃないか。俺おいらのこの、」

と斜ななめに透ぬかして、

「こりや、詰つまらない。取替えると損だから、悪いことは言わないぜ、はははは、」と笑ったが、努めて紛まぎらそうとしたらしい。

勇美子は燃ゆるがごとき唇を動かして、動かして、

「惜あはしいの、大事なんですか。」

「うむ、大事なんだ。」といい放つて、縁を離れてそのままツくと立った。

「帰けえつたら何か持たして寄越よこさあ、邸ていでも、庫くらでも欲しかあ上げよう、こいつあ、後生ごせいだから堪忍しねえ。」

勇美子あわたたも慌あわしく立つ処へ、小間使は来て、廻縁の角へ優容しとやかに現れた。何にも知らないから、小腰こわしを屈かがめて、

「お嬢様いっぞ、例の花売の娘が参つております。若様、もうお忘れ遊ばしたでしょう、冷水おひやは毒でございますよ。」

## 七

場末ではあるけれども、富山にぎやで賑にぎかなのは総曲輪そうがわという、大手先。城の外そとほり壕ぼりが残つた水溜みづたまりがあつて、片側町こあきゆうぢに小商賈こあきゆうぢが軒を並べ、壕に沿つては昼夜交代に露店ほしみせを出す。観世物みせもの小屋が、氷店こおりみせに交つていて、町外まちはずれには芝居もある。

ここに中空しんくうを凌しのいで榎えのきが一本、梢こずえにははや三日月が白く斜ななめに懸かかつた。蝙蝠こうもりが黒く、見えては隠れる横町、総曲輪から裏の旅籠町はたごまちという大通おとおりに通ずる小路を、ひとしきり

急足いそぎあしの往来ゆききがあつた後へ、もの淋さみしそうな姿で歩行あるいて来たのは、大人しやかな学生風せいふうの、年配ねんぱい二十五六の男である。

久留米くるとみの蚊飛白かがすりに兵児帯へいこおびして、少し皺しわになつた紬つむぎの黒くろの紋着もんつきを着て、紺足袋こんあしぶくろを穿はいた、鉄色てつしきの目立たぬ胸紐むなひもを律義りつぎに結んで、懐中物わいぢゅうぶつを入れてゐるが、夕涼ゆうすずみから出懸でかけけたのであろう、帽かぶは被からず、髪かみの短みじかいのが漆うるしのようで、色の美しく白い、細面こまへの、背せのすらりとしたのが、片手かたてに帯おビを挟くわんで、俯向うつむいた、紅絹べにぬいの切きれ目で目を軽く押おえながら、物思ものおもいをする風ふうで、何か足許あしもとも覚束おぼつかないよう。

静しずかかに歩あつて移うつつて、もう少すこしで通とへ出でようとする、二間幅にけんの町まちの両側りょうがわで、思いも懸かげず、喚わ！わといつて、動揺どうよめいた、四五人ごにもの小児こどもが鯨波くじなみを揚たげる。途端とたんに足あしを取とられた男おとこは、横様よこさまにはたと地つちの上うへ。

「あれ、」という声こゑ、旅籠町りやうりやうの角かどから、白い脚絆きゃはん、素足すそに草鞋穿わらしばきの裾すそ端折はしよつた、中形ちがたの浴衣ゆいに繻子しゆすの帯おビの幅狭はばせまなのを、引懸ひっかけに結むすんで、結むすんだ上うへへ、桃色ももいろの帯揚おびあげをして、胸高むねたかに乳ちちの下したへしつかとゞめ《し》めた、これへ女扇にょせんをぐいと差さして、膝ひざの下したの隠かくれるばかり、甲斐々々かひ々々しく、水色みづいろ唐縮緬とうちりめんの腰卷こしめで、手拭てぬぐいを肩かたに当て、縄なはからげにして巻まいた莫ご座ざを軽かろげに荷になつた、商婦あきなり。町まちや辻つじでは評判へいぱんの花売はなうりが、曲角まがどから遠とほくもあらず、横町よこまちの怪け

我<sup>が</sup>を見ると、我<sup>が</sup>を忘れたごとく一<sup>ひととび</sup>飛<sup>とび</sup>に走り着いて、転んだ地<sup>つち</sup>へ諸共<sup>もろとも</sup>に膝<sup>ひざ</sup>を折敷いて、扶<sup>たす</sup>け起<sup>た</sup>そうとする時、さまでは顛<sup>てんどう</sup>動<sup>どう</sup>せず、力<sup>ちから</sup>なげに身<sup>み</sup>を起して立つ。

「どこも怪我<sup>けが</sup>はしませんか。」と人目<sup>ひとめ</sup>も構<sup>かま</sup>わず、紅絹<sup>べにきぬ</sup>を持った男<sup>おとこ</sup>の手に縋<sup>すが</sup>らぬばかりに、ひたと寄<sup>よ</sup>つて顔<sup>かほ</sup>を覗<sup>のぞ</sup>く。

「やあい、やあい。」

「盲目<sup>めくら</sup>やあい、按摩<sup>あんまはり</sup>針<sup>はり</sup>。」と囃<sup>はや</sup>したので、娘<sup>むすめ</sup>は心着<sup>こころ</sup>いて、屹<sup>きつ</sup>と見て、立直<sup>た</sup>った。

「おいらのせいじゃあないぞ、」

「三年<sup>さんねん</sup>先の鳥<sup>とり</sup>のせい。」

甲<sup>かんぼし</sup>走<sup>はし</sup>った早口<sup>はやぐち</sup>に言い交<sup>まじ</sup>わして、両側<sup>りょうがわ</sup>から二列<sup>にれつ</sup>に並<sup>なら</sup>んで遁<sup>に</sup>げ出した。その西<sup>にし</sup>の手<sup>て</sup>から東<sup>ひがし</sup>の手<sup>て</sup>へ、一<sup>ひとすじ</sup>条<sup>じょう</sup>の糸<sup>いと</sup>を渡<sup>わた</sup>したので町幅<sup>まちのひろさ</sup>を截<sup>き</sup>つて引張<sup>ひっぱ</sup>合<sup>あ</sup>つて、はらはらと走<sup>はし</sup>り、三<sup>さん</sup>ツ四<sup>し</sup>ツ小<sup>こ</sup>さな顔<sup>かほ</sup>が、交<sup>まじ</sup>る交<sup>まじ</sup>る見返<sup>みかへ</sup>り、見返<sup>みかへ</sup>り、

「雁<sup>がん</sup>が一<sup>ひと</sup>羽<sup>は</sup>懸<sup>か</sup>つた、」

「懸<sup>か</sup>つた、懸<sup>か</sup>つた。」

「晩<sup>ばん</sup>のお菜<sup>な</sup>に煮<sup>か</sup>ずて食<sup>く</sup>おう。」と囃<sup>はや</sup>しぎま、糸<sup>いと</sup>に繫<sup>つ</sup>なつたなり一<sup>ひとかたまり</sup>団<sup>だん</sup>になつたと見ると、大<sup>おお</sup>な廂<sup>おひさし</sup>の、暗<sup>くら</sup>い中<sup>なか</sup>へ、ちよろりと入<sup>い</sup>りて隠<sup>かく</sup>れてしまつた。

新庄通れば、茨と、藤と、

藤が巻附く、茨が留める、

茨放せや、帯や切れる、

さあい、さんさ、よんさの、よいやな。

と女の子のあどけないのが幾人か声を揃えて唄うのが、町を隔てて彼方に聞える。

二人は聞いて立並んで、黙つて、顔を見て吻と息。

八

「小児衆ですよ、不可ません。両方から縄を引張つて、軒下に隠れていて、人が通ると、足へ引懸けるんですもの、悪いことをしますねえ。」

「お雪さん、」と言いかけて、男はその淋しげな顔を背けた。声は、足を擲んで僵された五分を経ない後にも似ず、落着いて沈んでいる。

「はい、どこも何ともなさいませんか。」

お雪と呼ばれた花売の娘は、優しく男の胸の辺りで百合の姿のしおらしい顔を、傾けて



仰いで見た。

「いえ、何、擦剥すりむきもしないようだ。」と力なく手を垂れて、膝の辺りを静しずかに払く。

「まあ、砂がついて、あれ、こんなに、」と可怨うらめしそうに、袖についた埃ほこりを払おうとしたが、ふと気を着けると、袂たもとは冷々ひやひやと湿りを持って、塗まみれた砂も落尽おちつくくさず、またその漆黒な髪もしつとりと濡ぬれている。男の眉おのずは自ひそから顰ひそんで、紅絹もみきれの切きで、赤々と押えた目の縁ふちも潤うるんだ様子。娘は袂たもとに縋すがつたまま、荷にを結むすえた縄なわの端はしを、思おもわず落おちそうとしてしつかり取とつた。

「今帰いまかえるのかい。」

「は……い。」

「暑いのに随分ずいぶんだな。」

思入ねぎらつて労ねぎらう言葉。お雪は身に染ぬみ、胸むねに応こたえて、

「あなた。」

「ああ、」

「お医者様は、」

問たずねられて目めを圧おさえた手てが微かすかに震ふるえ、

「悪い方じやあないツていうが、どうも掛々はかばかしくは行かぬそうだ。なりたけまあ大事にして、ものを見ないようにする方が可いいつていうもんだから、ここはちようど人通の少い処ところ、密そつと目を塞ふさいで探つて来たので、ついとんだ羅わなに踏ふみこんださ、意気地いきじはないな、忌いまい々ましい。」

とさりげなく打頬うちほほえ笑む。これに心を安んじたか、お雪もやや色を直して、

「どうぞまあ、お医者様を内へお呼び申すことにして、あなたはお寝よつて、何にもしないでいらつしやるようにしたいものでございますね。」

「それは何、懇意な男だから、先方さきでもそう言つてくれるけれども、上手なだけ流行るのひまで隙ひまといつちやあない様子、それも気の毒じやあるし、何、寝ているほどの事もないんだよ。」

「でも、随分お悪いようですよ。そしてあの、お帰途かえりに湯にでもお入りなすつたの。」  
考えて、

「え、なぜね。」

「お頭つむりが濡れておりますもの。」

「む、何ね、そうか、濡れてるか、そうだろう。医者が冷ひやしてくれただから。」と、詰なられ

て言開いひひらきをする者のような弱い調子で、努めて平気を装って言った。

「冷しますと、お薬になるんですか。」と袂を持つ手に力が入ると、男は心着いて探つてみたが、苦笑して

「おお、湿った手拭を入れておいたな、だらしのない、袂が濡れた。成る程女房おかみさんには叱られそうなこつた。」

「あれ、あんなことをいつていらつしやるよ。」と嬉しそうに莞爾にっこりしたが、これで愁眉しゅうびが開けたと見える。

「御一所に帰りましょうか。」

「別々に行こうよ、ちつと穩おだやかでないから。いや、大丈夫だ。」

「氣を着けて下さいましよ。」

## 九

男女ふたりが前後して総曲輪そうがわへ出て、この町の角を横切つて、往来ゆききの早い人中まじに交つて見えなくなるこしもると、小児こどもがまた四五人一団になつて蹶あらかれたが、ばらばらと駈かけて来て、左右に分れ

て、旧のごとく軒下に蹲んで隠れた。

月の色はやや青く、蜘蛛はその罫を営むのに忙しい。

その時旅籠町の通の方から、同じこの小路を抜けようとして、薄暗い中に入って来たのは、一人の美少年。

パナマの帽を前下り、目も隠れるほど深く俯向いたが、口笛を吹くでもなく、右の指の節を唇に当て、素肌に着た絹セルの単衣の衣紋を緩げ——弥蔵という奴——内懐に落した手に、何か持つて一心に瞻めながら、悠々と歩を移す。小間使が言った千破矢の若君という御容子はどこへやら、これならば、不可えの、居やがるのと、いけぞんざいなことも言いそうな滝太郎。

「ふん。」

片微笑をして、また懐の中を熟と見て、

「おいらのせいじやあないぞ。」と仇口に呟いた。

「やあい、やい」

「盲目やあい。」

小児は一時に哄と囃したが、滝太郎は俯向いたまま、突当ったようになって立停つ

たばかり、形も崩さず自若としていた。

膝の辺りへ一條の糸が懸つたのを、一生懸命両方から引張つて、

「雁が一羽懸つた、」

「懸つた、懸つた、」と夢中になり、口々に騒ぎ立つのは、大方獲物が先刻のごとく足を取られたと思つたろう。幼いものは、驚破というと自分の目を先に塞ぐのであるから、敵の動静はよくも認めず、血迷つてただ燥ぐ。

左右を、して、叱りもしない、滝太郎の涼しやかな目は極めて優しく、口許にも愛嬌があつて、柔和な、大人しやかな、気高い、可懐しいものであつたから、南無三仕損じたか、逃後れて間拍子を失つた悪戯者。此奴羽搏をしない雁だ、と高を括つて凶々しや。

「ええ、そつちを引張んねえ。」

「下へ、下へ、」

「弛めて、潜らせやい。」

「巻付けろ。」

遊軍に控えたのまで手を添えて、搦め倒そうとする糸が乱れて、網の目のように、裾、

袂、帯へ来て、懸つては脱れ、また纏うのを、身動きもしないで、イんで、目も放さず、面白そうに見ていたが、やや有つて、狙を着けたのか、ここぞと呼吸を合わせた氣勢、ぐいと引く、糸が張つた。

滝太郎は早速に押当てていた唇を指から放すと、薄月にきらりとしたのは、前に勇美子に望まれて、断乎として辞し去つた指環である。と見ると糸はぷつりと切れて、足も、膝も遮るものなく、滝太郎の身は前へ出て、見返りもしないで衝と通つた。

そのまま総曲輪へ出ようとする時、背後ではわツと云つて、我がちに遁げ出す蹙音。蜘蛛の子は、糸を切られて、驚いて散々なり。

「貰つたよ。」

滝太郎は左右を、し、今度は憚らず、袂から出して、掌に据えたのは、薔薇の薫の蝦茶のリボン、勇美子が下髪を留めていたその飾である。

## 十

土地の口碑、伝うる処に因れば、総曲輪のかの榎は、稗史が語る、佐々成政がそ

の愛<sup>あい</sup> 妾<sup>しやう</sup>、早百合を枝に懸けて惨殺した、三百年の老樹<sup>おいき</sup>の由。

髪を掴<sup>つか</sup>んで釣<sup>つる</sup>し下げた女の顔の形をした、ぶらり火というのが、今も小雨の降る夜が更けると、樹の股<sup>また</sup>に懸<sup>かか</sup>るといふから、縁起を祝<sup>いわ</sup>う夜商人<sup>よあきんど</sup>は忌<sup>い</sup>み憚<sup>はば</sup>つて、ここへ露店を出しても、榎の下は四方を丸く明けて避ける習慣<sup>ならわし</sup>。

片側<sup>あきないみせ</sup>の商<sup>あき</sup>店<sup>ないみせ</sup>の、夥<sup>おび</sup>しい、瓦<sup>が</sup>ス、洋燈<sup>ラン</sup>の灯<sup>ンブ</sup>と、露店のかんてらが薄くちらちらと黄<sup>たそが</sup>昏<sup>れ</sup>の光を放つて、水打つた跡を、浴衣着、団扇<sup>うちわ</sup>を手にした、手拭を提げた漫<sup>そぞろ</sup>歩<sup>あるき</sup>の人通、行交<sup>ゆきちが</sup>い、立換<sup>たちかわ</sup>つて賑<sup>にぎ</sup>やかな明<sup>あ</sup>い中に、榎<sup>こすえ</sup>の梢<sup>ほ</sup>は蓬<sup>ほう</sup>々<sup>ほう</sup>としてももの寂しく、風が渡る根際に、何者かこれ店を拡げて、薄暗く控えた商人<sup>あきんど</sup>あり。

ともすると、ここへ、瘦<sup>やせ</sup>枯<sup>が</sup>れた坊主の易者が出るが、その者は、何となく、幽霊を濟度しそうな、怪<sup>あや</sup>しい、そして頼母<sup>たのも</sup>しい、呪文を唱える、堅固な行者のような風采<sup>ふうさい</sup>を持つてゐるから、衆<sup>ひと</sup>の忌<sup>い</sup>む処、かえつて、底の見えない、靈験ある趣を添えて、誰もその易者が榎の下に居るのを怪しまぬけれども、今夜のはそれではない。

今灯を点<sup>つ</sup>けたばかり、油煙も揚らず、かんでらの火も新しい、店の莫<sup>も</sup>塵<sup>じ</sup>の端に、汚れた風呂敷を敷いて坐り込んで、物馴<sup>な</sup>れた軽口で、

「召<sup>ま</sup>しませぬか、さあさあ、これは阿蘭陀<sup>オランダ</sup>トツピイ産の銀流し、何方<sup>どなた</sup>もお煙管<sup>きせる</sup>なり、お簪<sup>かんざし</sup>

なり、真鍮、銅、お試しなさい。鍍金、ガラハギをなさいましても、鍍金、ガラハギは、鍍金ガラハギ、やつぱり鍍金、ガラハギは、ガラハギ。」

と尻ツ刎の上調子で言つて、ほほと笑つた。鉄漿を含んだ唇赤く、細面で鼻筋通つた、引緊つた顔立の中年増。年紀は二十八九、三十でもあろう、白地の手拭を姉さん被にしたのに額は隠れて、あるのか、無いのか、これで眉が見えたらたちまち五ツばかりは若やぎそうな目につく器量。垢抜して色の浅黒いのが、絞の浴衣の、糊の落ちた、しつとりと露に湿つたのを懊惱げに纏つて、衣紋も緩げ、左の手を二の腕の見ゆるまで蓮葉に捲つたのを膝に置いて、それもこの売物の広告か、手に持つたのは銀の斜子打の女煙管である。

氷店の白粉首にも、桜木町の赤襟にもこれほどの美なるはあらず、ついぞ見懸けたことのない、大道店の掘出しもの。流れ渡りの旅商人が、因縁は知らずここへ莫産を広げたらしい。もつとも総曲輪一円は、露店も各自に持場が極つて、駈出しには割込めなから、この空地へ持つて来たに違いない。それにしても大胆な、女の癖にと、珍しがるやら、怪むやら。ここの国も物見高で、お先走りの若いのが、早や大勢。

婦人は流るるような瞳を廻らし、人だかりがしたのを見て、得意な顔色。



「へい、鍍金は鍍金、ガラハギはガラハギ、品物に品が備わりませぬで、一目見てちやんと知れる。どこへ出しても偽物でございませぬが、手前商いまする銀流しを少々、」と言いかけて、膝に着いた手を後へ引き、煙管を差置いて箱の中の粉を一捻し、指を仰向けで、前へ出して、つらりと見せた。

「ほんの纒ばかり、一撮み、手巾、お手拭の端、切ツ屑、お鼻紙、お手許お有合せの柔かなものにちよいとつけて、」

婦人は絹の襪襦切に件の粉を包んで、俯向いて、真鍮の板金を取った。

お掛けなさいまし、お休みなさいましと、間近な氷店で金切声。夜芝居の太鼓、どろどろどろ、遥に聞える観世物の、評判、評判。

## 十一

「訳のないこと、子供衆でも誰でも出来る。ちよいと水をつけておいて、柔かにぐいぐいとこう遣りさえすりや、あい、鷹化して鳩となり、傘変わって助六となり、田鼠化して鶉となり、真鍮変じて銀となるツ。」

「すずめかいちゆうにいつてはまぐりとなる  
「雀 入 海 中 為 蛤 か。」と、立合の中から声を懸けるものがあつた。

おんな  
婦人はその声の主を見透そうとするごとく、人顔をじろりと見廻わし、黙つて莞爾して、  
また陳立てる。

「さあさあ召して下さい、召して下さいよ。御当地は薬が名物、津々浦々までも効能が行  
渡るんでございますがね、こればかりは看板を掛けちゃ売らないのですよ。一家秘法の銀  
流、はい、やい、お立合のお方は御遠慮なく、お持合せのお煙管なり、お簪なり、こ  
れへ出してお験しなさいまし、目の前で銀にしてお慰に見せましょう、御遠慮には及びま  
せん。」

といつてちよいと句切り、煙管を手にして、莨を捻りながら、動静を伺つて、  
「さあさあ、誰方でもどうぞござんす。」

若い同士耳打をするのがあり、尻を突いて促すのがあり、中には耳を引張るのがある。  
止せ、と退る、遣着けろ、と出る、ざまあ見ろ、と笑うやら、痛え、といつて身悶えする  
やら、一斉に皆うようよ。有触れた銀流し、汚い親仁なら何事もあるまい、いづれ器量が  
操る木偶であろう。

「姉や。」

この時、人の背後うしろから呼んだ、しかしこれは、前に黄な声を発して雀海中いに入つてを云うんぬん々したごとき厭味いやみなものではない。清すずしい活潑すずなものであつた。

婦人おんなは屹きつと其方そなたを見る、トまた悪怏わるびれず呼懸よけて、

「姉や、姉や。」

「何でございますか、は、私わたくし、私」

「指環でも出来るかい。」

「ええ、出来ますとも、何でもお出しなさいましょ。」

「そう、」と極めてその意を得たという調子で、いそいそと出て、店前みせさきの地つちへ伝法でんぽうに屈かがんだのは、滝太郎である。遊あそび好ずきの若様は時間じかんに閑あそらず、横町よこまちで糸を切つて、勇美ゆうみ子の頭かみ飾かざりをどうして取つたか、人知れず掌たなに弄もてあそんだ上に、またここへ来てその姿あらわを顯わした。

滝太郎は、さすがに玉のような美しい手を握つて、猶ためら予わらず、売物の銀流ぎんりゅうの粉この包ふく、お験まじしの真鍮板まがね、水入みづいれ、絹の切などを並べた女の膝ひざの前に真直まっすぐに出した。指環ゆびわのきらりとするのを差向さむかけて、

「こいつを一つ遣やつてくんねえな。」

立合の手合はもとより、世擦れて、人馴れて、この榎の下を物ともせぬ、弁舌の爽な、見るから下つ腹に毛のない姉御も驚いて目を睜った。その容貌、その風采、指環は紛うべくもない純金であるのに、銀流しを懸けろと言うから。

「これですかい。」

「ちよいと遣つておくんな。」

「結構じゃありませんかね。」

「お銭がなくなつちやあ不可ねえか、ここにや持つていねえんだが、可かつたらつけてくねえ。後で持たして寄越すぜ。」

と真顔でいう、言葉つき、顔形、目の中をじつと見ながら、

「そんな吝じやありませんや。お望なら、どれ、附けて上げましょう。」と婦人は切の端に銀流を塗して、滝太郎の手を密と取った。

「ようよう、」とまた後の方で、雀海中に入った時のごとき、奇なる音声を発する者あり。

「可いぜ、可いぜ、沢山だ、」と滝太郎はやや有つて手を引こうとする、ト指の尖を握つたのを放さないで、銀流の切を摺着けながら、

「よくして上げましょう、もう少しですから。」

「沢山だよ。」

「いいえ、これだけじゃあ綺麗にはなりません。」と婦人は急に止めそうにもない。

「さあ、大変。」

「お静に、お静に。」

「構わず、ぐつと握るべしさ、」

「しつかり頼むぜ。」

などと立合はわやわやいうのを、澄したもので、

「口切の商でございませ、本磨にして、成程これならばという処を見せましょう、

これから艶布巾をかけて、仕上げますから。」

「止せ。」

滝太郎の声はやや激して、振放そうとして力を入れる。押えて動かさず、

「ま、もうちつと辛抱をなさいませ、これから裏の方を磨きましようね。」

婦人はこういつつ、ちらちらと目をつけて、指環の形、顔、服装、天窓から爪先まで、屹と見てはさりげなく装うのを、滝太郎は独り見て取って、何か憚る処あるらしく、一度は一度、婦人が黒い目で睨む数の重るに従うて、次第に暗々裡に己を襲うものが来り、近いて迫るように覚えて、今はほとんど耐難くなつたと見え、知らず知らず左の手が、片手その婦人に持たれた腕に懸つて、力を添えて放そうとする。肩は聳え、顔には薄く血を染めて、滝太郎は眉を顰めた。

「可いつてんだい。」

「お待ち！」とばかりで婦人も商売を忘れて、別に心あつて存するごとく、瞳を据えて面を合せた。

ちやうどその時、四五十歩を隔てた、夜店の賑かな中を、背後の方で、一声高く、馬の嘶くのが、往來の蹙音を圧して近々と響いた。

と思うと、滝太郎は、うむ、といつて、振向いたが、吃驚したように、

「義作だ、おう、ここに居るぜ。」

「ちよいと、」

「ええ、」

「あれ、」といって振返された手を押えた。指の間には紅くれない一滴、見る見る長くなって、手首へ掛けて糸を引いて血が流れた。

「姉ねえさん、」

「どうなすつた。」

押魂おつたまげ消た立合は、もう他人ではなくなつて、驚いて声を懸ける。滝太郎はもう影も見えない。

婦人おんなは顔の色も変えないで、切きれで、血を押えながら、姉ねえさん被かぶりのまま真仰まあおの向けに榎を仰いだ。晴れた空も梢こずえのあたりは尋常ただならず、木精こだまの氣勢けはい暗々として中空を籠こめて、星の色も物凄ものすごいい。

「おや、おや、おかしいねえ、変だよ、奇体なことがあるものだよ。露か知らん、上の枝から雫しずくが落ちたそうで、指ゆびが冷ひやりとしたと思つたら、まあ。」

「へい、引搔ひっかいたんじやありませんか。」

「今のが切つたんじやないんですかい。」

「指環で切れるものかね、御常談を、引搔ひっかいたつて、血が流れるものですか。」

「さればさ。」

「厭だ、私は、」と薄気味の悪そうな、悄げた様子で、婦人は人の目に立つばかり身顫をして黙った。榎の下寂として声なし、いずれも顔を見合せたのである。

## 十三

「何だね、これは。」

「叱、」と押えながら、島野紳士のセル地の洋服の脇を取って、——奥を明け広げた夏座敷の灯が漏れて、軒端には何の虫か一個唸を立ててはたと打着かつてはまた羽音を響かす、蚊が居ないという裏町、俗にお園小路と称える、遊廓桜木町の居まわりに在り、夜更けて門涼の団扇が招くと、黒板塀の陰から頬被のぬつと出ようという凄寸法の処柄、宵の口はかえつて寂寞している。——一軒の格子戸を背後へ退つた。

これは雀部多磨太といって、警部長ながし氏の令息で、島野とは心合の朋友である。

箱を差したように両人氣はしっくり合つて居るけれども、その為人は大いに違つて、島野は、すべて、コスメチック、香水、巻蓑、洋杖、護謨靴という才子肌。多磨太



は白薩摩しろざつまのやや汚れたるを裾短すそみじかに着て、紺染の兵児帯へこおびを前下りの堅結かたむすび、両方腕うでまくり捲まをした上に、裳もすそを撮つまみあ上げた豪傑造り。五分刈にして芋のようにならぬところと肥えた様子は、西郷の銅像に肖にて、そして形の低い、年紀は二十三。まだ尋常中学を卒業しないが、試験なんぞをあえて意とするような吝けちなのではない。

島野を引張り着けて、自分もその意気な格子戸うしろを後に五六歩。

「見たか。」

島野は瘡やせぎすで体も細く、釣棹つりざおという姿で洋杖ステッキを振った。

「見た、何さ、ありや。門札の傍わきへ、白で丸い輪を書いたのは。」

「井戸でない。」

「へえ。」

「飲用水の印ではない、何じや、あれじや。その、色事の看板目印というやつじや。まだ方々にあるわい。試みに四五軒見しよう、一所に来う、歩きながら話そうで。まずの、」  
才子と豪傑は、鼠のセル地と白薩摩で小路の黄昏たそがれの色に交りまじ、くっ着いて、並んで歩く。

ここに注意すべきは多磨太が穿物はきものである。いかに辺幅を修せずとって、いやしくも

警部長の令息で、知事の君の縁者、勇美子には再従兄またいとこに当る、紳士島野氏の道伴みちづれで、護謨靴と歩を揃えながら、何たる事！ 藁草履わらぞうりの擦切れたので、埃ほこりをはたはた。歩きながら袂を探つて、手帳と、袂たもとと草と一所くたに掴み出した。

「これ見い、」

紳士は軽く目を注いで、

「白墨かい。」

「はははは、白墨じゃが、何と、」

「それで、」と言懸けて、衣兜かくしうずだかに堆く、挟んでおく、手巾ハンケチの白いので口の辺あたりをちよいと

拭ふいた。

「うむ、おりや、近頃博愛主義になつてな、同好の士には皆見せてやる事にした。あえてこの慰なぐさを独擅どくせんにせんのだじやで、到いたる処俺が例の觀察をして突留めた奴うちの家には、必ず、門札の下へ、これで、ちよいとな。」

「ふん、はてね。」

「貴様今見たか、あれじゃ、あの形じゃ。目立たぬように丸い輪を付けておくことにしたんじゃ。」

「御趣向だね。」

「どうだ、今の家には限らずな、どこでも可いぞ、あの印の付いた家を随時窺つて見い。殊に夜な、きつと男と女とで、何かしら、演劇にするようなことを遣つとるわ。」

十四

多磨太は言懸けて北叟笑み、

「貴様も覚えておいてちと慰みに覗いて見い。犬川でぶらぶら散歩して歩いても何の興味もないで、私がああの印を付けておく内は不残趣味があるわい。姦通かな、親々の目を盗んで密会するかな、さもなけりや生命がけで惚れたとか、惚れられたとかいう奴等、そして男の方は私等構わんが、女どもはいずれも国色じゃで、先生難有いじやろ。」

ぎろりとした眼で島野を見ると、紳士は苦笑して、

「変つたお慰だね、よくそして見付けますなあ。」

「ははあ、なんぞ必ずしも多く労するを用いん。国民皆墮落、優柔淫奔になつとるから、夜分なあ、暗い中へ足を突込んで見い。あつちからも、こつちからも、ばさばさと遁出す

わ、二足ずつの、まるでもつてばった 蠟螂かまきりが草の中から飛ぶようじや。其奴そいつの、目星めぼしい処ところを選取えりとつて、縦横じやうぎやうに跡あとを跟つけるわい。ここぞという極きよくめが着きいた処ところで、印いんを付けておくんじや。私も初手わしの内うちは二軒三軒と心覚こころえにしておいたが、蛇じやの道みちは蛇へびじや、段々だんだんその術じゆつに長ながずるに従したがうて、蔓つるを手繰たづなるように、そら、そろそろ見付みづかるで。ああ遣やつて印いんをして、それを目的めあてにまた、同好どうこうの士しな、手下てあどもを遣やわす、巡査じゆんさ、探偵たんていなどという奴やつが、その喜きぶことひとごと一ひとごと通とおでないぞ。中には夜行やぎやうをするのに、あの印いんばかり狙ねらいおる奴やつがある。ぐツすり寐ね込んででもいようもんなら、盗賊どろぼうが遁にげ込んだようじやから、なぞというて、叩たたき起おして周章あわてさせる。」

「酷ひどいことを！」

島野しまのは今更いまさらのように多磨太たまたの豪傑ごうてつ面おもてを瞻ぞんつた。

「何なにに其等そいらはほんの前芸ぜんぎじやわい。一体何いっじやぞ、手下てあどもにも言いつて聞きかせるが、野郎やろうと女めと両方夢中りやうほうむちゆうになつとる時は常識じやうじきを欠かいて社会しやかいの事ことを顧かみぬじやから、脱落だつらくがあつてな、知らず知らず罪つみを犯かしおるじや。私わしはな、ただ秘密ひみつということばかりでも一種立派いちゆうたつぱな罪悪つみあくと断ことわるで、勿論もちろん市役所しやくじよへ届つけた夫婦ふうふには関係かんけいせぬ。人の目めを忍しのぶほどの中の奴やつなら、何か後暗ごあんいことをしおるに相違さいちがないでの。仔細しさいに觀察くわんさつすると、こいつ禁錮きんこするほどのことは

のうても、説諭位はして差支えないことを遣つとるから、掴み出して警察で発かすわい。」  
 「大変だね。」

「発くとの、それ親に知れるか、亭主に知れるか、近所へ聞える。何でも花火を焚くようなもので、その途端に光輝天に燦爛するじや。すでにこないだも東の紙屋の若い奴が、桜木町である女と出来合つて、意氣事を極めるちゆうから、癩に障つてな、いろいろ験べたが何事もなくて、為方がない、内に居る母親が寺参をするのに木綿を着せて、汝が傾城買をするのに絹を纏うのは何たることじや、という廉をもつて、説諭をくらわした。」  
 「それで何かね、警察へ呼出しかね。」

「ははあ、幾ら俺が手下を廻すとつて、まさかそれほどの事では交番へも引張り出せないで、一名制服を着けて、洋刀を佩びた奴を従えて店前へ喚き込んだ。」

「おやおや、」

「何、喧嘩をするようにして言つて聞かせても、母親は昔気質で、有るものを着んのじやツて。そんなことを構うもんか、こつちはそのせいで藁草履を穿いて歩いてる位じやもの。」

さなり、多磨太君の藁草履は、人の跡を跟けるのに跫音を立てぬ用意である。

## 十五

「それからの、山田下の植木屋の娘がある、美人じや。貴様知ってるだろう、あれがな、次助というて、近所の鋳物師の倅と出来た。先月の末、闇の晩でな、例のごとく密行したが、かねて目印の付いてる部じやで、密と裏口へ廻ると、木戸が開いていたから、庭へ入った。」

「構わず?」

「なに咎めりや私が名乗って聞かせる、雀部といえは一縮じや。貴様もジャムを連れて堂々濶歩するではないか、親の光は七光じやよ。こうやって二人並んで歩けばみんな途を除けるわい。」

島野は微笑して黙って頷いた。

「はははは、愉快じやな。勿論、淫魔を駆って風紀を振肅し、且つ国民の遊惰を喝破する事業じやから、父爺も黙諾の形じやで、手下は自在に動くよ。既にその時もあれじや、植木屋の庭へこの藁草履を入れて搔廻わすと、果せるかな、  
ばった、  
蠅螂。」

「まさか、」

「うむ、植木屋の娘と其奴と、貴様、植込の暗い中に何か知らん歎いておるわい。地面の上で密会なんざ、立山と神通川とあつて存する富山の体面を汚すじやから、引摺出した。」

「南無三宝、はははは。」

「挙動が奇怪じや、胡乱な奴等、来い！　と言うてな、角の交番へ引張つて行つて、吐せと、二ツ三ツ横面をくらわしてから、親どもを呼出して引渡した。ははは、元来東洋の形勢日に非なるの時に当つて、植込の下で密会するなんざ、不埒至極じやからな。」

「罪なこつたね、悪い悪戯だ、」と言懸けて島野は前後を見て、杖を突いた、辻の角で歩を停めたので。

「どこへ行こうかね。」

榎の梢は人の家の物干の上に、ここからも仰いで見らるる。

「総曲輪へ出て素見そうか。まあ来いあそこの小間物屋の女房にも、ちよいと印が付いておるじや。」

「行き届いたもんですな。」

「まだまだこれからじゃわい。」

「さよう、君の夜が更けてからおかしいだろうが、私は、その晩おそになると家うちが妙でないから失敬しよう。」

「ははあ、どこぞ行くんかい。」

「ちよいと。」

「そんなら行ゆけ。だが島野、」と言いながら紳士の顔を、皮の下まで見透かすごとくじろりと見遣つて、多磨太はにやり。

擦くすくられるのを耐こらえるごとく、極めて真面目まじめで、

「何かね、」

「注意せい、貴様の体にも印が着いたぞ。」

「え！」と吃驚びっくりして慌あわてて見ると、上衣うわぎの裾すそに白墨で丸いもの。

「どうじゃ。」

「失敬な、」とばかり苦い顔をして、また手巾ハンケチを引出した。島野はそそくさと払い落して、

「止したまえ。」



「ははは、構わん、遣れ。あの花売は未曾有の尤物じゃ、また貴様が不可なければ私が占めよう。」

「大分、御意見とは違いますように存じますが。」

「英雄色を好むさ。」と傲然として言った。二人が気の合うのはすなわちここで、藁草履と狛犬と用いる手段は異なるけれども、その目的は等しいのである。

島野は氣遣わしそうに見えて、

「まさか、君、花売が処へは、用いまいね、何を、その白墨を。」

「可いわい、一ツぐらい貴様に譲ろう。油断をするな、那奴また白墨一抺に価するんじやから。」

十六

「貴方御存じでございますか。」

「ああ、今その話の花か。知ってはいない、見たことはないけれどもあるそうだ。いや、有るに違いはないんだよ。」

萱かやの軒端のきばに鳥の声、という侘わびしいのであるが、お雪が、朝、晩、花売に市へ行く、出際と、帰つてからと、二度ずつ襷たすき懸がけで拭ふ込むので、朽目くちめに埃ほこりも溜たまらず、冷ひや々と濡色ひやひやを見せて涼しげな縁はしに端居はしして、柱はしらに背せを持たしたのは若山拓ひらくわ、煩わづらいのある双の目を塞ふさいだま  
ま。

生うまれは東京で、氏素性は明かでない。父も母も誰も知らず、諸国漫遊の途次、一昨年うましの秋この富山に来て、旅籠町の青柳あおやぎという旅店に一泊した。その夜賊よのためにのこらず金子きんすを奪あかれて、明ある日の宿料もない始末。七日十日逗と留りゅうして故郷へ手紙を出した処で、仔細しさいあつて送金の見込はないので、進退きわ谷まつたのを、宜よろしゆうがすというような気前の好いい商あきんど人はここにはない。ただし地方裁判所の検事に朝野あさのなにがしというのが、その為ひとなり人ひとに見る所があつて、世話をして、足を留とどめさせたということ、かつて教おしえを受けた学生は皆知しっている。若山は、昔なら浪人の手習師匠、由緒よじゆいある土ちがしばし世を忍しのぶ生計たつきによくある私塾を開いた。温厚篤とくじつ実、今の世には珍めづらしい人物で、且つ博学で、恐らく大学に業を修したのであろうと、中学校の生意気なのが渡りものと侮あつて冷かしに行つて舌を巻いたことさえあるから、教おしえ子こも多く、皆敬ない、懐ないていたが、日も経たたず目を煩わづらつて久しく癒いえないので、英書けいみを閲みし、数字を書くことが出来なくなつたので、弟子は皆

断つた。直ちに収入がなくなつたのである。

先生むぐら葎ではございませうが、庭も少々、裏が山つづき続で風も佳よし、市まちにも隔つて気楽でもございませうから御保養かたがたと、たつて勧めてくれたのが、同じ教子の内に頭角を抜いて、代だ稽古いげいこも勤まつた力松という、すなわちお雪の兄で、傍ら家計を支えながら学問をしていたが、適齡に合格して金沢の兵營に入つたのは去年の十月。

後はこの侘住居わびすまいに、拓と阿雪との二人のみ。拓は見るがごとく目を煩つて、何をすればたより便もないので、うら若い身で病人を達引たてひいて、兄の留守を支えている。お雪は相馬氏の孤み児で、父はかつて地方裁判所に、明決、快断の誉ほまれある名士であつたが、かつて死刑を宣告した罪囚むすめの女を、心着かず入れて妾しやうとして、それがために暗殺された。この住居すまいは父が静を養うために古屋こおくを購あがなつた別業の荒れたのである。近所に、癩病かつたい医者だと人はいうが、漢方医のある、その隣家となりの荒物屋で駄菓子、油、蚊遣香かやりこうまでも商つている婆さんが来て、瓦鉢かわらばちの欠けた中へ、杉の枯葉を突つっこ込んで燻いぶしながら、庭先に屈かがんでいるが、これはまたお雪というと、孫も子も一所にして、乳で育てたもののように可愛かわゆくてならないので。

一体、ここは旧山もとの裾の温泉宿ゆやどの一廓であつた、今も湯の谷という名が残つている。元治年間立山に山崩くずれがあつて洪水でみずの時からはたと湧わかなくなつた。温泉の口は、お雪が花を

貯えておく庭の奥の藪やぶ 畳たたみの蔭にある洞ほら 穴あなであることまで、忘れぬ夢のように覚えて  
 いる、谷の主とも謂いいつべき居てつきの媪おうな、いつもその昔の繁華を語つて落涙する。今は  
 ただ蚊が名物で、湯の谷といえは、市まちの者は蚊だと思ふ。木屑きくずなどを焼たいた位で追お着つかぬ  
 と、売物の蚊遣香は買かわさないうで、杉すぎ 葉はを搔かいてくれる深切しんせつさ。縁側ふたりに両人並なんだのを  
 見て嬉うれしそうに、

「へい、旦那様知つてるだね。」

## 十七

「百合には種類が沢山あるそうだよ。」

ささめ、為ため 朝あさ、博多はかた、鬼百合、姫百合は歌俳諧にも詠よんで、誰も知つたる花。ほしな  
 し、すけ、てんもく、たけしま、きひめ、という珍らしい名ななるがあり。染そめ 色いろは、紅くれない、  
 黄すかし、透しほり、絞ぼり、白百合は潔たもとく、袂たもと、鹿かの子は愛々しい。薩摩さつま、琉球りゅうきゅう、  
 朝鮮、吉野、花の名の八重百合というのもある。と若山は数えて、また紅絹もみの切きれで美しく目をお 圧さえ、媪おうなを見、  
 お雪を見て、楽しげに、且つ語るよう、

「話の様子では西洋で学問をなすつたそうだし、植物のことにそういう趣味を持つてゐるなら、私よりは、お前のお花主とくいの、知事の嬢さんが、よく知ってお在いでだろうが、黒百合というのもやっぱりその百合の中の一ツで、花が黒いというけれども、私が聞いたのでは、真まつくら  
黒な花というものはないそうさ。」

「はい、」しばらくして、「はい、」媪は返事ばかりでは気が済まぬか、団扇持つ手と顔を動かして、笑えみかたむ傾ななめけては打うちうなず領ななめく。

「それでは、あの本当はないのでございますか。」とお雪は拓の座を避けて、斜ななめに縁側に掛けてゐる。

「いえ、無いというのじゃあないよ。黒い色はあるまいと思うけれども、その黒百合と  
いうのは帯紫暗緑色で、そうさ、ごくごく濃い紫に緑まじが交つた、まあ黒いといつても可  
のだろう。花は夏咲く、丈一尺ばかり、梢こすえの処つぼみへ荅たを持つのは他ほかの百合も違ちがいはない。花  
弁なびらは六つだ、蕊しべも六つあつて、黄色い粉の袋が附くつ着ついてる。私が聞いたのはそれだけな  
んだ。西洋の書物には無いそうで、日本にも珍めづらしいから。書いたものには、ただ北ほくこく国  
の高山で、人跡の到らない処ところに在るといふんだから、昔はまあ、仙人か神様ばかり眺める  
ものだと思つた位だろうよ。東京理科大学の標本室には、加賀の白はく山さんで取つたのと、信

州の駒ヶ嶽と御嶽と、もう一色、北海道の札幌で見出したのと、四通り黒百合がある  
そうだが、私はまだ見たことはなかった。

お雪さん、そしてその花を欲しいというお嬢さんは、どういう考えで居るんだね。」

「はい、あのこないだからいつでもお頼みなさいますんでございますが、そういう風に御  
存じではないのですよ。やっぱり私達が、名を聞いております通、芝居でいたします早  
百合姫のことで、富山には黒百合があるツていうから、欲しい、どんな珍しい花かも知  
れぬ。そして仏蘭西にいらした時、大層御懇意に遊ばした、その方もああいふことに凝  
つていらつしやるお友達に、由緒を書いて贈りたいといつてお騒ぎなんでございます。お  
請合はしませんけれども、黒百合のある処は解っておりますからとそう言つて参りまし  
たが、太閤記に書いてあります草双紙のお話のような、それより外当地でもまだ誰も見た  
ものはないのでございますから、どうかしら、怪しいと存じました。それでは、あの、貴  
方、処に困つて、在る処には、きつと有るのでございますね。」

とお雪は膝に手を置いて、ものを思うごとく、じつと気を沈めて、念を入れて尋ねたの  
である。その時、白地の浴衣を着た、髪もやや乱れていたお雪の窶れた姿は、蚊遣の中に  
悄然として見えたが、面には一種不可言の勇氣と喜の色が微に動いた。

「おお、燻<sup>くすぶ</sup>る燻<sup>くすぶ</sup>る、これは耐<sup>たま</sup>りませぬ、お目の悪いに。」

一団の烟<sup>けぶり</sup>が急に渦<sup>うづま</sup>いて出るのを、掴<sup>つか</sup>んで投げんと欲<sup>ほつ</sup>するごとく、婆<sup>ばあ</sup>さんは手を掉<sup>ふ</sup>つた。風<sup>かぜ</sup>があたつて、※とする下火<sup>ぼつ</sup>の影<sup>かげ</sup>に、その髪<sup>かみ</sup>は白<sup>しろ</sup>く、顔<sup>かほ</sup>は赤<sup>あか</sup>い。黄<sup>たそがれ</sup>昏<sup>くれ</sup>の色<sup>いろ</sup>は一面<sup>いちめん</sup>に裏山<sup>うらやま</sup>を籠<sup>こ</sup>めて庭<sup>にわ</sup>に懸<sup>か</sup>れり。

若山<sup>わかしや</sup>は半面<sup>はんめん</sup>に団扇<sup>かざ</sup>を翳<sup>かざ</sup>して、

「当地<sup>こちら</sup>で黒百合<sup>くろひやくばら</sup>のあるのはどこだとか言<sup>い</sup>つたつけな。」

## 十八

「ねえ、お婆<sup>おばあ</sup>さん。」

お雪<sup>ゆき</sup>は、黒百合<sup>くろひやくばら</sup>が富山<sup>とみやま</sup>にある、場所<sup>ところ</sup>の答<sup>こた</sup>を、婆<sup>ばあ</sup>さんに譲<sup>ゆづ</sup>つて、其方<sup>そなた</sup>を見た。

湯<sup>ゆ</sup>の谷<sup>や</sup>の主<sup>ぬし</sup>は習<sup>おぼ</sup>わずして自<sup>おの</sup>から這<sup>しや</sup>般<sup>はん</sup>の間<sup>ま</sup>に応<sup>おこた</sup>ずべき、経<sup>きやう</sup>験<sup>げん</sup>と知<sup>ち</sup>識<sup>し</sup>とを有<sup>あ</sup>しているの、

「はい、石<sup>い</sup>滝<sup>わたき</sup>の奥<sup>おく</sup>には咲<sup>さ</sup>くそう<sup>そう</sup>でござります。」

若山<sup>わかしや</sup>は静<sup>しず</sup>かに目<sup>め</sup>を眠<sup>ね</sup>つたまま、

「どんな処<sup>ところ</sup>ですか。」

「螢の名所なのね。」とお雪は引取る。

「ええ、その入口迄は女子供も参りまする、夏の遊山場でな、お前様。お茶屋も懸かかつておりまするで、素そうめん麵、白玉、心こころてん 太ひやしものなど冷物もござりますが、一坂越えると、滝がござります。そこまでも夜分参るものは少い位で、その奥山と申しますと、今身を投げようとするものでも恐がつて入りませぬ。その中でなければ無いと申しますもの、とても見られますものではござりますまい。」婆さんは言つて、蚊遣あおを煽ぐ団扇の手を留めて、その柄つくばを踞つくばつた膝の上にする。

「それでは滝があつて螢の名所、石滝という処は湿地だと見えるね。」

「それはもう昼も夜も真まつくら暗でござります。いかいこと樹が茂つて、満月の時も光が射さすのじゃござりませぬ。」

一体いつでも小雨が降つておりますような、この上もない陰気な所で、お城の真ま北きたに当りますそんな。ちようどこの湯の谷とは両方の端で、こつちは南、田たん※ぼも広々としていあかるつも明あかるうござりますほど、石滝は陰気じやで、そのせいでもござりませぬようか、評判の魔ま所ところで、お前様、ついしか入つたものの無事に帰りました例ためしはござりませぬよ。」

「その奥に黒百合があるんですツて、」お雪は婆さんの言ことばを取つて、確めてこれを男に告



げた。

若山はややあつて、

「そりやきつとあるな、その色といい、形といい、それからその昔からの言い伝つたえで、何か黒百合といえは因縁事の絡まつわたつた、美しい、黒い、艶つやを持った、紫色の、物凄ものすじい、堅い花のように思われるのに、石滝という処は、今の談はなしでは、場処も、様子もその花があつて差支えないと考える。もつとも有ることはあるのだから、大方黒百合が咲いてるだろう。夏かげつ月花ありという時節もちょうど今なんだけれども、何かね、本当にあるものなら、お前さん、その嬢さんに頼まれたから、取りにでも行ゆこうというのか。」と落着いて尋ねて、渠かれは氣遣わしく傾いた。

「……………」お雪はふとその答に支つかえたが、婆さんはかえつて猶ためら予わらない。

「滅相な、お前様、この湯の谷の神様が使わつしやる、白い鳥が守ればと行って、若い女が、どうして滝まで行ゆかれますものか。取りにでも行く気かなぞと、問わつしやるさえ気が知れませぬてや。ぷツ、」と、おどけたような顔をして婆ばばは消えかかった蚊遣を吹いた。杉葉の瓦かわら鉢ばちの底に赤く残つて、烟けぶりも立たず燃え尽しぬ。

「お婆さん、御深切に難ありがと有う。」

とうつかり物思に沈んでいたお雪は、心着いて礼をいう。

「あいあい、何の。もう、お大事になされませ、今にまたあの犬を連れ来た可厭しいお客がござつて迷惑なら、私家へ来て、屈んで居ッさい。どれ、店を開けておいて、いかいと油を売つたぞ、いや、どツこいな。」と立つ。

## 十九

帰りたくなると委細は構わず、庭口から、とぼとぼと戸外へ出て行く。荒物屋の婆はこの時分から忙しい商売がある、隣の医者が家ばかり昔の温泉宿の名残を留めて、徒らに大構の癖に、昼も夜も寂莫として物音も聞えず、その細君が凶抜けて美しいといつて、滅多に外へ出たこともないが、向うも、隣も、筋向いも、いずれ浅間で、豆洋燈の灯が一ツあれば、襖も、壁も、飯櫃の底まで、戸外から一目に見透かされる。花売の娘も同じこと、いずれも夜が明けると富山の町へ稼ぎに出る、下駄の齒入、氷売、団扇売、土方日傭取などが、一廓を作した貧乏町。思い思い、町々八方へ散ばってるのが、日暮になれば総曲輪から一筋道を、順繰りに帰つて来るので、それから一時騒がしい。水を汲む、胡

瓜を刻む。俎板まないたとんとん庖丁ほうちょうチヨキチヨキ、出放題なまあくびな、生欠伸なまあくびをして大歎息おもてを発する。翌日あくるひの天気あまの噂うわさをする、お題目お題目を唱える、小児こどもを叱る、わツという。戸外おもてでは幼い声で、——螢来い、山見て来い、行燈あんどんの光をちよいと見て来い！

「これこれ暗くらくなった。天狗様てんぐさまが攫さらわつしやるに寝ねつしやい。」と帰途かえりがけに門かどぐち口ぐちで小児おこを威おどしながら、婆おばさんは留守留守にした己おのれの店みせの、草鞋わらじの下したを潜くぐつて入いつた。

草履わらじを土間どまに脱はいで、——渡わたり店みせの売物うりものに目めを配あると、真ま中なかに釣つした古いブリキの笠かさの洋燈ランブは暗くらいが、駄菓子だんごにも飴あめにも、鼠ねずみは着きかなかつた、がたりという音ねもなし、納戸なうどの暗くらがり暗は細流こまのような蚊かの声こゑで、耳みみの底そこに響こくばかりなり。

「可恐おそろしい唸うなりじやな。」と眩つぶやいて、一間けんぐち口ぐちの隔へだての障子しょうじの中なかへ、腰こしを曲まげて天窓あたまから入いると、

「おう、帰かえつたのか。」

「おや。」

「酷ひどい蚊かだなあ。」

「まあ、お前まえ様さま。まあ、こんな中なかに先刻さつきにからござらせえたか。」

「今いましがた。」

「暗いから、はや、なお耐<sup>たま</sup>りましねえ。いかなこツても、勝手に分らねえけりや、店の洋燈<sup>ひつぱす</sup>でも引外<sup>ひっぱす</sup>してござれば可<sup>よ</sup>いに。」

深切<sup>こごと</sup>を叱言<sup>こごと</sup>のごとくぶつぶつ言つて、納戸の隅の方をかさかさごそりごそりと遣る。

「可<sup>い</sup>いから、可<sup>い</sup>いから。」といつて、しばらくすると膝を立直した気勢<sup>けはい</sup>がした。

「近所の静まるまで、もうちつと灯<sup>あかし</sup>を点<sup>つ</sup>けないでおけよ。」

「へい。」

「覗<sup>のぞ</sup>くと煩<sup>うるせ</sup>いや。」

「それでは蚊帳を釣つて進ぜましょ。」

「何、おいら、直ぐ出掛けようかとも思つてるんだ。」

「可<sup>い</sup>いようにさつしやりませ。」

「ああ、それから待ちねえこうだと、今に一人此家<sup>ここ</sup>へ尋ねて来るものがあるんだから、頼むぜ。」

「お友達かね。お前様は物事<sup>ものずき</sup>じゃで可<sup>よ</sup>いけれど、お前様のような方のお附合なさる人は、から、入つてしばらくでも居られます所じゃあござりませぬが。」

「言<sup>い</sup>いも終らず、快活に、」

「気扱いがいる奴じやねえ、汚え婦人よ。」

「おやー」と頓興にいった、婆の声の下にくすくすと笑うのが聞える。

「婆ちゃん、おくんな。」と店先で小児の声、繰返して、

「おくんな。」

「おい。」

「静に………」といて、暗中の客は寝転んだ様子である。

二十

婆が帰った後、縁側に身を開いて、一人は柱に凭つて仰向き、一人は膝に手を置いて俯向いて、涼しい暗い処に、白地の浴衣で居た、お雪は、突然驚いたようにいった。

「あれ星が飛びましたよ。」

湯の谷もここは山の方へ尽の家で、奥庭が深いから、傍の騒しいのにもかかわらず、森とした藪蔭に、細い、青い光物が見えたので。

「ああ、これから先はよくあるが、淋しいもんだよ。」

と力なげに団扇持った手を下げて、

「今も婆さんが深切に言ってくれたが、お雪さん、人が悪いという処へ推して行くのは不可ない。何も、妖物ばけものが出るの、魔が掴むつかものということは、目の前にあるとも思わないが、昔からまるで手も足も入れない処じやあ、人の知らない毒虫が居て刺そうも知れず、地のつち工合ぐあいで踏むふと崩れるようなことがないとも限らないから。」

「はい、」

「行く気じやあるまいね。」とやや力を籠めて確めた。

「はい、」と言懸けて、お雪は心に濟まない様子で後を言い残して黙ったが、慌あわただしく、

「蛸たこです。」

衝つと立った庭の空を、つらつらと青い糸を引いて、二筋に見えて、一つ飛んだ。

「まあ、珍らしい、石滝から参りました。」

この辺あたりに蛸たこは珍らしいものであった、一つ一つ市中へ出て来るのは皆石滝から迷うて来るのだといひ習わす。人に狩り取られて、親がないか、夫がないか、孤みなしご、孀婦やもめ、あわれなのが、そことも分かず彷徨さまよつて来たのであろう。人可懐なつかしげにも見えて近々と寄つて来る。お雪は細い音ねに立てて唇を吸つて招きながら、つかつかと出て袂たもとを振った、横ぎる光の蛸

の火に、細い姿は園生そのうにちらちら、髪も見えた、仄ほのかに雪なす顔を向けて、  
 「団扇を下さいなちよいと、あれ、」と打つ。螢は逸それて、若山が上の廂ひさしに生えた一八いちはつの中に軽く留かろまつた。

「さあ、団扇、それ、ははは……大きな女の嬰兒あかさんだな。」と立ちも上らず坐つたまま、縁側から柄ばかり庭の中へ差向けたが、交際つきあいにも螢かといつて発奮はげみはせず、動悸どうきのするまで立廻つて、手をすべにらした、螢は、かえつてその頭の上を飛ぶものを、振仰いで見ようともせぬ、男の冷ひややかさ。見当違いに団扇を出して、大きな嬰兒あかんぼだといつて笑つたが、声も何となくもの淋しい。お雪は草の中にすつくと立つて、じつと男の方を視ながめたが、爪つまぎ先さきを軽く、するすると縁側に引返ひっかえして、ものありげに——こうつんとした事は今までにはなかつたが——黙つて柄の方から団扇を受取り、手を返して、爪立つまだつて、廂を払うと、ふツと消えた、光は翻ひるがえした団扇の絵の、滝の上を這ほうてその流ながれも動く風情。  
 お雪は瞻みまもつて、吻ほっと息を吐ついて、また腰を懸けて、黙つて見ていた、目を上げて、そと男の顔を透かしながら、腰を捻ねじて、斜ななめに身を寄せて、件くだんの団扇を、触らぬように、男の胸の辺りへ出して、

「可愛いでしょう、」といった声も尋常ただならず。

「何か、石滝の螢か、そうか。」といって若山は何ともなしに微笑ほほえんだが、顔は園生の方を向いて、あらぬ処を見た。涼しい目はぱつちりと開いていたので、螢は動いた。団扇は揺れて、お雪の細い手は震えたのである。

## 二十一

「歩きますわ、御覧なさいな。」と沈んだ声でいいながら、お雪は打動かす団扇の蔭から、儚はかない一点の青い灯ともしで、しばしば男の顔を透かして差さ覗のぞく。

男はこの時もう黙ってしまい、顔を背けて避よけようとするのを、また、

「御覧なさいな、」と、人知れずお雪は涙なみだ含んで、見る見る、男の顔の色は動いた。はッと思うと、

「止せ！」

若山は掌てのひらをもてはたと払ったが、端はしなく団扇を打って、柄は力のない手を抜けて、庭に落ちた。

「あれ、」といってお雪は顔を見ながら、と胸を衝ついて背後うしろに退する。



渠は膝を立直して、

「見えやあしない。」

「ええ！」

「僕の目が潰れたんだ。」

言いさま整然として坐り直る、怒気満面に溢れて男性の意気熾に、また仰ぎ見ることが出来なかつたのであろう、お雪は袖で顔を蔽うて俯伏になつた。

「どうしたならどうしたと聞くさ、容体はどうです目が見えないか、と打出して言えば可い。何だつて、人を試みるようなことをして困らせるんだい、見えない目前へ螢なんか突出して、綺麗だ、動く、見ろ、とは何だ。残酷だな、無慈悲じゃあないか、星が飛んだの、螢が歩くのと、まるで翩るようなもんじゃあないか。女の癖に、第一失敬ださ。」

と、声を鋭く判然と言ひ放つ。言葉の端には自から、かかる田舎にこうして、女の手に養われていらるべき身分ではないことが、響いて聞える。

「そんな心懸じゃあ盲目の夫の前で、情郎と巫山戯かねはしないだろう。厭にな

つたらさつぱりと突出すが可いじやあないか、あわれな情ないものを捕えて、苛めるなあ残酷だ。また僕も苛められるようなものになつたんだ、全くのこつた、僕はこんな所にお前様まえさんほどの女が居ようとは思わなんだ。気の毒なほど深切にされる上に、打明けていえば迷わされて、疾く身を立てよう、行末を考えようと思ひながら、右を見ても左を見ても、薬屋の金持か、せいぜいが知事か書記官の居る所で、しかも荒物屋の婆さんや近所の日傭ひや取とにばかり口を利いて暮すもんだからいつの間にか奮発ふんぱつ気がなくなつて、引込思案になる所へ、目の煩わづらひを持込んで、我ながら意気地はない。口へ出すのも見ともないや。お前さんに優しくされて朝晩にや顔を見て、一所に居るのが嬉しくツて、恥も義理も忘れたそうだ。そつちじゃあ親はなし、兄あにさんは兵に取られているしよ、こういつちやあ可笑おかしいけれども、ただ僕を頼たよりにしている。僕はまた実際つえ杖とも柱とも頼まれてやる気だもんだから、今目が見えなくなつたといつちやあ、どんなに力を落すだろう。お前さんばかりじゃない、人のことより僕だつて大変だ。死んでも取返しとがのつかないほど口惜しいから、心にだけでも盲目めくらになつたと思うまい、目が見えないたあいうまいと、手探てさぐりの真似もしないで、苦しい、切ない思おもをするのに、何が面白くツてそんな真似をするんだな。されるのはこつちが悪い、意気地なしのしみつたれじやアあるけれども。」

お雪の泣声が耳に入ると、若山は、口に蓋ふたをされたようになって黙った。

## 二十二

「お雪さん。」

ややあつて男は改めて言つて、この時はもう、声も常の優しい落着いた調子に復し、

「お雪さん、泣いてるんですか。悪かった、悪かった。真まことを言えばお前さんに心配を懸けるのが気の毒で、無暗むやみと隠していたのを、つい見透かされたもんだから、罪なことをすると思つて、一刻に訳も分らないで、悪いことをいった。知つてる、僕は自分極ぎめかも知らないが、お前さんの心は知つてる意つもりだ。情無い、もう不具かたわこんじょう根性こんじょうになつたのか、僻ひがみも出て、我儘わがままか知らぬが、くさくさするので飛んだことをした、悪く思わないでおくれ。」

その平生ふだんおこないの行は、蓋けだし無言にして男の心を解くべきものがあつたのである。お雪は声を呑んで袂たもとに食着くはいていたのであるが、優しくされて気も弛ゆるんで、わつと嗚咽おえつして崩折くずおれたのを、慰められ、賺すかされてか、節も砕けるほど身に染みて、夢中に躡にじり寄り寄る男の傍そば。思はずすが縋すがる手を取られて、団扇は庭に落ちたまま、お雪は、潤んだ髪かみの濡れた、恍惚うっとりした顔

を上げた。

「貴方、」

「可いよ。」

「あの、こう申しますと、生意気だと思いなさいませうが、」

「何、」

「お気に障りましたことは堪忍して下さいまし、お隠しなさいますお心を察しますから、つい口へ出してお尋ね申すことも出来ませんし、それに、あの、こないだ総曲輪でお転びなすった時、どうも御様子が解りません、お湯にお入りなさいましたとは受取り難うございますもの、往來ですから黙って帰りました。が、それから氣を着けて、お知合のお医者様へいらつしやるといふのは嘘で、石滝のこちらのお不動様の巖窟の清水へ、お頭を冷しにおいでなさいますのも、存じております。不自由な中でございますから、お怨み申しました処で、唯今はお薬を思うように差上げますことも出来ませんが、あの……」

と言懸けて身を正しく、お雪はあたかも誓うがごとくに、

「きつとあの私が生命に掛けましても、お目の治るようにして上げますよ。」と仇気なく、しかも頼母しくいったが、神の宣託でもあるように、若山の耳には響いたのである。

「気張っておくれ、手を合わせて拝むといつても構わんな。実に、何だ、僕は望のぞみがある、惜おしい体だ。」といって深く溜息を吐ついたのが、ひしひしと胸にこたへた。お雪は疑わず、勇ましげに、

「ええ、もう治りますとも。そして目が開いて立派な方におなりなさいましても、貴方、」  
「何だ。」

「見棄てちゃあ、私は厭いや。」

「こんな世話になつた上、まだ心配を懸かげさせる、僕のようなものを、何だって、また、そういうことを言うんだらう。」

「ふ、」と泣くでもなし、笑うでもなし、極きまり悪げに、面を背けて、目が見えないのも忘れ  
たらしい。

「お雪さん。」

「はい。」

「どうしてこんなになつたらう、僕は自分に解らないよ。」

「私にも分りません。」

「なぜだらう、」

莞爾にっこりして、

「なぜでしょうねえ。」

表の戸をがたりと開けて、横柄に、澄して、

「おい、」

二十三

声を聞くとお雪は身を窘すくめて小さくなった。

「居るか、おい、暗いじゃないか。」

「唯今、」

「真暗まつくらだな。」

例の洋杖ステッキをこつこつ突いて、土間に突つつたのは島野紳士。今めかしくいうまでもない、富山の市まちで花を売る評判の娘に首つ丈であったのが、勇美姫おん目を懸おけさせたまうので、毎日のように館やかたに来る、近々と顔を見る、口も利くというので、思おもいが可恐おそろしくなるおと、この男、自分では業なりひら平ひらなんだから耐たまらない。

花屋の庭は美しかろう、散歩の時は寄ってみるよ、情郎は居ないか、その節邪魔にすると棄置かんよ、などと大上段に斬込んで、臆面もなく遊びに来て、最初は娘の謂うごとく、若山を兄だと思っていた。

それ芸妓の兄さん、後家の後見、和尚の姪にて候ものは、油断がならぬと知っていたが、花売の娘だから、本当の兄もあるだろうと、この紳士大ぬかり。段々様子が解つてみると、瞋恚が燃ゆるようなことになったので、不埒でも働かれたかのごとく憤り、この二日は来るごとに、皮肉を言ったり、当擦ったり、つんと拗ねてみたりしていたが、今夜の暗いのはまた格別、大変、吃驚、畜生、殺生なことであつた。

かつてまた、白墨狂士多磨太君の説もあるのだから、肉が動くばかりしばしも耐らず、洋杖を握占めて、島野は、

「暗いじゃあないか、おい、おい。」とただ忙る。

「はい、」と潤んだ含声の優しいのが聞えると、※と摺附木を摺る。小さな松火は真暗な中に、火鉢の前に、壁の隅に、手拭の懸つた下に、中腰で洋燈の火屋を持つたお雪の姿を鮮麗に照し出した。その名残に奥の部屋の古びた油団が冷々と見えて、突抜けの縁の柱には、男の薄暗い形が顕われる。

島野は睨み見て、洋杖と共に真直に動かさず突立つ。お雪は小洋燈に灯を移して、摺附木を火鉢の中へ棄てた手で鬢の後毛を搔上げざま、向直ると、はや上框、そのまま忙しく出迎えた。

ちよいと手を支いて、

「まあ、どうも。」

「……………」島野は目の色も尋常ならず、尖った鼻を横に向けて、ふんと呼吸をしたばかり。

「失礼、さあ、お上りなさいまし、取散らかしまして、汚穢うございますが、」と極り悪げに四辺をすのを、後の男に心を取られてするように悪推する、島野はますます憤つて、口も利かず。

(無言なり。)

「お晩うございましたのね。」と何やらつかぬことを言つて、為方なしにお雪は微笑む。

「お邪魔をしましたな。」という声ぎつすりとして、車の輪の軋むがごとく、島野は決する処あつて洋杖を持換えた。

「お前ねえ、」



邪氣おのず自はだえから膚をを襲うて、ただは濟みそうにもない、物ありげに思い取られるので、お雪は薄やす気味悪く、易やすからぬ色ををして、

「はい。」

「あのな、」と重々しく言い懸けて、じろじろと顔を見る。

「どうぞ、まあ、」

「入いつちやあおられん。」

「どちらへか。」

「なあに。」

「お急いそぎでございますか。」と畳たたに着きく手も定さだまらない。

「ちよつと出いてもらおう、」

「え、え。」

「用もちがあるんだ。」

「後を頼むとつて、お前様、どこさ行かつしやる。」

ちよいとどうぞと店前から声を懸けられたので、荒物屋の婆は急いで蚊帳を捲つて、

店へ出て、一枚着物を着換えたお雪を見た。繻子の帯もきりりとして、胸をしつかと下メ

《したじめ》に女扇子を差し、余所行の装、顔も丸顔で派手だけれども、気が済まぬか悄

然よんぼり しているのであった。

「お婆さん、私は直帰るんですが、」

「あい、」

「どうぞねえ、」と何やら心細そうに氣に懸ると、老人の目も敏く、

「内方にや御病気なり、夜分、また、どうしてじゃ。総曲輪へ芝居にでも誘われさせえ

たか。はての、」

と目を遣ると、片蔭に洋服の長い姿、貧乏町の埃が懸るといったように、四辺を払つて

島野がイむ。南無三悪い奴と婆さんは察したから、

「何にせい、夜分出歩行くのは、若い人に良くないてや、留守の氣を着けるのが面倒なで

はないけれども、大概なら止にさつしやるが可かろうに。」

と目で知らせながら、さあらず言う。

「いえ、お召なでございます。四十物町のお邸あえものちようから、用があるツて、そう有仰おっしやの  
でございますから。」

「四十物町のお花主とくぬいというと、何、知事様のお邸だツけや。」

「お嬢様が急に、御用がおあんなさいますツて。」

「うんや、善くないてや。お前様が行く気でも、私わしが留めます。お嬢様の御用とつて、お前、医者じゃあなし、駕籠屋かごやじゃあなし、差迫つた夜の用はありそうもない。大概の事は夜が明けてからする方が仕損じが無いものじゃ。若いものは、なおさら、女じゃでの、はて、月夜に歩いてさえ、美しい女の子は色が黒くなるという。」

「はい、ですけれども。」

「殊やみに闇じや、狼あとが後を跟けるでの、たつて止めやにきつせえよ。」と委細は飲込んだ上、そこらへ見当を付けたので、婆としよりさんは聞えよがし。

島野は耐えかねてずツと出て、老人には目も遣らず、

「さあ、」

「……………」黙うつぶつて俯向く。

「おい、」とちと大きくいつて、洋杖ステッキでこと、こと、こと。

お雪は覚悟をした顔を上げて、

「それじゃあお婆さん。」

「待たつせえ、いや、もし、お前様、もし、旦那様。」

顧みもせず島野は、己<sup>おれ</sup>ほどのものが、へん、愚民にお言葉を遣わさりようや！

婆さんも躍<sup>やつき</sup>気になつて、

「旦那様、もし。」

「おれか。」

「へい、婆<sup>ばば</sup>がお願<sup>ねがい</sup>でござります、お雪が用は明日のことになされ下さりませ。内には目の不自由な人もござりますし、四十物町までは道も大分でござりますで。」

「何だ、お前は。」

「へい、」

「さあ、行こう。」

お雪は黙つて婆さんの顔を見たが、詮<sup>せん</sup>方<sup>かた</sup>なげで哀<sup>あわれ</sup>である。

「お前様、何といつても、」と空しく手を掉<sup>ふ</sup>つて、伸上つた、婆は縫<sup>すがり</sup>着<sup>りつ</sup>いても放したくない。

「知事様のお使だ。」と島野が舌打して言った。

これが代官様より可恐おそろしく婆の耳には響いたので、目を睜みはつて押黙る。

その時、花屋の奥で、凜りんとして澄んで、うら悲しく、

くもはしんれいによこたわつていえずくにかある  
雲 横 秦 嶺 家 何在

ゆきはらんかんをようしてうますすまず  
雪 擁 藍 関 馬 不前

と、韓 湘かんしょうが道術をもつて牡丹花の中に金字で躡あらかしたという、一聯れんの句を口吟くちんむ若山の声が聞えて止やんだ。

お雪はほろりとしたが、打仰いで、淋しげに笑つて、

「どうぞ、ねえ。」

## 二十五

恩ひいさまになる姫様、勇美子が急な用というに悖さからい得ないで、島野に連出されたお雪は、屠と所の羊あゆみの歩しよ。

「どういふ御用なんでしょう。いつも御鼻ごひいき痕になりますけれども、つい、お使な

んぞ下さいましたことはございませぬのに、何でしょうね、馴れませぬこつてすから、胸がどきどきして仕様がありません。」

島野は澄まして冷かに、

「そうですか。」

「貴下御存じじゃあないのですか。」

「知らないね。」と気取った代脈が病症をいわぬに齊しい。

わざと打解けて、底気味の悪い紳士の胸中を試みようとしたお雪は、取附島もなく悄然で黙った。

二人は顔を背け合つて、それから総曲輪へ出て、四十物町へ行こうとする、杉垣が挟んで、樹が押被さつた徑を四五間。

「兄さんに聞いたら可からう。」島野は突然こう言つて、ずつと寄つて、肩を並べ、

「何もそんなに胸までどきつかせるには当らない、大した用でもなからうよ。たかがお前この頃情人が出来たそうだね、お目出度いことよ位なことを謂われるばかりさ。」

「厭でございます。」

「厭だつて仕方がない、何も情人が出来たのに御祝儀をいわれるたつて、弱ることはない

じゃあないか。ふん、結構なことさね、ふん、

と呼吸がはずむ。

「ほんとうでございますか。」

「まったくよ。」

「あら、それでは、あの私は御免蒙りますよ。」

お雪は思切つて立停たちどまった、短くさし込んだ胸の扇もきりりとする。

「御免蒙るツて、来ないつもりか。おい、お嬢様が御用があるツて、僕がわざわざ迎むかに来たんだが、御免蒙る、ふん、それで可いいのか。——御免蒙る——」

「それでも、おなぶり遊ばすんですもの、私は辛わたくしうございます。」

「可いさ、来なけりや可いさ、そのかわり、お前、知事様のお邸とは縁切だよ。宜よかろう、毎日の米の代といつても差支えない、大切なお花主とくを無くする上に、この間から相談のある、黒百合の話も徒ふ為いになりやしないかね。仏蘭西フランスの友達に贈るのならばつて、奥様も張込んで、勇美さんの小遣にうんと足して、ものの百円ぐらいは出そうという、お前その金か子は生命いのちがけでも欲ほいのだろう、どうだね、やっぱり御免を蒙りまするかね。」とって、にやにやと笑いけり。





「心得てるさ、ちつとも気あつかいのいらないうように万事取計らうから可いよ。向うが空屋きやで両隣はたけが畠つんぼでな、聾つんぼの婆おばさんが一人で居るといふ家が一軒、……どうだね、」と物凄ものすごいことをいう。この紳士は権柄けんべいずくにおためごかしを兼ねて、且つ色男いろおとこなんだから極めて計らいにくいのであります。

勇美子の用でも何でもない。大方こんなこととは様子にも悟っていたが、打着うけに言われたので、お雪も今更いまぎよつとした。

「路みちも遠とほうございますから、晩おそくなりましょう、直ぐあの、お邸おやしの方へ参まゐつちやあ不可いませんか。」

「何、遠慮えんりょすることはないさ。」

これだもの。……………

「いいえ、」といったばかり。お雪は遁にげ帰かえる機きつ掛かけもなし、声を立てる数すうでもなし、理窟わけをいふ分わけにも行ゆかず、急にお腹なかが痛いたむでもない。手もつけられねば、ものも言われず。徑こみちややその半なかばを過ぎて、総曲輪そうまがらに近ちかくなると、島野しまのは莞爾にこやかに見返みかえって、

「どうだ、御飯ごはんでも食べて、それからその家うちへ行くでしょうか。」

お雪はものもい得ない。背後うしろから大きな声で、

「奢おごれ奢おごれ、やあ、棄置おしかれん。」と無遠慮むえんりょに喚わめいてぬいと出た、この野面のづらを誰とかがする。白薩摩びやくさくまの汚れた単衣ひとえ、紺染こんぞうりの兵子帯へこおび、いが栗天窓ぐりあたま、団栗目どんぐりめ、ころころと肥えて丈の低ひきが、藁草履わらぞうりを穿うがちたる、豈あにそれ多磨太たまごにあらざらんや。

島野は悪い処へ、という思おも入いれあり。

「おや、どちらへ。」

「ははあ、貴公と美人とが趣く処へどこへなと行くで。奢れ！ 大分ほつついたで、夕飯の腹も、ちようど北山とやらじゃわい。」

「いいえさ、どこへ行くんです。」と島野は生真面目きまじめになつて押えようとする、と肩を揺ゆつて、

「知事が処じゃ。」

「今ツからね。」

「うむ、勇美子さんが来てくれいと言うものじゃでの。」

「へい、」と妙な顔をする。

多磨太、大得意。

「何よ、また道寄も遣らかすわい。向うが空屋で両隣は畠だ、甕の婆が留守をしとる、ちつとも氣遣はいらんのじや、万事私が心得た。」

「驚いたね。」

「どうじや、恐入ったか。うむ、好事魔多し、月に村雲じやろ。はははは、感多少かい、先生。」

「何もその、だからそういつたじやアありませんか。君、僕だけは格別で。」

「豈しからん、この美肉をよ、貴様一人で賞翫してみい、たちまち食傷して生命に係るぞ。じやから私が注意して、あらかじめ後を尾けて、好意一足の藁草履を齎らし来った訳じや、感謝して可いな。」

島野は苦々しい顔色で、

「奢ります、いずれ奢るから、まあ、君、君だつて、分つてましよう。それ、だから奢りますよ、奢りますよ。」

「豚肉は不可ぞ。」

「ええ、もうずっとそこん処はね。」

「何、貴様のずつとはずつと見当が違うわい。そのいわゆるずつとというのは軍鶏なんじ



やあ埒明かん、さあ前へ行ね、貴公。美人は真中よ、私は殿を打つじや、早うせい。」  
 島野は堪りかねて、五六歩傍へ避けて目で知らせて、

「ちよいと、君、雀部さん、ちよいと。」

「何じや、」と裾を掴み上げて、多磨太はずかずかと寄る。

島野は真顔になつて、口説くように、

「かねて承知なんじやあないか、君、ここは一番粹を通して、ずっと大目に見てくれない  
 じやあ困りますね。」と情なそうにいった。

「どうするんかい、」

「何さ、どうするツて。」

「貴公、どこへしよびくんじや、あの美人をよ、巧く遣りおるの。うう、」と団栗目を細  
 うして、変な声で、えへ、えへ、えへ。

「しよびくたつて何も君、まつたくさ、お嬢さんが用があるそうだ。」

「嘘を吐けい、誰じやと思うか、ああ。貴公目下のこの行為は、公の目から見ると拐  
 帯じやよ、詐偽じやな。我輩警察のために棄置かん、直ちに貴公のその額へ、白墨で、  
 輪を付けて、交番へ引張るでな、左様思え、はははは。」

「串戯をいつちやあ不可ません。」

「何、構わず遣るぞ。癪じや、第一、あの美人は、私が前へ目を着けて、その一挙一動を探つて、兄じやというのが情男なことまで貴公にいうてやった位でないかい。考えてみい、いかに慇懃を通じようといつて、貴公ではと思うで、なぶる気で打棄つておいたわ。今夜のように連出されては、こりやならんわい。向へ廻つて断乎として妨害を試みる、汝にジャムあれば我に交番ありよ。来るか、対手になるか、来い、さあ来い。両雄並び立たず、一番勝敗を決すべい。」

と腕まくりをして大乘氣、手がつけられたものではない。島野もここに至つて、あきらめて、ぐツと碎け、

「どうです、一ツ両雄並び立とうではありませんか、ものは相談だ。」と思切つていう。多磨太は目を睜つて耳を聳てた。

「ふむ、立つか、見事両雄がな。」

「耳を、」肩を取つて、口をつけ、二人は木の下蔭に囁を交え、手を組んで、短いのと、長いのと、四脚を揃えたのが仄かに見える。お雪は少し離れて立って、身を切裂かるる思いである。

当座の花だ、むずかしい事はない、安泊へでも引摺込んで、裂くことは出来ないが、美人の身体を半分ずつよ、よ、よの令息と、よ、よの親類とで慰むのだ。土民の一少婦美なりといえどもあえて物の数とするには足らぬ。

「ね、」

（笑つて答えず。）

多磨太は頷いて身を退いて、両雄いい合わせたように屹とお雪を見返つた。径に被さつた樹々の葉に、さらさらと渡つて、裾から、袂から冷々と膚に染み入る夜の風は、以心伝心二人の囁を伝えて、お雪は思わず戦慄とした。もう前後も弁えず、しばらくも傍には居たたまらなくなつて、そのまま、

「島野さん、お連様もお見え遊ばしたし、失礼いたしますから、お嬢様にはどうぞ、」も震え声で口の裡、返事は聞きつけしないで、引返そうとする。

「待ちなさい、」

「待て、おい、おい、おい、待て！」といいさま追い縋つて、多磨太は警部長の令息であるから傍若無人。

「あれ、」と遁げにかかる、小腕をむずと取られた。形も、振も、紅、白脛。

## 二十八

「腕もがくない、ぼった、わはは、はは、」多磨太は容赦なくそのいわゆる小羊を引立ひつたてた。

「あれ、放して、」

「おい、声を出しちやあ不可いかん、黙もくつていな、優おとなしくしてついてお出いで。あれそれ謂いつちやあ第一何だ、お前の恥だ。往来で見ツともない、人が目をつけて顔を見るよ。」と島野は落着いたものである。多磨太は案を拍うたないばかりで、

「しかり、あきらめて覚悟をせい。魚うおの中なかでも鯉こいとなると、品格が可かいでな、俎まなに乗のると撥はねんわい。声を立てて、助かろうと思おもうても埒らち明あかんよ。我輩わがあえて憚はばらず、こうやつて手を握にぎつたまま十字街頭を歩あくんじや。誰たれでも可かい、何なにをすると咎とがめりや、黙もくれとくらわす。此女こいつ取とり調しらべの筋すぢがあるで、交番ひつたまで引立ひてる、私わしは雀部すずめじやというてみい、何奴どいつもひよこひよここと米搗虫こめつきむしよ。」

「呑気呑なものさね、」と澄あまし切きつて、島野は会心の微笑ほほえを浮うべた。

「さあ、行いこう、何も冥途めいどへ連れて行くんじやあないよ。謂いわばまあ殿様のお手が着きくと



いったようなものさ。どうして雀部や私を望んだって、花売なんぞが、口も利かれるもんじゃあない、難有く思うが可いさ。」

法学生の墮落したのが、上部を繕つてる衣を脱いだ狼と、虎とで引挟み、縛つて宙に釣つたよりは恐しい手籠の仕方。そのまま歩き出した、一筋路。少い女を真中に、漢が二人要こそあれと、総曲輪の方から来かかつて歩を止め、間を置いて前屈みになって透かしたが、繻子の帯をぎゅうと押えて呑込んだという風で、立直つて片蔭に忍んだのは、前夜榎の下で、銀流の粉を売つた婦人であつた。

お雪は呼吸さえ高うはせず、氣を詰めて、汗になつて、

「まあ、この手を放して、ねえ、手を放して、」と漫である。

「可いわ、放すから遁げちやあならんぞ、」

「何、逃げれば、捕える分のことさ、」

あらかじめ因果を含めたからと、高を括つて、手を放すと半ば夢中、身を返して湯の谷の方へ走ろうとする。

「やい、汝！」

藁草履を蹴立てて飛着いて、多磨太が暗まぎれに搔掴む、鉄拳に握らせて、自若

として、少しも騒がず、

「色男！」といつて呵々からからと笑つたのは、男の声。呆れて棒立になつた多磨太は、余りのことにその手を持つたまま動かず、ほとんど無意識に窘すくんだ。

「島野か、そこに居るのは。島野、おい、島野じゃないか。」

紳士はぎよつとして、思わず調子はずれに、

「誰だ、誰です。」

「己おいらだ、滝だよ。おい、ちよいと誰だか手を握つた奴があるぜ。串じょうだん戯ごじゃあない、気味が悪いや、そういつてお前放さしてくんな。おう、後生大事と握つてやがらあ。」

先刻さつき荒物屋の納戸で、媪おんなと蚊の声の中に言ことばを交えた客はすなわちこれである。媪は、誰とも、いかなる氏素性の少年とも弁えぬが、去年秋銃獵の途みちすがら次、渋茶を呑みに立寄つて以来、婆うちや、家は窮屈しかたで為方がねえ、と言つては、夜昼寛くつろぎに来るので、里の乳母のように心安くなつた。ただ風変りな貴公子だとばかり思つてはいるが、——その時お雪が島野に引出されたのを見て、納戸へ転ころげこ込んで胸を打つて歎くので、一人の婦人おんなを待つといつて居合させたのが、笑いながら駆出して湯の谷すくいから救すくいに来たのであつた。

子爵千破矢滝太郎は、今年が十九で、十一の時まで浅草俵町たわらまちの質屋の赤煉瓦あかれんがと、屑屋くずやの横窓との間の狭い路地を入った突当りの貧乏長家に育つて、納豆を食い、水を飲み、夜はお稻荷いなりさんの声を聞いて、番太の菓子かしを嚙かじつた江戸児えどこである。

母親と祖父じいとがあつて、はじめは、湯島三丁目ゆじまさんぢょうめに名高い銀杏いちょうの樹に近い処に、立派な旅籠屋兼帯はたしやの上等下宿、三階造ぶくりやかたの館の内に、地方から出て来る代議士、大商人おおあきんどなどを宿して華美はでに消光くくろしていたが、滝太郎が生れて三歳みつになつた頃から、年紀としはまだ二十四であつた、若い母親が、にわかには嫌いだ、虫が好かぬ、一所の内に居ると頭痛がするといい出して、地方の客の宿泊をことごとく断つた。神田の兄哥あにい、深川の親方が本郷へ来て旅籠を取る数かずではないから、家業はそれつきりである上に、俳優やくしやくるい狂を始めて茶屋小屋入ばいりをする、角力すもうとり取、芸人を引張ひっぱりこ込んで雲井を吹かす、酒を飲む、骨牌かるたもてあそを弄ぶ、爪弾つまびきを遣る、洗髪あらいがみの意気な半纏はんでんぎ着で、晩方からふいと家を出ては帰らないという風。滝太郎の祖父じいは母親には継父であつたが、目を閉じ、口を塞ふさいでもの言わず、するがままにさせておくと、瞬まく内に家も地所も人手に渡つた。謂いうまでもなく四人の口を過ごごし

かねるようになったので、大根畠に借家して半歳ばかり居食いぐいをしたが、見す見す体かんなに飽あ懸かけて削り失なくすようなものであるから、近所では人目がある、浅草へ行つて蔵前辺に屋台店でも出してみよう、煮込おでんの汁つゆを吸つても、渴かつえて死ぬには増ましだという、祖父の繰廻ぐるぐるしで、わずか残つた手廻てまわりの道具を売つて動うごきをつけて、その俵町の裏長屋へ越して、祖父は着馴きなれぬ半纏はんてんぎ被かに身を窶やつして、孫の手を引きながら佐竹ヶ原から御徒町おかちまちあたり辺の古道具屋を見歩いたが、いづれも高直たかねで力及ばず、ようよう竹町の路地の角に、黒板塀くろいつに附着くつけて売物という札を貼はつてあつた、屋台を一個、持主の慈悲で負けてもらつて、それから小道具を買揃そろえて、いそいそ俵町に曳ひいて帰ると、馴なれないことで、その辺の見計いはしておかなかつた、件くだんの赤煉瓦と横窓との間の路地は、入口が狭いので、どうしても借家まで屋台を曳込ひきこむことが出来ないで、そのまま夜一夜置いたために、三晩とは措おかず盗まれてしまったので、祖父は最後の目的の水の泡になったのに、落胆して煩わづらひいたが、滝太郎の舌が廻まつて、祖父ちゃん祖父ちゃん、というのを聞いて、それを思出に世を去さつた。

後は母親が手一ツで、細い乳を含めて遣やる、幼おきなご児が玉のような顔を見ては、世に何等かの大不平あつてしかりしがごとき母親が我慢の角も折れたかして、涙で半襟の紫の色の

褪せるのも、汗で美しい襦袢しゅばんの汚れるのも厭いとわず、意とせず、些々ささたる内職をして苦勞くろうをし抜いて育てたが、六ツ七ツ八ツにもなれば、膳ぜんも別にして食べさせたいので、手内職では追おっ着かないから、世話をするものがあつて、毎日吾妻橋を越して一製糸場あるに通つてた。

留守になると、橋手前には腕わん白盛はくさかりの滝太一人、行儀をしつけるものもなし、居まわりが居まわりなんで、鼻緒を切らすと跣足はだしで駆歩かけある行く、袖が切れれば素裸すっぱだかで躍出る。砂を掴つかむ、小砂利を投げる、溝泥どぶどろを搔廻かきまわす、喧嘩けんかはするが誰も味方をするものはない。日が暮れなければ母親は帰らぬから、昼の内は孤児みなしご同様。親が居ないと侮あやつて、ちよいと小遣てあいでもある徒あは、除物のけものにして苛いじめるのを、太腹ふとツばらの勝気かたげでもものともせず、愚図ぐず々ずいと、まわらぬ舌で、自分が仰向あおむいて見るほどの兄哥あにいに向つて、べらぼうめ！

## 三十

その悪戯いたずらといつたらない、長屋内は言うに及ばず、横町裏町まで刎はね廻つて、片時の間も手足を静しづとしてはいないから、余りその乱暴を憎にくらしがる女房かみさん達は、金魚だ金魚だと

そうだった。蓋し美しいが食えないという意だそうな。

滝太はその可愛い、品のある容子に似ず、また極めて殺伐で、ものの生命を取ることを事ともしない。蝶、蜻蛉、蟻、蚯蚓、目を遮るに任せてこれを屠殺したが、馴るるに従うて生類を捕獲するすさみに熟して、蝙蝠などは一たび干棹を揮えば、立処に落ちたのである。虫も蛙となり、蛇となつて、九ツ十ウに及ぶ頃は、薪雑棒で猫を撃つて殺すようになった。あのね、ぶん撲るとね、飛着くよ。その時は何でもないので、もうちツと酷くくわすと、丸ツこくなつてね、フツてんだ。呻つておつかねえ目をするよ、恐いよ。そこをも一ツ打つところりと死ぬさ。でもね、坊はね、あのはじめの内は手が震えてね、そこで止しちやツたい。今じゃ、化猫わけなしだと、心得澄したもので。あれさ妄念が可恐しい、化けて出るからお止しよといえ、だから坊はね、おいらのせいじやあないぞツて、そう言わあ。滝太郎はものの命を取る時に限らず、するな、止せ、不可いと人のいうことをあえてする時は、手を動かしながら、幾たびも俺のせいじやないぞと、口癖のようにいつも言う。

井戸端で水を浴びたり、合長屋の障子を、ト睡で破いて、その穴から舌を出したり、路地の木戸を石碓でこつこつやつたり、柱を釘で疵をつけたり、階子を担いで駆出すやら、

地踏鞴を踏んで唱歌を唄うやら、物真似は真先に覚えて来る、喧嘩の相手は泣かせて帰る。ある時も裏町の人数八九名に取占められて路地内へ遁げ込むのを、容赦なく追詰めると、滝は廂を足場にある長屋の屋根へ這上つて、瓦を捲くつて投出した。やんちゃんもここに至つては棄置かれず、言付け口をするも大人げないと、始終蔭言ばかり言つていた女房達、耐りかねて、ちと滝太郎を窘なめるようにと、夜に入ってから帰る母親に告げた事がある。

しかるに、近所では美しいと、しおらしいで評判の誉物だった母親が、毫もこれを真とはしない。ただそうですか済みませんとばかり、人前では当らず障らずに挨拶をして、滝や、滝やと不断の通り優しい声。

それもその筈、滝は他に向つて乱暴狼藉を極め、憚らず乳虎の威を揮うにもかかわらず、母親の前では大な声でももの言わず、灯頃辻の方に母親の姿が見えると、駆出して行つて迎えて帰る。それから畳を歩行く蹺音もしない位、以前の倅の俣るる鏡台の引出の隅に残つた猿屋の小楊枝の尖で字をついて、膝も崩さず母親の前に畏つて、二年級のおさらいをするのが聞える。あれだから母親は本当にしないのだと、隣近所では切齒をしてもどかしがった。

学校は私立だったが、先生はまたなく滝太郎を可愛がって、一度同級の者と掴合つかみあいをして遁にげて帰って、それツきり、登校しないのを、先生がわざわざ母親の留守に迎むかひに来て連れて行って、そのために先生は他ほかの生徒の父兄等に信用を失って、席札は櫛くしの齒の折れるように透みいて無なくなったが、あえて意こころにも留とどめないで、ますます滝太郎を愛育した。いかに見処みどころがあつたのであろう。

## 三十一

しかるに先生は教うるにいかなる事をもつたのであるか、まさかに悪智わるちえ慧えを着けはしまい。前年その長屋の表町に道普請があつて、向側へ砂利を装もりあげたから、この町を通る腕車荷車は不残のこらず路地口の際を曳ひいて通ることがあつた。雨が續ついて泥濘ぬかるみになつたのを見澄みして、滝太が手で掬すくい、丸太で掘ほつて、地面を窪くぼめておき、木戸に立つて車の来るのを待つていと、窪くぼみは雨溜あめだまりで探いりが入いらず、来るほどの車は皆輪さが喰くい込んで、がたりとなる。さらぬだに持余すのにこの陥おとし罠わなに懸かつては、後あとへも前まへも行くのではなないから、汗あせになつて弱よるのを見ると、会心えんしんの笑えみを洩もらして滝太、おじさん押おしてやろう、



幾干いくらかくんねえ、と遣つたのである。自から頼む所がなくなつてはさる計はかりごともしはせまい、憎まれものの殺生好ずきはまた相応した力もあつた。それはともかく、あの悪智慧のほどが可お恐そろしい、行末が思い遣られると、見るもの聞くもの舌を巻いた。滝太郎がその挙動を、鋭い目で角の屑屋の物置みたような二階の格子窓に、世を憚はばかる監視中の顔をあてて、匍匐はらばいになつて見ていた、窃盗せつとう、万引、詐偽さぎもその時二十までに数を知らず、ちようど先月までくらい込んでいた、巢鴨が十たび目だという凄すしい女、渾名あだなを白魚のお兼といつて、日向では消えそうな華奢姿きゃしゃ。島田が黒いばかり、透通ととおるような雪の肌の、骨も見え透いた美しいのに、可恐おそろしい悪党。すべて滝太郎の立居挙動ふるまいに心を留めて、人が爪弾つまはじきをするのを、独り遮ほつて賞めちぎつていたが、滝ちゃん滝ちゃんといつて可愛がること一ひととおり通でなかつた処。……

滝太郎が、その後のち十一の秋、母親みまかが歿かると、双葉にして菱からざればなどと、差配佐次兵衛、講釈あしに聞いて来たことをそのまま言出して、合長屋だしあいが協議の上、欠けた火鉢の灰までをお錢あしにして、それで出合だしあいの涙金を添えて持たせ、道で鳶とびにでも攫さらわれたら、世の中が無事で好いい位な考えで、俵町から滝太郎を。

一昨日おととい来るぜい、おさらばだとい、高慢な毒口を利いて、ふいと小さなものが威張つて

出る。見え隠れにあとを跟けて、その夜金竜山の奥山で、滝さん餞別をしようと言つて、お兼が無名指からすつと抜いて、滝太郎に与えたのが今も身を離さず、勇美子が顔を赤らめてまで迫つたのを、頑として肯かなかつた指環なのである。

その時、奥山で餞した時、時ならぬ深夜の人影を吠える黒犬があつた。滝さんちよいつかまえて御覽とお兼がいうから、もとより俵町界隈の犬は、声を聞いて逃げた程の悪戯小憎。御意は可しで、飛鳥のごとく、逃げるのを追懸けて、引捕え、手もなく頸の斑を掴んで、いつか継父が児を縊り殺した死骸の紫色の頬が附着いていた処だといつても人は寄附かない、ロハ台の際まで引摺つて来ると、お兼は心得て粹な浴衣に半纏を引かけた姿でちよいと屈み、掌で黒斑を撫でた、指環が閃いたと見ると、犬の耳が片一方、お兼の掌の上へ血だらけになつて乗つたのである。人間でもわけなしだよ、と目前奇特を見せ、仕方を教え、針のごとく細く、しかも爪ほどの大きさの恐るべき鋭利な匕首を仕懸けた、純金の指環を取つて、これを滝太郎の手に置くと、かつて少年の喜ぶべき品、食物なり、何等のものを与えてもついで嬉しがつた験のない、一つはそれも長屋中に憎まれる基であつた滝太郎が、さも嬉しげに見て、じつと瞞めた、星のような一双の眼の異様な輝は、お兼が黒い目で睨んでおいた。滝太郎は生れながらにして賊性を享けたのである。諸君は

渠かれがモウセンゴケに見惚みとれた勇美子の黒髪から、その薔薇ばらの薫かおりのある蝦茶えびちやのりボン飾かざりを  
 掏取すりとつて、総曲輪そうまがれの横町の黄昏たそがれに、これを掌中もてあそに弄もてあそんだのを記憶せらるるであろう。

## 三十二

「滝さん、滝さん、おい、おい。」

「私わっちかい、」と滝太歩ととを停とどめて振り返ると、木蔭こみちを徑へずつと出たのは、先刻さつきから様子を伺うかがつていた婦人おんなである。透とかして見るより懐なごしげに、

「おう来たのか、おいら約束やくそくの処ところへ行いつてお前めえの来るのを待つてただけけれども、ちよいと係かかり合あいで歩ぶに取とられて出て来たんだ。路みちは一筋ひとすぢだから大丈夫だいじゆうだとは思おもつたが、逢あい違ちがわなければ可よいと思おもつての。」

「そう、私わたしは先刻さつきからここに居いたんだよ。路先みちさきを切きつて何か始はじまつたから、田舎いんやは田舎いんやだけに古風こふうなことをすると思おもつてね、旅たび稼かせの積つでぐつとお安やすく真中まんなかへ入いつてやろうかと思おもつてる処ところへ、お前めえさんがお出いでだから見ていたの。あい、おかしくつて可ようござんした。ここいらじゃあ尾おひれ鰭ひれを振ふつて、肩かた肱ひじを怒いからしそういな年上としうなのを二人ふたりまで、手てもなく

追<sup>おっかえ</sup>帰したなあ大出来だ、ちよいと煽<sup>あお</sup>いでやりたいわねえ、滝さんお手柄。―

「馬鹿なことを謂つてらあ、何もこつちが豪<sup>えい</sup>いんじやあねえ。島野ツてね、あのひよろ長え奴が意気地なしで、知事を恐<sup>こわ</sup>がつていやあがるから、そこが附<sup>つけ</sup>目よ。俺<sup>おいら</sup>に何か言われちやあ、後で始末が悪いもんだから、同類の芋虫まで、自分で宥<sup>なだ</sup>めて連れて行つたまでのこつた。敵<sup>むこう</sup>が使つてる道具を反<sup>あへ</sup>対<sup>こべ</sup>にこつちで使われたんだね、別なこたあねえ、知事様がお豪いのでござりますだ。」といつて事も無げに笑つた。

「それじやあ滝さん、毒をもつて毒を制するとやらいうのかい。」

「姉<sup>ねえ</sup>や、お前<sup>めえ</sup>学者だなあ、―

「旦那、御串<sup>ごじょうだん</sup>戯もんですよ。」と斉<sup>ひと</sup>しく笑つた。

身装<sup>みなり</sup>は構<sup>かま</sup>わず、絞<sup>しぼり</sup>のなえたので見すぼらしいが、鼻筋の通つた、眦<sup>めじり</sup>の上つた、意気<sup>さかん</sup>の壮なることその眉宇<sup>びう</sup>の間に溢<sup>あふ</sup>れて、ちつともめげぬ立振舞。わぎと身を窶<sup>やつ</sup>してさるものように見られるのは、前<sup>さき</sup>の日総曲輪の化<sup>ばけ</sup>梗<sup>えのき</sup>の下で、銀流しを売つていた婦人<sup>おんな</sup>であつて―  
―且つ<sup>わか</sup>少かりし時、浅草で滝太郎に指環を与えた女賊白魚のお兼である。もとより掏<sup>すり</sup>賊の用に供するために、自分の持物だつた風変りな指環であるから、銀流を懸けるといつて滝太が差出したのを、お兼は何条見<sup>みの</sup>免すべき。

はじめは怪み、中は驚いて、果はその顔を見定めると、幼立に覚えのある、裏長屋の悪戯小憎、かつてその黒い目で睨んでおいた少年の懐しさに、取った手を放さないでいたのであったが。十年ばかりも前のこと、場所も意外なり、境遇も変っているから、滝太郎の方では見忘れて、何とも覚え、底気味が悪かった。

横町の小児が足捌の縄を切払うごときは愚なこと、引外して逃るはずみに、指が切れて血が流れたのを、立合の衆が怪んで目を着けるから、場所を心得て声も懸けなかつたほど、思慮の深い女賊は、滝太郎の秘密を守るために、仰いでその怪みを化榎に帰して、即時人の目を瞞めたので。

越えて明くる夜、宵のほどさえ、分けて初更を過ぎて、商人の灯がまばらになる頃は、人の氣勢も近寄らない榎の下、お兼が店を片附ける所へ、突然と顕れ出で、いま巻納めようとする莫塵の上へ、一束の紙幣を投げて、黙っててくんねえ、人に言っちゃ悪いぜとばかり、たちまち暗澹たる夜色は黒い布の中へ、機敏迅速な姿を隠そうとしたのは昨夜の少年。四辺に人がないから、滝さんといって呼留めて、お兼は久しぶりでめぐりあったが、いずれも世を憚って心置のない湯の谷で、今夜の会合をあらかじめ約したのであった。

## 三十三

二人は語らい合つて、湯の谷の媪が方へ歩き出した。

お兼は四辺をあたりみまわして、

「そりやそうと、酷い目に逢いそうだった姉さんはどうしたの。なんだかお前さんと、あの肥ふとった、」

「芋虫か、」

「え、じゃあ細長い方は蚯蚓みみずかい。おほほほほ、おかしいねえ、まあ、その芋虫と、蚯蚓とお前さんと。」

「厭いやだぜ、おいら虫じやあねえよ。」と円つぶらに目を睜みはつてわざと真顔になる。

「御免なさいまし、三人巴ともえになってごたごたしてるので、つい見はぐしたよ、どうしたろう。」

「何か、あの花売の別嬪べっぴんか。」

「高慢なことをいうねえ、花売だか何だか。」

「うむ、ありやもう疾とつくに帰った。俺おいら可いいことよと受合つて来たけれども、不安心だ

と見えてあとからついて来たそうで、老人は苦勞性だ。挨拶だの、礼だの、誰方だのと、面倒臭えから、ちようど可い、連立たして、さつさと歸しちまった。」

「何しろ可かつたねえ。喧嘩になつて、また指環でも揮廻しはしないかと、私ははらはらして見ていたんだよ。ほんとにお前さん、あれを滅多に使つちやあ悪うござんす。」

「蝮の針だ、大事なものだ。人に見せて堪るもんか、そんなどじなこたあしやしないよ。」  
「いかがですか、こないだ店前へ突出したお手際では怪しいもんだよ。多勢居る処じゃあないかね。」

「誰がまた姉や、お前だと思ふもんか。あの時はどぎりとした、ほんとうだ、縛られるかと思つた。」

「だからさ、私に限らず、どこにどんな者が居ないとも限らないからね、うっかりしちやあ危険だよ。」

「あい、いいえ、それが何だ、知事のお嬢さんがね、いやに目をつけて指環を取換えようなんて言うんだ。何だか機関を見られるようで、気がさすから、目立たないのが可からう、銀流でもかけておくと、訳はありやしねえ、出来心で遣つたんだ、相済みません。」  
「といつて、莞爾として戯にその頭を下げた。」

「沢山たんとお辞儀をなさい、お前さん怪けしからないねえ。そりや惚ほれてるんだろう、恐入おそった？」

「おお、惚ほれたんだか何なにだか知らねえが、姫ひいさま様の野郎が血道を上げて騒さわいでるなあ、黒百合というもんです。」

「何なにだとえ。」

「百合の花の黒いんだツさ、そいつを欲ほしいつて騒さわぐんだな。」

「へい、欲ほしければ買かつたら可よさそうなもんじやあないか。」

「それがね、不可いけねえんだ、銭ぜにかね金かねづくじやないんだつてよ。何でも石いし滝たきつて処ところを奥おくへ踏ふ

込こむと、ちようど今いま時とき分ぶん咲さいてる花はなで、きつとあるんだそうだけれど、そこがまた大おほ変へんな

処ところでね、天窓あたまが石いしのような猿さるの神かみ様さまが住すんでるの、恐おそい大おほな鷲じゆが居ゐるの、それから何なにだつ

て、山やま中なかだというに、おかしいじやあねえか、水みづ搔かきのある牛うしが居ゐるの、種いろいろ々なこと

をいって、まだ昔むかしから誰たれも入いつたことがないそうで、どうして取とつて来こられるもんだとも

思おもやしないんだつてこつた。弱虫よわむしばかり、喧嘩けんかの対あいて手てにするほどのものも居ゐねえ処ところだから、

そん中なかへ踏ふ込んで、骨ほねのある妖物ばけものにでも、たんかを切きつてやろうと、おいら何なんするけれ

ども、つい忙せわしいもんだから思おもつたばかり。」



「まあ、大層お前さん、むずかしいのね、忙いって何の事だい。」

「だから待ちねえ、見せるてこつた、うんと一番喜ばせるものがあるんだぜ。」

「ああ、その滝さんが見せるというものは、何だか知らないが見たいものだよ。」

### 三十四

滝太郎はかつて勇美子に、微細なるモウセンゴケの不思議な作用を発見した視力を誉えられて、そのどこで採獲たかの土地を聞かれた時、言葉を濁して顔の色を変えたことを――  
――前回到言つた。

いでそのモウセンゴケを渠が採集したのは、湯の谷なる山の裾の日当に、雨の後ともなく常にじとじと、濡れた草が所々にある中においてした。しかもお雪が宿の庭続、竹藪で住居を隔てた空地、直ちに山の裾が迫る処、その昔は温泉が湧出たという、洞穴のあたりであった。人は知らず、この温泉の口の奥は驚くべき秘密を有して、滝太郎が富山において、随処その病的の賊心を恣にした盗品を順序よく並べてある。されば、お雪が情人に貢ぐために行商する四季折々の花、美しく薫のあるのを、露も溢さず、日ごとにこ

の洞穴の口浅く貯えておくのは、かえって、滝太郎が盗利品に向って投げた、花東であることを、あらかじめここに断っておかねばならぬ。

さて、滝太郎がその可恐しい罪を隠蔽しておく、温泉の口の辺で、精細式のごときモウセンゴケを見着けた目は、やがてまた自分がそこに出没する時、人目のありやなしやを熟と見定める眼であるから、己の視線の及ぶ限は、樹も草も、雲の形も、日の色も、従うて蟻の動くのも、露のこぼるるのも知らねばならないので、地平線上に異状を呈した、モウセンゴケの作用は、むしろ渠がいまだかつて見も聞きもしなかつたほど一層心着くに容易いのであつた。あたかも可し、さる必用を要する渠が眼は、世に有数の異相と称せらるる重瞳である。ただし一対ともにそうではない、左一つ瞳が重っている。

そのせいであつたらう。浅草で母親が病んで歿する時、手を着いて枕許に、衣帯を解かず看護した、滝太郎の頸を抱いて、（お前は何でもしたいことをおしよ、どんなことでもお前にはきつと出来るのだから、）といったツきり、もう咽喉がすうすうとなつた。

その上また母親はあらかじめ一封の書を認めておいて、不断滝太郎から聞き取つて、その自分の信用を失うてまで、人の忌嫌う我児を愛育した先生に滝太郎の手から託さするように遺言して、（私が亡くなつた後で、もしも富山からだといって人が尋ねて来たら、こ

の手紙を渡して下さい。開けちやあ不可いけません、来なかつたらばそのまま破つて下さい、きつとお見懸け申してお頼み申します。」と言わせたのである。

やや一月ばかり経つと、その言違ことたがわず果して富山からだといつて尋ねて来たのが、すなわち当時の家令で、先代に託されて、その卒去のちの後、血統というものが絶えて無いので、三年間千破矢家を預あずかつていて今も滝太郎を守立ててる竜川守膳たつかわしゆぜんという漢学者。

守膳は学校の先生から滝太郎の母親の遺書を受取つたが、その時は早や滝太郎が俵町を去つて二月ばかり過ぎた後であつたので、泰山のごとく動かず、風采ふうさい、千破矢家の傳ふたるに足る竜川守膳が、顔の色を変えて血眼になつて、その搜索を、府下における区々の警察に頼み聞えると、両国回向院えこういんのかの鼠小憎ねずこぞうの墓はか前に、居眠いねむりをしていた小憎があつた。巡行の巡查が怪あやしんで引立ひつた、最寄の警察で取調べたのが、俵町の裏長屋に居たそれだと謂つて引渡された。

田舎は厭いやだと駄々を捏こねるのを、守膳が老功なだで宥すかめ賺し、道中土を踏ふまさず、動殿ゆるぎのお湯ゆ殿どの子こ調しらべ姫ひめという扱あいで、中仙道は近道だが、船でも陸おかでも親おや不知しらずを越こさねばならぬからと、大事を取つて、大廻おおまわりに東海道、敦賀、福井、金沢、高岡、それから富山。

## 三十五

湯の谷の神の使だという 白鳥しろからすは、朝月夜にばかり稀まれに見るものがあると伝えたり。

ものの音はそれではないか。時ならず、花屋が庭統つづぎの藪やぶの際に、かさこそ、かさこそと響ひびきを伝えて、ややありて一面に広々として草まばらな赤土の山の裾すそへ、残月の影に照らし出されたのは、小さい白い塊である。

その描けるがごとき人の姿は、薄うつつりと影を引いて、地の上へ黒い線が流るるごとく、一文字に広場を横切つて、竹藪を離れたと思うと、やがて吹流しに手拭かぶを被かぶつた婦人おんなの姿が頭あしらわれて立ったが、先へ行く者のあとを拾うて、足早に歩行あるいて、一所になると、影は草の間に隠れて、二人は山腹に面した件くだんの温泉ゆの口の処で立停たちどまつた。夏の夜はまだ明けやらず、森しんとして、樹の枝に鳥が罫ねぐらを踏替ふみかえる音もしない。

「跟ついておいで、この中だ。」と低声こごえでいった滝太郎の声も、四辺あたりの寂莫せきぼくに包まれて、異様に聞える。

そのまま腰かかを屈かかめて、横穴の中へ消えるよう。

お兼は抱着くがごとくにして、山腹の土に手をかけながら、体を横たえ、顔ななめを斜ななめにして

差覗さしのぞいて猶たぬら予らつた。

「滝さん、暗いじやあないか。」

途端とたんに紫の光一点、※と響びいて、早附木マツチを摺すつた。洞ほらの中は広く、滝太郎はかえつて寛くつろいで立たつてゐる。ほとんどその半身おほを蔽おほうまで、堆うずだかい草の葉活いきいき々として冷たそうに露を溢こぼさぬ浅あさみどり翠もえぎの中に、萌葱もえぎ、紅あか、薄黄色、幻のような早咲の秋草が、色も鮮麗あざやかに映あつて、今踏込ふみこむべき黒々とした土の色も見えたのである。

「花室はなむろかい、綺麗だね。」

「入口は花室だ、まだずつと奥があるよ。これからつき当あつて曲まるんだ、待まちつといで、暗いからな。」

燃え尽して赤い棒になつた早附木マツチを棄すてて、お兼を草花の中に残して、滝太郎は暗中に放はなれて去る。

お兼は氣を鎮めて洞ほらの口に立たつていたが、たちまち慌あわただしく呼よんだ。

「ちよいと……ちよいと、ちよいと。」

音も聞えず。お兼は尋常ただならず声を揚あげて、

「滝さん、おい、ちよいと、滝さん。」

「おう、」と応えて、洞穴の隅の一方に少年の顔は顛れた。早く既に一個角燈に類した、あらかじめそこに用意をしてあるらしい灯を手にしている。

お兼は走り寄って、附着いて、

「恐しい音がする、何だい、大変な響だね。地面を抉り取るような音が聞えるじゃあないか。」

いかにも洞の中は、ただこれ一条の大瀑布あつて地の下に漲るがごとき、凄じい音が聞えるのである。

滝太郎は事もなげに、

「ああ、こりやね、神通川の音と、立山の地獄谷の音が一所になって聞えるんだって言うんだ。地底がそこらまで続いているんだって、何でもないよ。」

神通は富士市の北端を流るる北陸七六川の随一なるものである。立山の地獄谷はまた世に響いたもので、ここにその恐るべき山川大叫喚の声を聞くのは、さすがに一個婦人の身に何でもない事ではない。

お兼は顔の色も沈んで、滝太郎にひしと摺寄りながら、

「そうかい、川の音は可いけれど地獄が聞えるなんざ気障だねえ。ちよいと、これから奥

へ入つてどうするのさ、お前さんやりやしないか。私や殺されそうな気がするよ、不気味だねえ。」

「馬鹿なことを！」

三十六

「いいえ、お前さん、何だかひととわり一通じやあないようだ、人ひとごろし殺もしかねない様子じゃあないか。」さすがの姉御あねごも洞ほらなか中の闇やみに処して轟ごうごう々たる音の凄すさまじさに、奥へ導かれるのを逡巡しりごみして言ったが、尋常ただならぬ光景に感ずる余り、半ばは滝太郎に戯れたので。

「おいで、さあ、夜が明けると人が見るぜ。出後でおくれた日にやあ一日逗とまりゆう留だ、」と言いながら、片手に燈ともしを釣つて片手で袖を引くようにして連込んだ。お兼は身を任せて引かれ進むと、言うがごとく洞穴の突当りから左へ曲る真暗まつくらな処を通つて、身を細うして行く。とたちまち広し。

「まだまだ深いのかい。」

「もう可いい、ここはね、おい、誰も来る処じゃあねえよ。おいらだつて、余程の工面で見

着け出したんだ。」

滝太郎はこう言いながら、手なる燈を上げて四辺を照らした。

と見ると、処々に箆を敷き、藁を束ね、あるいは紙を伸べ、布を拵げて仕切った上へ、四角、三角、菱形のもの、丸いもの。紙入がある、蓑入がある、時計がある。

あるいは銀色の蒼く光るものあり、また銅の鍍たるものあり、両手に抱えて余るほどの品は、一個も見えないが、水晶の彫刻物、宝玉の飾、錦の切、雛、香炉の類から、印のごときもの数えても尽されず、並べてあつた。その列の最も端の方に据えたのが、蝦茶のりボン飾、かつて勇美子が頭に頂いたのが、色もあせないで燈の影に黒ずんで見えた。傍には早附木の燃さしが散ばっていたのである。

地獄谷の響、神通の流の音は、ひとしきりひとしきり脈を打って鳴り轟いて、堆いばかりの贓品は一個々々心あつて物を語らんとするがごとく、響に触れ、燈に映つて不残動くように見えて、一種言うべからざる陰惨の趣がある。お兼はじつと見て物をも言わぬ、その一言も発しないのを、感に耐えたからだとも思つたろう。滝太郎は極めて得意な様子でお兼の顔を見遣りながら、件のりボン飾を指して、

「これがね、一番新しいんだぜ。ほら、こないだ総曲輪で、姉やに掴まった時ね、あの昼



間だ、あの阿魔、知事の娘のせいでもあるまいが、何だか取難とりにくかったよ、夜店をぶらつ  
 いてる奴等の簪かんざしを抜くたあなぜか勝手が違うんだ。でもとうとう遣つつけた、可い心持だ  
 った、それから、」

と言つてひるがえ翻つて向うへ廻つて、一個の煙草入を照らして見せ、

「これが最初はじめだ、富山へ来てから一番前さきに遣つつたのよ。それからね、見ねえ。」

甚しいかな、古色を帯びた観世音の仏像一体。

「これには弱つたんだ、清全寺ツて言う巨寺おほでらの秘仏だつき。去年の夏頃開帳があつて、

これを何だ、本堂の真中まんなかへ持出して大変な騒ぎを遣るんだ。加賀からも、越後からもね、

おい、泊懸とまりがけの参詣さんげいで、旅籠町の宿屋はみんな泊とまりを断るといふじやあねえか。二十一

日の間拜ませた。二十一日目だつたかな、おいらも人出に浮かされて見に行つたつけ。寺

の近所は八町ばかり往来の留まる程だつたが、何が難有ありがてえか、まるで狂人きちがいだ。人の中を

這出はいだして、片息になつてお前めえ、本尊の前へにじり出て、台に乗つけて小さな堂を据えてよ、

錦の帳を棒さきの尖しきとほりで上げたり下げたりして、その度にわツと唸うならせちやあ、うんと御賽銭おさいせん

をせしめてやがる。そのお前、前へ伸上つて、帳の中を覗のぞこうとした媼おばあがあつたさ。汝血うぬ

迷つたかといつて、役僧め、媼を取つて突飛つばすと、人の天窗あたまの上へ尻餅を搗ついた。あれ

ひきずりだ引摺出せと講中、肩衣で三方にお捻を積んで、ずらりと並んでいやがったが、七八人一時に立上がる。忌々しい、可哀そうに老人をと申つて癩に障ったから、おいらあな、」

活気は少年の満面に溢れて、蒼然たる暗がりの可恐しい響の中に、灯はやや一条の光を放つ。

## 三十七

「晩方で薄暗かったし、鼻と鼻と打つかつても誰だか分らねえような群衆だから難かしいこたあねえ。一番驚かしてやろうと思つて、お前、真直に出た。いきなり突立つて、その仏像を帳の中から引出したんだから乱暴なこたあ乱暴よ。媼やゆつくり拝みねえツて、掴みかかった坊主を一人引捻つて転めさせたのに、片膝を着いて、差つけて見せてやつた。どうして耐つたもんじやあねえ。戦争の最中に支那が小児を殺したつてあんな騒ぎしやあしまい。たちまち五六人血眼になつて武者振つくと、仏敵だ、殺せと言つて、固めている消防夫どもまで鳶口を振つて駈け着けやがった。」

光景の陰惨なのに氣を打たれて、姿もしやうぜん悄然として淋しげに、心細く見えた女賊は、滝太郎が勇しい既往の物語にやや色を直して、蒼あおしろ白い顔の片頬かたほに笑えみを湛たたえていたが、思わず声を放つて、

「危いねえ！」

「そんなこたあ心得てら。やい、おいらが手にやあ仏様持つてるぜ、手を懸けられるなら懸けてみろツて、大おおきな声で喚わめきつけた。」

「うむ、うむ、」とばかりお兼は嬉しそうに頷うなずいて聞くのである。

「おいらが手で持つてさいその位騒ぐ奴等だ、それをお前こつちへ掴んでるからうっかり手出てだしやならねえやな。堂の中は人間の黒山が崩れるばかり、潮が湧わいたようになってごつた返す中を、仏様を振廻しちやあ後へ後へと退さがつて、位牌堂いはいどうへ飛込んで、そこからお前壁の隅すみに突つき破やぶつて、墓原へ出て田圃たんぼへ逃げたぜ。その替り取れようとも思わねえ大変なものをやツつけた。今でもお前、これを盗まれたとつてどの位探してるか知れねえよ。富山とみの家が五六百焼けたつてあんなじやあるめえと思う位、可い心持じやあねえか。姉や、それだがね、おらあこんなことを遣つてからはじめてだ、実は恐こわかった、殺されるだろうと思つたよ。へん、おいらアのせいじゃないぜ、大丈夫知れツこなしだ、占めたもんだい、

この分じやあ今に見ねえ、また大仕事をやらかしてやらあな。」

血も迸ほとばしらんばかりさかん壮たくまだつた滝太郎の面おもてを、つくづく見て、またその罪の数をみまわして、お兼はほつという息を吐ついた。

歎ためいき息して、力なげにほとんどよろめいたかと思えて、後うしろざまに壁のごとき山腹の土に凭もたれかかり、

「滝さん、まあ、こうやって、どうする意つもりだねえ。いいえ、知ってるさ。私だつて、そうだったが、殊にお前さんぜにかね銭金ぜにかねに不自由はなし、売つてどうしようというんじやあない、こりや疾やまいなんだ。どうしても止やめられやしないんだろかね。」

言うことは白魚のお兼である。滝太郎は可怪あやしい目をして、

「誰がお前、これを止しちやツて何がむしろつまるもんか。おらあ時とすると筵むしろを敷敷いて、夜よ一つ夜びてこの中で寝て帰ることがある位だ。見ねえ、おい、可い心持じやあねえか、人にも見せてやりたくツてしようがねえんだけれど、下らない奴かぎに嗅かぎつけられた日にや打ぶちこわ破こわしただから、ああ、浅草で別れた姉やぐらいなのがあつたらと、しよちゆう思つていねえこたあなかつたよ。おいら一人も友達は拵こせえねえんだ、総曲輪でお前に、滝やツて言われた時にやあ、どんなに喜んだと思うんだ、よく見て誉ほめてくんねえな。」

ずツと寄ると袖を開いて、姉御は何と思つたか、滝太郎の頸うなじを抱いて、仰向あむむきの顔を、

「どれ、」

燈ともしは捧げられた、二人はつくづくと目を見合せたのであつた。お兼は屹きつと打守つて、

「滝さん、お前さんは自分の目がどんなに立派なものだか知つてるかね。」

### 三十八

「お前さんの母おつかさん様が亡なくなんなすつた時も、お前にやあ何でもしたいことが出来るからつてとお言いだつたと聞いちやあいたがね、まあ、随分思切つたこつたね。何かい、ここで寝ることがあるのかい。」

「ああ、あの荒物屋の媼ばばつていうのが、それが、何よ、その清全寺で仏像の時の媼あじだまりなんだから、おいらにやあ自由が利くんだ。邸やしきからじやあ面倒だからね、荒物屋を足溜あしだまりにしちやあ働きに出るのよ。それでも何や彼かや出入に面倒だつたり、一品ひとしな々々捻ひねくつちやあ離れられなくつて、面白い時はこの穴あな中で寝て行かあ。寝てるとね、盗んで来たここに在る奴等やつらが、自分が盗とられた時の様子を、その道筋から、機きつかけ会かいから、各々めいめいに話をする

ように、たのしみ楽ツたらないんだぜ。」

「それでまあよくお前さん体が何ともないね。浅草に餓鬼大将をやってお在いの時とは違つて、品もよくおなりだし、丸顔も長くなつてき、争われぬ、どう見ても若殿様だ。立派なもんだ。どうして、お前さんのその不思議な左の目の瞳子どうしに見覚みおぼえがなかつた日にやあ、名告なられたつて本当に出来るもんじやあない、その替り、こら、こんなに、」

と手を取つて、お兼は掌てのひらに据えてみまも瞻りながら、

「節もなくなつて細うなつたし、体も弱々しくつて、夜露に打たれても毒そうではないか。」

「不景気なことを言つてらあ。麦むぎ 畠はたけの中へ引ひくりかえつて、青天井で寝た処で、天窓あたまが一つ重くなるようなんじやあないよ、鍛えてあらあな。」と昂こう然ぜんたり。

「そうかい、体はそれで可いとした処で、お前さんのような御身分じやあ、鎖じょうを下ろした御門もあろうし、お次にはお茶坊主、宿直とくのいの武士というのが控えてる位なもんじやあないか。よくこうやつて夜よ一いつ夜いつ出歩でかれるねえ。」

「何、そりやおいら整然ちやんと旨うまくやつてるから、大概内の奴あ、今時分は御寝ぎよしなつていらつしやると思つてるんだ。何から何まで邸の事をすっかり取締つてるなあ、守山てつて、お

いらを連れて来た爺さんだがね、難かしい顔をしてる割にやあ解つてて、我儘をさしてくれらあね。」

「成程ね、華族様の内をすつかり預つて、何のこたあない乞食からお前さんを拾上げたほどの人だから、そりやお前さんを扱うこたあ、よく知っているんだらう。」

「ああ、ただもう家名を傷けないようにつて、耳懐く言つて聞かせるのよ。堅い奴だが、おいら嫌いじゃあねえ。」

「ふむ、それでお前さん、盗賊をすりや世話は無いじゃあないか。」と言つて、心ありに淋しい笑を含んだのである。

「おいら何もこれを盗つて、儲けようというんじやあなし、ただ遊んで楽むんだあな。犬猫を殺すのも狩をするのも同一こつた。何、知れりや華族だ、無断に品物を取つて来た、代価は幾干だ、好な程払つてやるまでの事じゃあねえか。」

「あんな気だから納まらないよ。ほんとに私もあの時分に心得違ひをしていたから、見処のあるお前さん、立派な悪党に仕立ててみようよ、そう思つたんだがね。滝さんお聞き、蛇がその累々した鱗を立てるのを見ると気味が悪いだらう、何さ、恐くはないまでも、可い心持はしないもんだ。蟻でも蠅でも、あれがお前、万と千と固つていてみな、厭なも

んだ。松の皮でもこう重り重りして堆うずだかいのを見るとね、あんまり難有ありがたいもんじやあない、景色の可こい樹立こたちでも、あんまり茂ると物もの凄すごいさ。私やもう疾とつにからそこへ気が着いて厭いやになつて、今じや堅気になつてゐるよ。ね、お前さん、厭な姿は、蛇が自分でも可こい心持じやあなかるうではないか。蚊でも蚤のみでも食つたのが、ぶつぶつ一面に並んでみな、自分の体でも打う棄ちりゃいやな。私やこうやつてお前さんがここに盗んだものを並べてあるのを見ると、一々動くように蛇の鱗だと思つて、悚然ぞつとした。」

## 三十九

「野暮は言わない、私だつて何も素人じやあなし、お前さんの病な事も知つてるから、今めかしい意見をするんじやないが、世の中にやもつと面白どろぼうい盗賊どろぼうのしようがありそうなもんじやないか。時計だの、金だの、お前さんが嬉けちしがつて手柄はしたそうにここに並べて置くものは、こりや何だい！ 私に言わせると吝けちさ、端はしたのお鳥目はしたでざら幾干いくちでもあるもんだ。金剛石ダイヤモンドだつて、高々人間が大事がつて秘しまつておくもんだよ、慾よくの固かたまりだね。金と灰吹たたまは溜たまるほど汚ごみいというが、その宝を盗んで来るのは、塵芥溜ごみためから食くべ荒しをほじくり出す犬と



同 一だね、小汚ない。

そんなことより滝さん、もつと立派な、日本晴の盜賊がありやしないかしら。

主の棲む淵といえど誰も入ったものはあるまい。昔から人の入らない処なら、中にまたどんな珍らしい不思議なものがあるかも知れない。譬にも竜のには神様のような綺麗な珠があるというよ。何そんなものばかりじゃあない、世の中は広いんだ、富山にばかりも神通川も立山もあるじゃあないか。大海の中だの、人の行かない島などには、宝にしる景色にしる、どんな結構なものがあるかも知れぬ、そして見つければ大びらに盗んで可いので。

ただそれは難かしい。島へ行くには船もいろいろし、山の奥へ入るには野宿だつてしなけりやならない。お前さんはお金子が自由だろう、我儘が出来るじゃあないか。気象はその通だし、胆玉は大いし、体は鍛えてある、まあ、第一、その目つきが容易じゃあない。火に焼れず、水に溺れずといったような好運があるようだ。好きなことが何でも出来るツて、母様が折紙をつけて下すつた体だよ、私が見ても違ひはないね。

金目の懸つた宝なんぞ、人が大切がつて惜しむもので、歩くにも坐るにも腰巾着につけていようが、鎖を下ろしておこうが、土の中へ埋めてあろうが、私等が手にやあお

茶の子さ。考えて御覽、どんなに嚴重にして守ったって、そりや人間の猿智慧さるぢえですること、現にお前さん、多勢黒山のような群集の中で、その観音様を一人で引揚げて来たじゃあないか。人の大事にするものを取って来るのは何でもないが、私がいふ宝物は、山の靈水の精、また天道様が大事に遊ぶものもあるう。人は誰も咎とがめないが、迂濶うかつにお寄越よこしはなさらない、大風で邪魔をするか、水で妨げるか、火で遮るか。恐けだものい獣に守らしておきもしようし、真まつくら暗な森で包んであろうも知れず、地獄谷とやら、こんな恐おそろしい音のする、その立山の底に秘かくしてあるものもあるう。近い処が、お前さんが前刻さつきお話の、その黒百合というものだ、つい石滝とかの山を奥へ入るとあるツていうのに、そら、昔から人が足あ踏しづみをしない処で、魔ま処だ。入いつちやあならない、真ま暗だ、天窓あたまが石のような可おそろし恐おそろしい猿さるが居る、それが主だというじやあないか。この国中さば捌はいてる知事の嬢さんが欲ほしくつても、金でも権柄けんべいずくでも叶かなわないというだろう。滝さんどうだね、そんなものを取って来ちやあ。

一番ひとつ何でもそういつたものを、どしどし私たちが頂戴ちやうたいをすることにしようじやないか。私ばかりでない、まだ同おんなじ一心いっしんの者が、方々に隠れている、その苧環おだまきの糸を引張ひつてき、縁のあるものへ結びつけて、人間の手で網を張ひろうという意つもりでね、こうやって方々歩いて

いる。何、私なんざ、ほんの手先の小使だ、幾らも、お前さんの相談相手があるんだから、奮発をしてお前さん、連判状の筆頭につかないか。」

意気八荒を呑む女賊は、その花のごとき唇から閃いてのぼる毒炎を吐いた。洞穴の中に、滝太郎が手なる燈の色はやや褪せたと見ると、件の可恐い響は音絶えるがごとく、どうーと次第に遠ざかって、はたと聞えなくなったようである。

#### 四十

「もう夜明だ、姉や、分つたい、うむ、早く出よう。そして、おいらもう、この穴へ入るまい。」

滝太郎は決然として答えた。お兼は嬉しげに手を取つて、

「滝さん、それでこそお前さんだ、ああ、富山じゃあ良い事をした、お庇様で発程榮がする。」

「お前、もうちつとこつちに居てくんねえな。おいら勝手に好きな真似はしてるけれど、友達も何もありませんやな。本当は心細くツて、一向話らないんだぜ。」

「気の弱いことをいうもんじやあない、私はこれから加州へ行つて、少し心当あたりがあるんだし、あそこへは先へ行つて待合まちわせている者がある。そうしちやあいられないんだから、また逢おうよ。そしてお前さんの話をして、仲間の者を喜ばせよう。何の、味方にしようと思えば、こつちのものなんざ皆味方みななさ。不残敵のこらずになつたつて難かしい事はないのだもの。」

「うむ、そんならそうよ。」と頷うなずいて身を開いた、滝太郎は今森しんとして響ひびも止やんだ洞穴の中に耳を澄したが、見る見る顔の色が動いて、目が光った。

「や、山の上で蝸ひぐらしが鳴かあ、ちよツ、あいつが二三度鳴くと、直ぐに起きやあがる。花屋の女は早起だ、半日ここに居て耐たまるもんかい。」

ふツと燈あかしを消すと同時に、再びお兼の手をしつかと取つて、

「姉や、大丈夫だ、暗い内に、急いで。さあ、」

温泉ゆの口なる、花室の露を搔か潜くつて、山の裾へ出ると前後あとしきになり、藪やぶについて曲る時、透かすと、花屋が裏庭に、お雪がまだ色も見え分かぬ、朝まだき、草花の中に、折取るべき一個の籠かごを抱かいて、しよんぼりとして立っていた。髪つや艶やかに姿白く、袖もなえて、露に濡れたような風情。推するに渠かれは若山の医療のために百金を得まく、一輪の黒百合を

欲して、思い悩んでいるのであろう。南天の下に手水鉢が見えるあたりから、雨戸を三枚ばかり繰った、奥が真四角に黒々と見えて、蚊帳の片端の裾が縁側へ溢れて出ている。ト見る時、また高らかに鯛が鳴いた。

「そらね、あれだから。」

と苦笑する。滝太郎と囁き合い、かかることに馴れて忍の術を得たるごとき兩個の人物は、ものおもうお雪が寝起の目にも留まらず、垣を潜つて外へ出ると、まだ閉切つてある、荒物屋の小店の、燻つた、破目や節穴の多い板戸の前を抜けて、総井戸の釣瓶がししとと落つる短夜の雫もまだ切果てず、小家がちなる軒に蚊の声のあわたましい湯の谷を出て、総曲輪まで一条の徑にかかり、空を包んだ木の下に隠れて見えなくなつた。

「それじゃあ滝さん、もう、ここから帰つておくれ、ちようど人目にもかからないで済んだ。」

早朝 町はずれへ来て、お兼は神通川に架した神通橋の袂で立停つたのである。雲のごときは前途の山、煙のようなは、市中の最高処にあつて、ここにも見らるる城址の森である。名にし負う神通二百八間の橋を、真中頃から吹断つて、隣国の方へ山道をかけて深々と包んだ朝靄は、高く揚つて旭を遮り、低く垂れて水を隠した。色も一樣の

東雲しのめに、流ながれの音はただどうしようと、足許あしもとに沈んで響く。

お兼は立去りあえず頭かしらを垂れたが、つと擬宝珠ぎぼうしのついた、一ひとつ抱かかえに余る古びた橋の欄干らんかんに目をつけて、嫣然えんぜんとして、振返つて、

「ちよいと滝さん、見せるものがある。ね、この欄干を御覧、種いろいろ々な四角いもののだの、丸いものだの、削った爪の跡だの、朱だの、墨だので印がつけてあるだろう、どうだい、これを記念かたみに置いて行こうか。」

## 四十一

折しから白髪しろが天窓あたまに菅すげの小笠おがさ、腰の曲つたのが、蚊細かぼそい渋茶しぶけた足に草鞋わらじを穿はき、豊島としま莫ま座ござをくるくると巻ないて斜ななめに背負しよい、竹の杖を両手に二本突おとがいて、頤おとがを突出して気ばかり前さきへ立つ、婆ばあの旅客りやくが通つた。七十にもなつて、跣足はだしで西京の本願寺へ詣もつでるのが、この辺りの信者に多いので、これは飛驒ひだの山やま中なかあたりから出て来たのが、富山に一泊して、朝あがけに、これから加州を指して行くのである。

お兼は黙もくつて遣過やりすごして、再び欄干の爪の跡を教えた。

「これはね、皆仲間の者が、道中の暗号だよ。中にやあ今真盛な商売人のもあるが、ほらここにこの四角な印をつけてあるのが、私が行つてこれから逢おうという人だ、旧海軍に居た将官だね。それからこうあつちに、畝々した線が引張つてあるだろう、これはね、ここから飛驒の高山の方へ行つたんだよ。今は止めていても兇状持で随分人相書の廻つてゐるのがあるから、迂濶な事が出来ないからさ。御覧よ、今本願寺参が一人通つたろう。たしかあれは十四五人ばかり一群なんだがね、その中でも二三人、体の暗い奴等が紛れ込んで富山から放れる筈だよ。俱利伽羅辺で一所になろう、どれ私もここへ

と懸けて、お兼は、銀煙管を抜くと、逆に取つて、欄干の木の目を割つて、吸口の輪を横に並べて、三つ圧した。そのまま筒に入れて帯に差し、呆れて見惚れている滝太郎を見て、莞爾として、

「どうだい、こりや吃驚だろう。方々の、祠の扉だの、地藏堂の羽目だの、路傍の傍示杭だの、気をつけて御覧な、皆この印がつけてあるから。人の知らない、楽書の中にこの位なことが籠つてゐるから、不思議だわね。だから世の中は面白いものだよ。滝さん、お前さんの目つきと、その心なら、ここにある印は不残お前さんの手下になります、頼

もしいじやあないか。」

「うむ、」といつて、ちようどう重瞳異相の悪少は眠くないその左の目をこす擦った。

「加州は百万石の城下だからまた面白い事もあろう、素晴らしい事が始まつたら風の便たよりにお聞きなさいよ。それじやあ、あの随分ねえ。」

「気をつけて行きねえ。」

「あい、」

「……………」

「おさらばだよ。」

その効かいがい々しい、きりりとして裾すそ短みじかに、縷しゆす子の帯を引結んで、低下ひくげた駄たを穿はいた、商あ売きなものの銀流を一包にして桐油とうゆ合羽がつぱを小さく畳んで掛けて、浅葱あさぎの切きれで胴どうな中なかを結えた風呂敷包を手に提げて、片手に蝙蝠傘こうもりがさを持った後姿。ひようぜん飄然ぜんとして橋を渡り去つたが、やがて中ほどでちよつと振返つて、滝太郎を見返つて、そのまま片かたづま褌ふんどしを取つて引上げた、白しろい太ふくらはぎ脛すねが見えると思うと、朝あさ靄せむやの中に見えなくなつた。

やがて、夜が明け放れた時、お兼は新しんじよ庄じやうの山の頂を越えた、その時は、裾すそを繫からげ、荷にを担かぎ、蝙蝠傘をさして、木賃宿から出たらしい貧しげな旅の客。破やぶ毛げつと布ふを纏まとつたり、



頬ほお被かぶりで顔を隠したり、中には汚れた洋服を着たのなどがあつた、四五人と道連みちづれになつて、笑いさざめき興ていずる体で、高岡を指して峠を下りたとのことである。

お兼が越えた新庄というのは、加州の方へ趣く道で、別にまた市まち中の北のはずれから、飛驒へ通ずる一筋の間道がある。すなわち石滝のある処で、旅客は岸伝づたいに行くのであるが、ここを流るるのは神通の支流で、幅は十間に足りないけれども、わずかの雨にもたちまち暴溢あふれで、しばしば堤防どてを崩す名代の荒河。橋の詰つめには向い合つて二軒、蔵屋、鍵屋かぎと名ばかりいかめに厳しい、蛍狩すすみ、涼をあての出茶屋でちやが二軒、十八になる同一年紀おないとしの評判娘が両方に居て、負けじと意気張つて競争する、声も鶯うぐいす、時ほととぎす鳥。

「お休みなさいまし、お懸けなさいまし。」

#### 四十二

その蔵屋という方の床しょうぎ几こに、腰を懸けたのは島野紳士、ここに名物の吹上の水に対し、上衣コウトを取つて涼を納いれながら、硝子盃コップを手にして、

「ああ、涼しいが風が止やんだ、何だか曇つて来たじやあないか、雨はどうだろうな。」

客の人柄を見て招まねぎの女、お倉という丸ぼちやが、片かた襷だすきで塗盆を手にして出ている。

「はい、大抵持ちましようと存じます。それとも急にこうやって雲が出て参りましたから、ふとすると石滝でお荒れ遊ばすかも分りません。」

「何だね、石滝でお荒れというのは。」

「それはあの、少しでも滝から先へ足踏をする者がございまして、暴風雨あらしになるツて、昔から申しますのでございしますが。」

島野は硝子盃を下に置いた。

「うむ、そして誰か入ったものがあるのかね。」

「今朝ほど、背負しよいあげ上を高くいたして、草鞋わらじを穿はきましてね、花籃はなかごを担かかぎました、容ようす子の佳いい、美しい姉さんが、あの小さなお扇子を手に持って、「と言懸いいかかると、何と心得たものか、紳士は衣袋かぶしの間から一本平骨ひらほねの扇子を拔出して、胸の辺りを、さやさや。」

「はあ、それが入ったのか。」

「さようでございます。その姉さんは貴方あなた、こないだから、昼間参りまじたり、晩方来まじたりいたしましたは、この辺を胡乱うろろうろ々々して、行ったり来たりしていたのでございませがね。今日は七日目でございませ。まさかそんなことはと存じておりますと、今朝ほどこ

この前を通りましてね、滝の方へ行つたきり帰りません、きつと入りましたのでございましょう。」

「何かね、全くそんな不思議な処かね。」

「貴方、お疑り遊ばすと暴風雨になりますよ。」といつて、塗盆を片頬かたほにあてて吻々ほほと笑つた、聞えた愛嬌あいきよう者である。島野は顔の皮を弛ゆるめて、眉をびりびり、目を細うしたのは謂いうまでもない。

「それは可いいが姉さん、心太こころてんを一ツ出しておくれな。」

「はい、はい。」

「待ちたまえ、いや、それともまた降られない内に帰るとするかね。」

「どういたしまして、降りませんが、貴方川留かわどめでございますよ。」

方二坪ばかり杉葉の暗い中にむくむくと湧わきあ上る、清水に浸したのを突つきにかけてずつと押すと、心太こころてんの糸は白魚のごときその手に搦からんだ。皿さらに装もつて、はいと来る。島野は口も着けず下に置いて、

「そうして何かい、ついぞまだそこへ行つた者を見たことはないのか。」

「いいえ、私が生れましてから始めてでございしますが、貴方どうでございましょう、つい

少しばかり前にいらつしやいました、太った乱暴な、書生さんが、何ですか、その姉さんがここへ参りましたことを御存じの様子で、どうだとお聞きなさいますから、それぞれ申しますと、うむといったツきり駈出<sup>かけだ</sup>して、その方もまだお帰<sup>かえり</sup>になりません。」

「え、そりや何か、目の丸い、」

「はい、お色の黒い、いがぐり天窓<sup>あたま</sup>の。もうもう貴方<sup>あなた</sup>のようじゃあございませんよ、おほほほ。」

「いや!」とばかりでこの紳士、何か早や、にたりとしたが、急に真面目になつて、

「ちよツ、しようがないな。」

「貴方御存じの方なんですか。」

「うむ、何だよ、その娘の跡を跟<sup>つ</sup>けまわしてな、から厭<sup>いや</sup>がられ切つてる癖に、狂犬<sup>やまいぬ</sup>のよ  
うな奴だ、来たかい! 弱つたな、どうも、汝<sup>うぬ</sup>一人で。」

「何でございます。」

「いえさ、連<sup>つれ</sup>は無かつたのか。」

「ただお一人でございましたよ、豪えらそうなお方なんです。それに仕込しこみづえ杖づえなんぞ持つていらつしやいましたから、私達がかれこれ申上げた処で、とてもお肯入ききいれはなさりますまいと、そう思ひまして黙つて見ておりましたが、無事にお歸りなされば可ようございますがね。」

島野は冷然として、

「何、犬に食われて死にやあ可いんだ。」

「だって、姉さんはお可哀そうじやございませんか。」

「そりやお互様よ。」

「あれ、お安くございませぬのね。でも、あの、二度あることは三度とやら申しますから、今日の内また誰かお入りなさりはしまいかと言つて、内の父おとっさん様も察じておりますから、貴方またその姉さんをお助けなさろうの何のツて、あすこへいらつしやるのはお止し遊ばしまし。」

「だが、その滝の傍そばまでは行つても差さしつかえ支つかえが無いそうじやないか。」

「そこまでなら偶たまに行く人もございますが、貴方何しろ真暗まつくらだそうですよ。もうそこへ

参りました者でも、帰ると熱を煩つて、七日も十日も寝る人があるのでございます。」

「熱はお前さんを見て帰つたつて同一だ、何暗いたつて日中よ、構やしない。きつとそこらにうろついているに違いない、ちよつと僕は。おい、姉さん帰りに寄ろう。」

「お気をお着け遊ばしていらつしやいませよ。」

島野は多磨太が先じたりと聞くより、胸の内安からず、あたふた床几を離れて立つたが、いざとなると、さて容易な処ではない。ほぼ一町もあるという、森の彼方にどうどうと響く滝の音は、大河を倒に懸けたように聞えて、その毛穴はここに居る身にもぞつと立つた。島野は逡巡して立つている。

折から堤防伝いに蹄の音、一人砂烟を立てて、斜に小さく、空を駆けるかと思える近づき、懸茶屋の彼方から歩を緩めて、悠然と打つて来た。茶屋の際の葉柳の下枝を潜つて、ぬつくりと黒く頭われたのは、鬘から尾に至るまで六尺、長の高きこと三尺、全身墨のごとくにして夜眼一点の白あり、名を夕立といつて知事の君が秘蔵の愛馬。島野は一目見て驚いて呆れた。しつくりと西洋鞍置いたるに胸を張つて跨つたのは、美髯広額の君ではなく、一個白面の美少年。頭髮柔かにやや乱れた額少しく汗ばんで、玉洗えるがごとき頬のあたりを、さらさらと払つた葉柳の枝を、一掴み馬上に搔遣り、片手に手綱を

控えながら、一蹄いってい三步、懸茶屋の前に来ると、件の異彩ある目に逸いちはや疾く島野を見着けた。

「島野、」と呼懸けざま、翻然ひつりと下立おりたつたのは滝太郎である。

常にジャムを領するをもつて、自家の光彩を發揮する紳士は、この名馬夕立に対して恐入らざるを得ないので、

「おや、千破矢様、どうして貴方、」と洗面を造つて頭かしらを下げる。その時、駿しゅんそく足あしに流汗を被りながら、呼吸はあえて荒からぬ夕立の鼻面を取つて、滝太郎は、自分も掌てのひらで額の髪を上げた。

「おい、姉や。」

「はい、」

「水を一杯、冷つめたいのを大急おおいそぎだ。島野、可い処でお前めえに逢つたい。おいら、お前とこン処の義作の来るまで、あすこの柳にでも繋つないでおこうと思つただけけれど、お前が居りやあ世話はねえ。この馬返すからな、四十物町あえものちようまで持つて行つてくんねえ、頼むぜ、おい。」

呆れたものいいと、唐突だしぬけの珍客めいかくに、茶屋の女どもは茫乎ぼんやり。

## 四十四

島野は、時というところの苦手が顛れるのを、前世の因縁とでもいいたげな、弱り果てて、「へい、その馬を持つて帰れとおつしやるんですか。」

と不平らしい顔をした。

「そうよ。」

「一体その何でございりますが、私はどうも一向馬の方は心得ませんもんですから。」

「大丈夫だ。こう、お前めえ一ツ内端うちわじゃあねえか、知己ちかつきだろう、暴れてくれるなつて頼みねえ、どうもしやあしねえやな。そして乗られなかつたら曳ひいて行くさ。だからちつたア馬に乗ることも心懸けておくこつた、女にかかり合っているばかりが芸じゃあねえぜ。どうだ、色男。」と高慢なことを罪もなくいつて、滝太郎は微笑ほほえんだ。

「失敬な。」も口の裡うちで、島野は顔を見らると極悪きまりそうに四辺あたりをきよろきよろ。茶店の女むすめは、目の前にほつかりと黒毛の駒こまが汗ばんで立つてるのを憚はばかつて、密そと洋盃コップを齎もたらした。右手めでをのべて滝太郎が受ける時、駒こまは鬣たてがみを颯さつと振った。あれと吃驚びっくりして女むすめは後あとへ。若君わかしゅは轡くつわを鳴らして、しっかと取りつつ、冷水の洋盃を長く差伸べて、盆に返し、



「沢山だ。おい、可いか、島野、預けるぜ。」

屹きつと向直つて、早く手綱を棄てようとする。島野は狼狽うろたえて両手を上げて、

「若様どうぞ、そりや平に、」とばかり、荒馬を一頭背負ひとつしよわされて、庄司重忠にあらざるよりは、誰かこれを驚かざるべき。見得も外聞も無しに恐れ入り、

「平に御容赦てツたような訳なんです。へい、全く不可いけません。それにちつと待合わせるものもあるんでございますから。」

と窮したる笑顔を造つて、渠かれはほとんど哀を乞う。

滝太郎は黙つて頷うなずくと齊ひとしく、駒の鼻頭はなづらを引廻ひきめぐらした。蹄ひづめの上ること一尺、夕立は手綱を柳の樹に結えられて嘶いなないた。

「島野、おい、島野。」

この声を聞くごとに、実ほんのこつた、紳士はぞつとする位で。

「へい、御用ですか。」

「お前、待合わせるものがあるツて、また別嬪べつぴんじゃあねえか、花売のよ。」

「御串戲ごしやうだんを、」と言つたが、内心抉えぐられたように、ぎっくりして、穩おだやかならず。

滝太郎は戲たわむれにいったばかり。そのまま茶屋の女を見返り、

「何ぞ食べるものをくれねえか、多い方が可いぜ。」

「姉さんおいしいものを、早く、冷たくして上げるが可い。」と、島野はてれ隠しに世辞をいった。

「はい、西瓜すいかでも切りましょうか。心ところてん太、真桑まくわ、何を召あがりします。」

「そんな水ツぼいもんじゃあねえや、べらぼうめ、そこいらに在る、有平あるへいだの、餡麵あんパンだの、駄菓子で結構だ。懐へ捻ねじこ込んで行くんだから紙にでも包んでくんな。」と並べた箱の中に指ゆびさしをする。

「どちらへいらつしやいます。」

「石滝よ。」

驚いたのは茶店の女むすめばかりではない、島野も思わず顔を視ながめる。

「兵ひょうろう糧ろうだ、奥へ入へって黒百合を取とって来ようというんだから、日が暮れようも分らねえ。ひもじくなるとそいつを嚙かじらあ、どうだ、お前、勇美さんに言いねえ、土産を持って行いってやるからッてよ。」

「途方もない、若様。それを取ろうッて、実はつい先刻さつきだそうです。あの花売むすめの女も石滝へ入いったんです。」

「うむ、」といった滝太郎の顔の色は動いた。滝の響を曇天に伝えて聞える、小川の彼方の森の方を、屹と見て、すつくと立つて、

「あの阿魔がかい、そいつあ危え！」

先立つて二度あることは三度とやら、見通の法印だった、蔵屋の亭主は奥から慌しく顔を出して、

「そりやこそ、また一人。」

#### 四十五

「やあ、島野さん、千破矢の若様はどうしました。」

「義作じゃないか、一体ありやあどうしたんだね。お前、魔物が夕立に乗って降って来たから、驚いたろうじやあないか。」と半は独言のようにつつう。

被った帽も振落したか、駆附けの呼吸もまだはずむ、お館の馬丁義作、大童で汗を拭き、

「どうしたって、あれでさ、お前様、私や飛んでもねえどじを行ったで。へい、今朝旦那

様をお役所へ送つてね、それからでさ、えて ひっぱ獣を引張つて総曲輪まで帰つて来ると、何に驚いたんだか、評判の榎があるつて朝つばらから化けもしめえに、畜生棹立さおだちになつて、ヒイン、え、ヒインでんで。」

「暴れたかね。」

「あばれたにも何も、一体名代の代物しろものでござえしよう、そいつがお前さん、盲目滅法界めくらに飛出したんで、はつと思ふ途端に真俯向まうむけに転つたでさ。」

「おやおや、道理で額を擦剥すりむいてら。」

義作は掌てのひらでべたべたと顔を撫でて、

「串じょうだん 戯わじゃあがあせん、私わつしや一期いちごで、ダーだと思つたね、地つちん中へ顔を埋めてお前さんめ、ずるずると引摺ひきずられたから、ぐらぐらと来て気が遠くなつたんで。しばらくして突立つたつて、わつてツて追い駆けると、もうわいわいという騒さわぎで、砂すなけぶり 煙けむりが立つてまき。あれから旅籠町へ抜けて、東四十物町を突切つっきつて、橋通りへ懸かかつて神通を飛越とそうてえ可おそろ恐おそい逸それ方だ。南無三宝なむさんぼう、こりや加州まで行くことかと息切あおがして蒼あおくなりましたね。」

鳥居前のお前さん、乱暴じゃあがあせんか、華族様だつてえのにどうです、もつともまああの方にやあ不思議じゃねえようなものの、空樽あきだるの腰掛こしだね、こちとらだつて夏向は恐

れまさ、あのそら一膳飯屋から、横つちよに駆出したのが若様なんです。え、滝先生、滝公、滝坊、へん滝豪傑、こつちの大明神なんで。」とぐつと乗り、拳を握って力を入れると、島野は横を向いて、

「ふむ。」

「どうです、威勢が可いじやがあせんか。突いきなり然畜生の前へ突つ立つたから、ほい、蹴飛とばされるまでもねえ、前足が揃あつて天窓あたまの上を向うへ越とすだろうと思うと、ひたりと留とつたでせ。畜生、貧乏動ゆるぎをしやあがる臆あじの下へ、体を入れて透間とがねえようにくツついて立つが早いか、ぼんと乗りの、しやんしやんさ。素人にやあ出来やせん。義作、貸しねえ貸しねえてつて例の我わが儘ままだから断りもされず、不断面倒臭めくつて困こつたこともありましたつげが、先刻さつきは真ほんのこつた、私わや手てを合あわせました。どうしてお前めさんなんざ学者で先生だつていうけれど、からそんな時にやあ腰を抜かすね。へい。何だつて法律で馬にやあ乗れませんや、どうでげす。」

「はい、お茶を一ツ。」

大気焰きえんの馬丁は見たばかりで手にも取らず、

「おう、そんなもなあ、まだるツこしい。今に私わやそここに湧わいてるのに口をつけて干しち

まうから打棄うっちゃっておきねえ。はははは、ええ島野さん。おいらこれから石滝へ行くから、お前めえあとから取りに来ねえ、夕立はちよいと借りるぜって、そのまま乗出したもんだからね、そこいら中騒いでた徒てええに相済みませんを百万だら並べたんで。転んだ奴あ随分あつたそうだけれど、大した怪我人もなし、持主が旦那様なんですから故障をいう奴もねえんで、そつちや安心をして追駈おいかけて来ましたが、何は若様はどちらへ行つたんで。」

「じゃあ、その何だろう、馬騒ぎで血逆上ちのぼせがしたんだろう、本気じゃあないな。兵糧だつて餡麵あんぱん麩ねじこを捻込んで、石滝の奥へ、今の前橋さきを渡つたんだ、ちようど一足違い位なもんだ。」

「やッ、」というて目を睜みはる義作と一所に吃驚びつくりしたのは、茶店の女で、向うの鍵屋の当かたぎの敵よね、お米よねといつて美しいのが、この折しも店先からはたはたと堤防つつみへ駆出したことである。故こそあれ腕車うでぐるまが二台。

## 四十六

「もしもしちよいとどうぞ、どうぞちよいとお待ち遊ばして。」と路を遮つたので、威勢

の可い腕車くるまが二台ともぼったり停とまる。米は顔を赤らめて手を膝に下げて、

「恐入ります、御免下さいまし。どちらの姫様ひいさまですか存じませんが、どうぞあちらへいらつしやいましたら、私わたくしどもへお休み遊ばして下さいまし、後生でございませう。」

先に腕車くるまに乗ったのは、新しい紺飛白こんがすりに繻子しゆすの帯を締めて、銀杏返いちようがえしに結った婦人おんな。

「何だね、お前さん。」

「はい、鍵屋と申します御休憩所おやすみじころでございませう、よそと張合っておりませうので。

今朝むさうから向むかうばかりお客がございませう、またお馬に召した立派な若様がお立寄でございませう。あのお倉さんというのが、それはもうこれ見よがしで、私わたくしは居ても立ってもいられません。あんまり悔しゆうございませうから、どんなにお叱り遊ばしても宜ようございませう、お見懸け申しましてお願い申します。助けると思召して後生でございませう、私わたくしども

へ。」

とおろおろ声で泣くようにいう。

「おや、じゃああのお茶屋の姉さんかい。」

「はい、さようでございませう。」

「それでは御馳走をしてくれませうか、」と背後うしろの腕車くるまで微笑みながらいったのは、米が姫ひ

様いさまと申上げた、顔立ふうさいも風采ふうさいもそれに叶かなった気高いのが、思懸おもひけず気軽である。

女はかえつて答こたもなし得ず、俯向うつむいてただお辞儀をした。

「それじゃ若わか衆いしゆさん。」

「おう、鍵屋かぎやだぜ。」

「あい、遣やんねえ。」

車夫は呼交よこづけわしてそのまま曳出ひきだす。米は前へ駆抜けて、初音はつねはこの時にこそ聞えたれ。

横着よこづけにした、楯棒かじぼうを越えて、前なるがまず下りると、石滝界隈かいはいへ珍しい白芙蓉はくふようの

花一輪。微風にそよそよとして下立かたえつた、片辺ひつそに引添ひつそい、米は前へ立たつてすらすらと入る

のを、蔵屋しやうぎの床しやうぎ几しやうぎに居た兩人、島野と義作ぎさくがこれを差覗さしのぞいて、慌あわただしくひよいと立たつて、

体よと体がよ繕よれるように並んで、急足いそぎあしにつかつかと出た。

「お嬢様。」

「へい、お道どん、御苦労だね。」

「おや、義作さん、ここに。」

勇美子は店さきに入ろうとしたが、不意に会った内の者を顧みて、

「島野さんも来ていたの。」



「ええ、僕は太分久しい前からなんです。義作君はたった今、その馬が放れました一件で」

「実は何でございます、飛んだ疎<sup>そと</sup>匆<sup>とう</sup>をいたしやして、へい。ねえ、お道どん、こういう訳なんだ、実は、」

「はあ、そりやもう、路で聞きましたよ、飛んだことだったね、でもまあ可<sup>い</sup>い塩<sup>あん</sup>梅<sup>ばい</sup>に。」

「御家来さん、危<sup>あぶ</sup>うがしたな。」

「しかし怪我アしなさらなくて何よりだったよ。」と車夫どもは口々なり。お道もまた、

「そうねえ。」

「ええ、もう私<sup>わつし</sup>や怪我<sup>い</sup>なんぞ厭<sup>いと</sup>やしませんが、何、皆<sup>みんな</sup>千破矢<sup>せんぱや</sup>の若様のお庇<sup>かけ</sup>なんで、へい。」

「ちよいとどうなすつたの、滝太郎さんは。」と姫は四<sup>あ</sup>辺<sup>たり</sup>を見て、御意遊ばす。

「お馬はあすこに居るじゃあないかね。」

「お嬢様、何ですか、その事でこちらへお越しなんでしょうか。」

「何あのお雪のことなの。」

「姉さん、花売なんだがね、十八九でちよつとそういった風な女を見当りはしなかったかい。」

お道に聞かれて米が答えようとするのを、ちやつと引取ったのは今兩人が鍵屋の女客に引付けられて、店から出るのに氣を揉もんで、あとからついて出て立っている蔵屋むすめの女。「その人なら、存じております、今朝ほどでございました。」

「私だつて知つてます。」と、米はつんとして倉じろりを流盼。

## 四十七

「貴方あなたの黒百合を採りたいつて、とうとう石滝へ入ったそうです。」と、島野が引取つて慎重にこれを伝える。

勇美子はその瞳まなこを屹きつと凝こらしたが、道は聞くと斉ひとしく、顔の色を変えた。

「お嬢様、どういたしましょう。」

「困こつたね、少しお待ち、あの、お前まへだち誰も中の様子を知らないかい。」

「はい、ちつとも。」

「あの、少しも存ぞんじません。」

「それはもう誰も知つたものはござりますまい。」

と車夫の一人。

「島野さん、義作さん、どうしたら可いでしよう。お嬢様が御褒美をお賭けなすつたのを、旦那様がお聞遊ばすと、もつての外だ、間違いに怪我でもさせたらどうする、外の内の者とは違うぞ、早く留めると有仰るの。承わると実に御道理な事だから、早速あの娘にそういうおうと思つて、昨日のことなんです、またこないだからふツとお邸には来ないもんですから、昨日その金子は只でお遣わしになることになつて、それを持つて私があそこへ、あの湯の谷の家へ行くと居ないんです。荒物屋から婆さんが私の姿を見ると、駆けて出て、取次いで、その花のことについて相談をされたのは私ばかり、はじめは滅相なと思つたが、情を察すると無理はないので、泣の涙で合点しました。今日あたりはもう参つたかも知れませぬ、することが天道様の思召に叶つたら無事で帰つて参りましょう。内に居る書生さんの旦那にはごく内々だから黙つておいて、とこういうことです。実はと訳をいつて、お金子は預けておこうとすると、それは本人へ直にといつて承知しません。無理もないと引返して、夜も寝ないで今朝、起きがけに行くともう居ないんです。また婆さんが出て、昨夜は帰りました、その事をいつて聞かせると、なおのことそのお情に預つては、きつと取つて来て差上げずにはと、留めるのも肯かないで行つたといひます。

ええ、何の知事様から下さるものを、家一つ戴いて何程どれほどの事があるう、瘦我慢やせがまんな行過ぎだと、小腹が立つて帰りましたが、それと行って棄てておかれぬ、直ぐにと行ってお嬢様が、ちようどまたお加減が悪い処、かれこれして遅くなりましたけれども、お体のお厭いといもなく遠方をお出懸けになったのに、まあ飛んだことをしちまつたんでございますねえ。」

と道は落着かず胡乱うろろう々々する。

一同顔を見合せた。

義作一名にやりにやり

「可ようがす、何、大概大丈夫でしょう、心配はありますまいぜ。諺ことわざにも何でさ、案ずるより産むが易いいつて謂いいます。」

「何だね、お前さん。」とそこどころではない、道は窘たしなめるがごとくにいった。  
義作あえてその（にやり）なるものを止めず。

「いえ、女つてえものは、またこれがその柔よく剛を制すといった形でね。喧嘩そばっにも傍そば杖えをくいません、それが証拠ごうにやあ御覧ごらんじろ、人ごみの中でもそんなに足を踏ふつけられはしねえもんだ。」

「ちよいとお黙り。高慢なことをお言いでない、お嬢様がいらつしやるよ。」

「ですからさ、そつちにお嬢様がいらつしやりや、こつちにやあまた滝公、へん、滝の野郎てえ豪傑がついてまさ。」

「あれだもの。」

「どうでえ阿魔、一言もあるめえ恐入ったか。」

「義作さん可加減いはいにおしな。お嬢様は御心配を遊ばしていらつしやるんですよ。」

「だから、その御心配には及びますめえッてこつた。難かしい事ことあない、娘あまさい無事なら可いんでしよう。そこは心得てまさ、義作が心得たといつちやあ、馬に引摺ひきずられたからとあつて御信仰が薄いでしようが、滝大明神が心得てついています。今も島野さんに承わりや、あとからついて入んなすつたそうで、何、またあの豪傑が行きさえすりや、」といいかけて、額を押え、

「や、天狗が礫つぶてを打ちやあがる。」

雨三粒降つて、雲間に響く滝の音が乱れた。風一陣！

「女中さん、降つて来そうでございます、姫様におつしやつて、まあ、お休みなさいましな」と米は程合を見計らう。

「ああ、そういたしましたしもうねえ、お嬢様。」

黙つて敏活の気の溢れた目に、大空を見ておわした姫様は、これに領いて御入があるうとする。道はもとより、馬丁義作続いて島野まで、長いものに巻かれた形で、一群になつて。米は鍵屋あつて以来の上客を得た上に、当の敵の蔵屋の分二名まで取込んだ得意想うべく、わざと後を圧えて、周章てて胡乱々々する蔵屋の女に、上下四人をこれ見よがし。

「お懸けなさいまし、」と高らかに謂つた。

蔵屋の倉は堪りかねて、睨めながら米を摺抜けて、島野に走り寄つた。

「旦那様、若衆様とお二方は、どうぞ私どもへお帰りを願ひとう存じます。」

「そうだ、忘れ物もあるし後で寄るよ。」

「はい、お忘物はこちらへ持つて参りましても宜しゆうございます。申兼ねますがどうぞいらつしやつて下さいまし、拝むんでございます、あの、後生になるのでございます。」

「可いじやあないか、何も後にだつてよ。」

義作が仔細を心得て、

「競争をしてるんでさ、評判なんで。おい、姉さん、御主人様がこちらへお褥が据るから、あきらめねえ、仕方がねえやな。いえさ、気の毒だ、私あ察するがね、まあ堪忍しなさい。」

「それでもどうぞ姫様にお願ひ遊ばして。」

「何をいうんですよ、馬鹿におしなさいねえ。」

と米は傍から押隔てると、敵手はこれなり、倉は先を取られた上に、今のお懸けなさいましで赫となつてゐる処。

「止してくれ、人、身体に手なんぞ懸けるのは、汚れますよ。」

「何を癪か。」

「磔め。」と角目立つてあられもない、手先の突合いが腕の掴合いとなつて、頬の引搔競。やい、それと声を懸けるばかりで、車夫も、馬丁も、引張凧になつた艶福

家島野氏も、女だから手も着けられない。

「留めておやり。道や、」

「ちよいと、串戯じょうだんじゃあないよ、お前様方まえさんがたはどうしたもんです。これお放し、あれさ、お放しというに、両方とも恐しい力だ。こっちはお嬢様がそれどころじゃあないのだから、お前さんまでがお気を揉もませ申すんだよ。可加減いにおし、あれさ、可いやね、そんなら私が素裸まつぼだかになつて着物を地つちに敷いて、その上へ貴女あなたを休ませ申すまでも、お前達の世話にやあならない、どちらへも休みはしないからそう思つておくれ。」とすつきりいった。ふたり  
兩人は左右に分れたが、そのまま左右から、道の袖を捉つかまえて、ひしと縋すがつて泣出したのである。道は弱つて手を束つかねてぼんやりとするのを見て、勇美子は早やばらばらと音のする雨も構わず、手を兩人の背せなにかけて、蔵屋と、鍵屋と、路みち傍ばたに二軒ならんだのに目を配つて、熟じっと見たまい、

「二人とも聞きな、可いことを教えてあげよう、しよつちゆうそんなことをしては、どちらにも好いいことはないよ。こうおし、お前の処のお客は註文のあつた食物をお前の処から持運もちぶし、お前の処のお客はお前の店から持つて行くことにして、そして一月がわりにするの。可いかい、怨うらみつこ無しに冥利みょうりの可い方が勝つんだよ。」

「おや、お嬢様、それでは客と食物を等分に、代り合つていたします。それでいてお茶代が別にあつたり何かすると、どちらが何だか分らないで、怨うらはいつの間にか忘れてしま



ましよう。なるほどその事ことだよ。さあ、二人とも、手を拍うつたり。」

「やあ、占める。」といつて、義作は景氣よく手を拍うつた。女むすめは兩人ふたり、晴やかな勇美子の面おもてを拝うんだ。

折柄あれまぎ荒増あれまぎる風に連れて、石滝の森から思いも懸けず、橋の上へ真黒まっくろになって、転こけつ、まろびつ、人ひと礫つぶてかすさまと凄じい、物の姿。

#### 四十九

あれはと見る間に早や近ちかぢか々と人の形。橋の上を流るごとく幕まっしぐら直なに、蔵屋へ駆込かむと斉ひとしく、床しょうぎ凡ひびきの上へ響ひびきを打たせて、どたりと倒れたのは多磨太である。白墨狂士は何とかしけむ、そのままどたと足あしを挙げて、苦痛に堪えざる身悶みもたえして、呻吟うめく声吠ほゆるがごとし。

鍵屋ひとむれの一群はこれを見て棄て置かれず、島野に義作がついて店前みせさきへ出向いて、と見ると、多磨太は半面べとり血ちになつて、頬ほから咽喉のどへかけ、例の白薩摩しろざつまの襟えりを染めて韓からくれない紅べに。

「君、どうしたんです。」と島野は驚いたが、薄気味の悪さうに密と手をとつて、眉を顰めた。

鍵屋では及腰に向うを伺い、振返つて道が、

「あれ、怪我をしておりますようです、どうしたんでございましょう。」

勇美子も夜会結びの鬢を吹かせ、雨に頬を打たせて厭わず、掛茶屋の葦簀から半ば姿をあらわして、

「石滝から来たのじやあなくつて。滝さんとお雪はどうしたろうね、」とこれは心も心ならない。道はずつと出て手招をした。

「義作さん、おおい、ちよいとお出よ、お出よ。」

「へッ、」と云つて、威勢よく飛んで帰る。

「何だね、どうしたのさ、あれ大変呻吟くじやあないか。」

「え、雀部さんの多磨太なんで、から仕様が無えんです。何だそうで、全体心懸が悪うがすよ。ありやね、しよツちゆう、あの花売を追懸廻していたんで、今朝も、お前、後を跟けて石滝へ入つたんだと。え何、力にならうの、助けてやろうという贅沢なんじゃあねえんでさ。お道どん、お前の前だけれどもう思い切つてるんだからね、人の入らねえ

処だし、お前、対手あいてはかよわいや。そこでもってからに、「といいかけて、ちよつと姫ひいさ様まを見上げたので声を密ひそめた。

「だね、それ、狼づかめつて奴だ。お前めえ、滝の処はやつぱり真ま暗くらだつき。野郎とうとう、めんないちどりで、ふん捕つかえて、口説くわこうと、ええ、そうさ、長い奴を一本引提ひっさげて入へったつて。大だん刀びらを突着つけの、物凄うしろくなつた背後うしろから、襟首えりくびを取とつてぐいと手繰てつけたものがあつたつき。天狗だと思つて切つてかかつたが、お前めえ、暗やみ試し合あいで盲めくら目めなぐりだ。その内、痛えという声こゑがする、かすつたようだけれども、手て応こたがあつたから、占えらめたと、豪えらくなる途端とにお前。」

義作は左の耳から頬ほへかけて掌てのひらですべりと撫なでて、仕方にがわらいを見せ、苦にが笑わらいをして、  
 「片耳かたみみぎくり、行いつて御覽ごらんじろ、鹿が角を折つたように片一方かたまるで形かたちなしだ。呻うめ吟いんくのはそのせいさ、そのせいであの通りだ。急所きゅうじょじやがあせんツて、私わしもそう言いつたんで、島野しまのさんも、生命いのちにやあ別条べつじょうはないつていうけれどね、早く手当てあてをしてくれ、破やぶ、破やぶ、破やぶ傷けが風かぜになるつて騒さわぐんで、ずきりずきりと脈いを打うつちやあ血ちが湧わくのが肝きんにこたえるつていてね、真ま蒼そうです。それでも見得みえがあるから、お前めえ、松たいまつ明あきをつけて行いつて見ろ、天狗てんこうの片かた翼つばさを切きつて落おとした、血ちみどろになつた鳶とびの羽はねのようなものが落おちてたら、それ

だと思えなんて、血迷つてまさ。大方滝太郎様にやられたんでしよう、可い気味だ、ざまあ！ はははは。やあ、苦しがりやあがつて、島野さんの首っ玉へ嘔りついた。あの人がまた、血を見ると癩癩を起すくらい臆病だからね。や、慌ててら、慌ててら、それに一張羅だ、堪つたもんじやあねえ。躍つてやあがる、畜生、おもしろえ！」とばかりで雨を潜つて、此奴人の気も知らず剽軽なり。

「道、滝さんが怪我をなさりやしないのか。」

「さようでございますね、」と、顔と顔。

## 五十

「小主公お久振でござりました、よく私の声にお覚えがござりますな。へい、貴方が目の悪いことも、そのために此家の女が黒百合を取りに参りましたことも、早いもので、二日前のことだそうですが、もう市中で評判をいたしております。もつともこのついでに貴方のお噂がござりませんと、三年越お便は遊ばさず、どこに隠れてお在なさりますか、分りませんのでござりました。目がお見えなさらないというだけは不吉じやあござりまし

たが、東京の方だというし、お年の比ころなり御様子なり、てつきり貴方に違ちがいと、直ぐこちらへ飛んで参り、向うのあの荒物屋で聞いてお尋ね申しました。小主公わかだんな、何は措おきまして御機嫌よろ宜しく。」

「慶造、何につけても、お前達にもう逢いたくはなかつたよ。」

と若山は花屋の奥に端近く端座して、憂苦やっに寔しゅうぜんれ、愁しゅうぜん然ぜんとして肩身が狭い。慶造と呼ばれたのは、三十五六の屈くつきよう 竟おのこな漢、火水くろがねづくりに鍊きたえ上げた鉄くろがねづくり 造の体格で、見るからに頼たのもしいのが、杳くつぬぎ脱ぬぎの上へ脱ぬぎいだ笠を仰あおむ向けにして、両掛の旅荷物、小造こづくりなのを縁のに載のせて、慇いんぎん 懃かしずに齊あ眉あく風あり。拓うちわの打うちわ侘わびたる言ことばを聞いて、憂慮きつかわしげにその顔を見上げたが、勇氣は己おのが面おもてに溢あふれつつ、

「御心中お察し申しますが、人間は四百四病やまいの器、病疾やまいには誰だつて勝たれませぬ、そんなに氣を落しなさいますな。小主公わかだんな、良いいお音信たよりがござりませぬ、大旦那様もちょうどこの春、三月が満期で無事に御出獄ごしりでござりました。こちらでも新聞がござりますなら、疾とくに御存ごじでござりましょう。」

若山は色を動かして、

「そうか、私はまた何も彼かも思切つて、わざと新聞などは耳に入れないように勤めている

から、そりやちつとも知らずに居た、御無事に。……そうかい、けれども慶造、私はお目にかかられまい。」と額に手を翳して目を蔽うたのである。

「なぜでございます、目をお損いになりましたせいでござりますか。」

「むむ、何それもあるけれども、私が考で、家を売り、邸を売り、父様がいらつしやる処も失くなしたし。」

「それは御心配ござりません、貴下が放蕩でというではなし、御望がとおり遊ばしたとはいえ、大旦那様が迷惑をお懸け遊ばした方々の債主へ、少しずつお分けになつたのでござりますもの、拓はよくしたとおつしやつたのを、私が直に承わりましてござります。」

「そして今どこにいらつしやるんだな。」

「へい、組合の方でお引取申しました。海でなり、陸でなり、一同旗上げをいたします迄はしばらくおかくれでござります。貴方もこういう処はお立退になつて、それへ合体が宜しゅうござりましょう。ちようどこの国へ参りがけに加州を通りまして、あすこである白魚の姉御にも逢いました。」

「何、お兼に逢つた、加賀といえばつい近所へ来ているのか。」

「さようでござります、この頃盛に工事を起しました、俱利伽羅鉄道の工夫の中へ交り込

んで、目星いのをまた二三人も引抜いて同志につけようツて働いておりますんで。一体富山でしばらく働いたそうでござりますに、貴方をお見つけ申さなんだのは、姉御が一代のおおぬかり大脱落でござりましたよう。その代り素ばらしいのを一名、こりや、華族で盗賊だど申しますから、味方には誂向き、いざとなりや、船の一艘ぐらい土蔵を開けて出来るんでござります。金主がつけば竜に翼だ、小主公、そろそろ時節到来でござりましょうよ。」と慶造が勇むに引代え、若山は打悄れて、ありしその人とは思われず。渠は非職海軍大佐某氏の息、理学士の学位あつて、しかも父とともに社会の暗雲に蔽われた、一座の兇星であるものを！

## 五十一

慶造は言効なしとや、握拳を膝に置き、面を犯さんず、意気組見えたり。  
 「小主公、貴方はなぜそう弱くおんなすつたね、病なんざいで勝つもんです。大方何でしよう、そんな引込思案をなさいますのは、目のためじゃあござりませまい。かえつてその御病気のために、生命も用らないという女のあるせいでしよう。可うがす、何そりや

好いた女のためにやあ世の中を打棄るのも、時と場合にや男の意地でき、品に寄つちやあ城を一百一束にして掌に握るのと違わねえんでございませうが、何ですぜ、野郎の方で、はあと溜息をついて女児の膝に縋るようじゃあ、大概の奴あそこで小首を傾げまさ。汝のためならばな、兜も鍔も何ちも用らない、そらよ持って行きねえで、ぽんと身体を投出してくれてやる場合もあります代りにや、女の達引く時なんぞ、べらんめえ、これんばかりの端をどうする、手の内ア受けねえよ、かなんかで横ツ面へ叩きつけるくらいでなくツちやあ、不可ませんや。|| 苦労しもする、させもする|| ていのはそりやあ心意気でさ。」

慶造は威勢よくぽんと一ツ胸を叩いた。

「ここにあるこツです。顔へ濟まねえをあらわして、さも嬉しそうに難有え、苦労させるなんて弱い音を出して御覧じろ、奴さんたちまちなめツちまいますぜ。殊に貴方だ、誰だと思ってるんだ、お言の一事も懸けられりや勿体ねえと心得るが可い位の扱いで、結構でがす。もつとも、まあこうやつて女の手一つで立過して、そんな恐ねえ処へ貴方のために参つたんだ、憎くはありません、心中者だ。ですが、そりや私どもはじめ世間で感心する事で、当の対手は何の女ツ子の生命なんぞ、幾つ貰つたつて髻屋にも売れやしねえ、



そんな手間で気の利いた香の物でも拵えろと、こういった工合でなくツちや色男は勤まりませんよ。何でも不便だ、可愛いと思うほど、手荒く取扱つて、癩癩を起してね、横よこツつららは類を撲りのめしてやりさえすりや惚れた奴あ拝みまき。貴方も江戸児じやあがあせんか。いえさ、若山さんの小主公でしよう。女の心中立を物珍らしそうに、世の中いやあ出ねえの、おいらこれツきりだのと、だらしのねえ、もう、情婦を拵えるのと、坊主になるのとは同おんなじ一ものじやあございませぬ。しかしまあ盲目におなんなすつたから、按摩あんまにやあかけがえのねえ女だと、拜んでるんでしよう。でれでれとするのはお金子のある分だ、貴方のなんざ、女あまにすが継つるんだから堪たまりませぬや。え、もし、そんなこツちやあ女あまにだつて愛想をつかされませぬ。貴方ほどの方がどういうもんです。いや、それとも按摩あんまさんにやあ相当か。」と、声を激ましていいながら、慶造は、目の見えぬ、寡やっれた若山の面を見守つて、目には涙を湛たえていた。

「慶造！」と一喝した、渠かれは蒼あおくなつて、吃きつと唇を結んだ。

「ええ、」

「用意が出来たらいつでも来い、同志の者の迎むかひなら、冥途めいどからだつて辞さないんだ。失敬なことをいう、盲人めくらがどうした、ものを見るのが私の役か、いざとって船出をする時、

船を動かすのは父上の役、錨を抜くのは慶造貴様の職だ。皆に食事をさせるのはお兼じゃあないか。水先案内もあるだろう、医者もあろう、船の行く処は誰が知ってる、私だ、目が見えないでも勝手な処へ指揮をしてやる、おい、星一ツない暗がりでも燈明台なんぞあてにするには及ばんから。」

と説き得て、拓は片手を背後へついて、悠然として天井を仰いだ。

「難有うござります。おお、小主公。」と、慶造は思わず縁側に額をつけた。

## 五十二

「いやもう久ぶりで癩癩をお起しなすつて、こんな心持の可いことはござりません。私や変な癖で、大旦那と貴方の癩癩声さえ聞きや、ぐつとその溜飲の下りませんで。へい、それで私も安心でござります、ついお心持を丈夫にしようとして前のように太平樂は並べましたものの、私も涙が出ます、実は耐えておりました。」

慶造は情なさそうに笑いながら、

「大旦那様はそんなにも有仰やりますまいが、貴方の御病氣の様子を奥様がお聞きなすつ

て御覽ごらんじろ、大旦那様の一件で氣病きやみでお亡なくなり遊ばしたようなお優しい、お心弱こころよわい方がど  
 々にお歎なげきでござりましょう。今じやあ仏様で、草葉の蔭から、かえつて小主公わかだんなをお守  
 りなすつていらつしやるんで、その可愛い貴方のためにそういう処へ参りました娘なら、  
 地獄だつて、魔所だつて、きつとお守りなさいましょうから、御心配にやあ及びますまい。  
 望のぞみの黒百合の花を取つてやがて戻つて参りましょうが、しかし打遣うちぢやちやあおかれませ  
 ん、貴方に御内縁の嬢さんなら、私わたしにや新夫人様にいおくさま。いや話は別で、そうかといつて見てお  
 ります訳ではござりません。殊に千破矢様というのがその後へおいでなすつたという風説ふうせき  
 白魚の姉御がいった若様なんで、味方の大将を見殺みころしにはされません。もつとも直ぐにそ  
 の日、一昨日おとといでござりますな、少すくなからぬ係かかり合あの知事様の嬢さんも、あすこの茶屋まで  
 駈着かけつけましたそうで。あれそれと小田原をやつてる処へ、また竜川とかいう千破矢の家の  
 家老が貴方、参つたんだそうで、御主人の安否は拙者が何かで、昔取つた杵柄きねづかだ、腕  
 に覚えがありますから、こりや強うがす、覚悟をして石滝へ入ろうとすると、どうでござ  
 います。四五間しかないようですが、泥水を装もつて川へ一時に推出して来た、見る間  
 に杭くいを浸して、早や橋板の上へちよろちよろと瀬せが着きく騒さわぎ。大変だという内に、水足が来  
 て足を嘗なめたつていうんです。それがために皆みんなが一雪崩ひとなだれに、引返ひっかえしたつていいいますが、

もつとも何だそうで、その前から風が出て大降になりました様子でござりますな。」

「ああ、その事は昨日知事の内から、道とかいう女中が来て私にいった。ちよいちよい見舞つてくれるんだ、今日もつい前に帰つたから聞いているよ。」

「それからはまるで三日、富山中は真暗で、止むかと思うと滝のように降出します。いや神通が切れた、郷屋敷田圃の堤防が崩れた、牛の淵から桜木町へ突懸る、四十物町が少し引くかと思うと、総曲輪が湖だという。それに、間を置いちやあ大雨ですから市中は戦です。壁が壊れたり、材木が流れたりしますんですが、幸いまだ家が流れる程じゃあないので、ちょうど石滝の方は橋が出たという噂ですから、どうにか路は歩行かれましょう。お目に懸つて、いよいよと貴方でございます日にやあ、こつちの嬢さんは御主人なり、一方にやあ姉御がいった若様もいらつしやる。どうぞございましょう、この辺は水は大丈夫でございますか、もしそれが心配だと貴方ばかりではお目の御不自由、と打遣つちやあ参られませんが。」

「慶造、六十年近くもここに居る荒物屋の婆さんがいうんだ、水には大丈夫だそうだから、私には構わんでも可い。」

心安く言つたので、慶造は雀躍をして、

「それじゃあ後髪を引かれねえで、可うがす。お二人の先途を見届けて参りましょう。小  
 主公かだんなお氣を着けなすつて、後のちともいわず直ぐに、」

といった。折からの雨はまた篠しのを束つかねて、暗々たる空の、殊たそがれに黄昏たそがれを降静める。

慶造は眉を濡らす雫しずくを払つて、さし翳かざした笠を投出すと齊ひとしく、七分三分に裳もすそをぐい。

「してこいなと遣附やつける、や、本雨だ、威勢が可いぜえ。」

## 五十三

開戸から慶造が躍出したのを、拓は縁に出て送つたが、繁吹しがきを浴びて身を退ひいて座に戻つた、渠かれは茫然として手を束つかぬるのみ。半なかばは自分の体のごときお雪はあらず、余あまりの大降に荒物屋はらものやの媪おばも見舞わないから、戸を閉め得ず、燈ともをつけることもしないで、渠はただ滝のなかに穴あるごとく、雨の音に紛れて物の音もせぬ真ま暗くらな家の内やに数時間を消した。夜よも初しよこ更うを過ぎつと覺しい時、わずかに一度やや膝を動かして、机の前に寄つたばかり。三日の内にもかばかり長い間降詰めたのは、この時ばかりであった。おどろおどろしい雨の中に、遠く山を隔てた隣国の都と思ふあたり、馳はせ違ちがう人の跫あしおと音ね、ものの響ひびき、洪水の

急を報ずる乱調の湿った太鼓、人の叫さけび声こゑなどがひとしきりひとしきり聞えるのを、奈落の底で聞くような思いをしながら、理学士は恐しい夢を見た。

こはいかに！ 乾坤けんこん別有天べつてんあり。いずこともなく、天麗うららちかに晴れて、黄昏か、朝か、気清すずしくして、仲秋のごとく澄渡った空に、日も月の形も見えない、たとえば深山みやまにして人跡ひとあとの絶えたる処と思うに、東西も分かず一筋およそ十四五町の間、雪のごとく、霞のごとく敷詰めた白い花。と見ると卯の花のようで、よく山奥の溪間たにあい、流ながれに添うて群生むれずる、のりうつぎ（サビタの一種）であることを認めたら

時にそよとの風もなく、花はただ静かに咲満ちて、真白まっしろな中に、ここかしこ二ツ三ツ岩があつた。その岩の辺りで、折々花が揺れて、さらさらと靡なびくのは、下を流るる水の瀬が絡まるのであろう、一鳥声せず。

理学士は、それともなく石滝の奥ではないかと、ふと心着いて恍惚うつとりとなる処へ、吹落す疾風はやて一陣。蒼空あおぞらの半を蔽おほうた黒い鳥、片翼およそ一間余りもあろうと思う鷺わしが、旋風つむじを起して輪になつて、ぱつと落して、そのうつぎの花に翼を触れたと見ると、あつという人の叫声。途端に飜あらかつて舞上つた時に、粉吹雪こふぶきのごとくむらむらと散つて立つ花片はなびらの中から、すつくと頭あたまれた一個の美少年があつた。捲まくり手の肱ひじを曲げて手首から、垂たらたらと血

が流れる拳を握って、眦の切上った鋭い目にはツたと敵を睨んだが、打仰ぐ空次第に高く、驚は早や光のない星のようになって消えた。

少年は、熟とその勁敵の逸し去つたのを見定めた様子であつたが、そのまま滑かな岩に背を支えて、仰向けに倒れて、力なげに手を垂れて、太く疲れているものようである。やや有つて、今少年が潜んでいた同じ花の下から密と出たのはお雪であつた。黒髪は乱れて頸に縫れ頬に懸り、ふツくりした頬も肉落ちて、裾も袂もところどころ破れ裂けて、岩に縫り草を踏み、荆棘の中を潜り潜つた様子であるが、手を負うた少年の腕に縫つて、懐紙で疵を押えた、紅はたちまちその幾枚かを通して染まつたのである。

お雪は見るも痛々しく、目も眩れたる様にして、おろおろ声で、

「痛みますか、痛みますか。」というのが判然聞える。

眠れるか、少年はわずかにその頭を掉つたが、血は留らず、压えた懐紙は手にも耐らず染まつたので、花の上に棄てた。一点紅、お雪は口を着けてその疵口を吸つたのである。唇が触れた時、少年は清しい目を睜つて屹と見たが、また閉じて身動きもせず、手は忘れたもののお雪がするままに任せていた。

両人が姿を見ると、我にもあらず、理学士が肉は動いたのである。

## 五十四

しばらくするとお雪は帯の端を折返して、いつも締めている桃色の下メ《したじめ》を解いて、一尺ばかり曳出すと、手を掛けた衣は音がして裂けたのである。

その切で疵を巻いて、放すと、少年はほとんど無意識のごとく手を曲げて胸に齎して咽喉のあたりへ乗せたが、疲れてすやすやと睡った様子。顔のあたり、肩のあたり、はらはらと、来て、白く溜つて、また入乱れて立つは、風に花片が散るのではない、前に大驚がうつぎの森の静粛を破つて以来、絶えず兩人の身の辺に飛交う、花の色と等しい、小さな、数知れぬ蝶々で。

お雪は双の袂の真中を絞つて持ち、留まれば美しい眉を顰める少年の顔の前を、絶えず払い退け、払い退けする。その都度死装束として身装を繕つたろう、清い襦袢の紅の袂は、ちらちらと蝶の中に交つて、間あれば、おのが肩を打ち、且つ胸のあたりを払つていたが、たちまち顔を顰めて唇を曲げた。二ツ三ツ体を振つたが慌しい、我を忘れて肌を脱いだ、単衣の背を溢れ出づる、雪なす膚にも纏るる紅、その乳のあたりからも袂か



らも、むらむらとして飛んだのは、件の白い蝶であった。

我身半はその蝶に化したるかど、お雪は呆れ顔をして身内を見たが、にわかにも色を染めて密と少年を見ると、目を開かず。

お雪は吻と息を吐いて、肌を納めようとした手を動かすに違なく、きやツといつて平伏した。声に応じて少年はかツぽと匆ね起きて押被さり、身をもつてお雪を庇う。娘の体は再び花の中に埋もれたが、やや有つて頭れた少年の背には、凄じい鉤形に曲つた喙が触れた。大鷲は虚を伺つて、ところの隙なく蒼空から襲い來つたのであつた。

倒れながら屹とその面を上げると、翼で群蝶を搔乱して、白い烟の立つ中で、鷲は颯と舞い上るのを、血走つた目に瞶めながら少年は衝と立つた。思わず胸に縋るお雪の手を取つて扶けながら、行方を睨むと、谷を隔てて遙に見えるのは、杉ともいわず、栃ともいわず、檜ともいわず、一一抱三抱に余る大喬木がすすく天をさして枝を交えた、矢來のごとき木間々々には切倒したと覚しき同じほどの材木が積重なつて、横わつて、深森の中自から徑を造るその上へ、一列になつて、一ツ去れば、また一ツ、前なるが隠るれば、後なるが頭れて、ほとんど間断なく牛が歩いた。いづれも鼻頭におよそ三間余の長綱をつけて、姿形も森の中に定かならず、牛曳と見えるのが飛々に現れて、のツそり悠

々として通つていたのであるが、今件の大鷲が、風を起して一翼に谷を越え、その峰ある処、件の森の中へあからさまに入つたと思うと、牛は宙に躍つて跳狂うのが、一ツならず、二ツならず、咄嗟の間に眼を遮つて七ツ数えると止んだ。

「しつかりしねえ、もう可いぜ。」といつて、少年は手を放した。

お雪は血の氣を失つた顔を、恐る恐る上げて仰いだが、少年を見ると斉しく身を顫わした。

「あらまたお背中を、ちよいと大変でございますよ。」

「可いツてことよ、こればかりが何だ。」といったが、あわれ身を支えかねたか、またどつさり岩に腰を掛ける。

お雪は失心の体で姿を繕うこともせず。両膝を折つて少年の足許に跪いて、

「この足手纏さえございませねば、貴方お一方はお助り遊ばすのに訳はないのでござい  
ます。」

と、いう声も身も顫えたのである。

「私はどういたしましょう、花も取つて頂きました上に、この山に入りましてから貴方ばかり酷い目にお逢わせ申して、今までに、生命をお取られ遊ばすかと思いましたが幾たびあつたでございましょう。体も疵に遊ばして庇つて下さいますから、勿体ない、私は一ヶ所擦剥きました処もございませぬ。たとい前の世の約束事でも、これまでに御恩を受けますことはないでございます。どうぞ私を打遣つてお逃げなすつて下さいまし、お願いでございます。貴方にこうして頂きますより殺されます方がどんなに心安いか分りませぬ。失礼ながらお可哀そうで、片時もこんな恐い処に貴方をお置き申したくはございませぬから。」と、嗚咽していう声も絶断。

少年はかえつてつつけんどんに、

「生意氣な講釈をするない、手前達の知つたこつちやあねえや、見殺しにされるもんか。しかし、おい、おいらも、まさかこれほどとは思わなかつたが、随分手に余る上に、ものは食わずよ。どこへ出て可いか方角が分らねえし、弱つた。活きてる内や助けてやらあ、不可なかつたら覚悟しねえ。おいら父様はなし、母様は失くなつたし、一人ぼつちで心細かつたつけが、こんな時にやあさつぱりだ、情なくも何ともねえが、汝は可哀そ

うだな。」といつて、さすがの少年が目<sup>め</sup>に暗涙<sup>あんなみ</sup>を湛<sup>た</sup>えて、膝下<sup>ひざか</sup>に、うつぎの花<sup>はな</sup>に埋<sup>うず</sup>もれて蹲<sup>うずくま</sup>る清<sup>きよ</sup>い膚<sup>はだ</sup>と、美しい黒髪<sup>くろかみ</sup>とが、わななくのを見た。この一<sup>ひとしずく</sup>雫<sup>しずく</sup>が身<sup>み</sup>に染<sup>そ</sup>みたら、荒<sup>あらか</sup>鷺<sup>し</sup>の嘴<sup>くちばし</sup>に貫<sup>つら</sup>かれぬお雪<sup>ゆき</sup>の五<sup>ご</sup>体<sup>たい</sup>も裂<sup>ひ</sup>けるであろう。

一言<sup>いちご</sup>の答<sup>こた</sup>えも出来<sup>い</sup>ない風<sup>ふう</sup>情<sup>じやう</sup>。

少年<sup>せうねん</sup>も愁<sup>しゆうぜん</sup>然<sup>ぜん</sup>として無<sup>む</sup>言<sup>ごん</sup>で居<sup>ゐ</sup>たが、心<sup>こころ</sup>すともなく極<sup>ごく</sup>めて平<sup>へい</sup>気<sup>き</sup>な調<sup>てう</sup>子<sup>し</sup>で、

「しようがねえやな、おい、そうしたら一<sup>ひと</sup>所<sup>ところ</sup>に死<sup>し</sup>のうぜ。」と、自<sup>みづか</sup>ら頷<sup>うなず</sup>くがごとく顔<sup>かほ</sup>を傾<sup>かた</sup>けていつた。

理<sup>り</sup>学<sup>がく</sup>士<sup>し</sup>は夢<sup>ゆめ</sup>中<sup>ちゆう</sup>ながら、おのが命<sup>いのち</sup>をもつて与<sup>よ</sup>えんとして、三<sup>さん</sup>年<sup>ねん</sup>の間<sup>ま</sup>朝<sup>あ</sup>夕<sup>せき</sup>室<sup>しつ</sup>を同<sup>おな</sup>じじゆうした自<sup>みづか</sup>分の口<sup>くち</sup>からも、かほどまでに情<sup>こころ</sup>の籠<sup>かご</sup>つた、しかも無<sup>む</sup>邪<sup>じゃ</sup>気<sup>き</sup>な、罪<sup>つみ</sup>のないことをいい得<sup>え</sup>なかつたことを思<sup>おも</sup>つて、ひしと胸<sup>むね</sup>を打<sup>う</sup>たるるがごとくに感<sup>かん</sup>じたのである。

我<sup>われ</sup>にもあらず、最<sup>さい</sup>後<sup>ご</sup>を取<sup>と</sup>乱<sup>らん</sup>したお雪<sup>ゆき</sup>の耳<sup>みみ</sup>にも、かか<sup>か</sup>る言<sup>ことば</sup>は聞<sup>き</sup>えたのであろう。

「勿<sup>な</sup>体<sup>たい</sup>のうございます。」と、神<sup>かみ</sup>に謝<sup>あやま</sup>るがごとくにいつた。

「その意<sup>こころ</sup>で諦<sup>あきら</sup>めねえ。おい、そう泣<sup>な</sup>くのは止<sup>と</sup>せ、弱<sup>じやく</sup>虫<sup>ちゆう</sup>だと見<sup>み</sup>ると馬<sup>ま</sup>鹿<sup>か</sup>にするぜ、ももんがあ。」といつて大<sup>たい</sup>空<sup>くう</sup>を。

「はい、もう泣<sup>な</sup>きはいたしません。私<sup>わたし</sup>が先<sup>ま</sup>へ覚<sup>さ</sup>悟<sup>ご</sup>をしておりましたものを、お可<sup>はず</sup>恥<sup>か</sup>しゆう

「ございます。」と、手をついて面を上げた。そして顔と顔を見合せた時、少年はほとんど友白髪まで添遂げた夫婦のごとく、事もなげに冷い玉かと思えるお雪の肩に手を掛けて、「助かつたら何よ、おいらが邸へ来ねえ、一所に樂をしようぜ、面白く暮そうな。」と、あたかも死を賭にしたこの難境は、将来のその樂のために造られた階梯であるように考えるらしく、絶望した窮厄の中に縷々として一脈の靈光を認めたとく、嬉しげに且つ快げにいつて莞爾とした。いまわの際に少年は、刻下無意識になつた恋人に対して、為に生命を致すその報酬を求めたのではない。纖弱小心の人の、知死期の苦痛の幾分を慰めんとしたのである。

拓は夢に、我は棄てられるのであらうと思つた、お雪は自分を見棄てるであらうと思つた。少年がその時のその意気、その姿、その風情は、たとい淑徳貞操の現化した女神であつても、なお且つ、一糸蔽える者なきその身を抱かれて遮ぎり難く見えたから。

## 五十六

理学士はまた心から、十の我に百を加えても、なお遥かにその少年に及ばないことを認

めたのである。

たとえば己おのが目は盲しらいたるに、少年の眼まなこは秋の水のごとく、清く澄んで星のごとく輝くのである。我はお雪の供給いに活いきて、渠かれをして石滝の死地に陥おちいらしめたのに、少年はその優ゆきしき姿と、斗大の胆をもつて、渠を救うために目前荒鷲と戦っている。しかも事の行ゆき懸がりから察し、人の語る処に因れば、この美少年は未見の知己、千破矢滝太郎に相違ない。千破矢は華族だ、今渠きたが来れ、共にこの労を慰めんといったのは、すなわちお雪を高家の室となさんという心である。されば少年がその意気と、その容貌ようぼうと、風采ふうさいと、その品位をもつてして誰うけががこれを諾うけがわざるべき。拓たくが身をもつてお雪と地位をかえたとすれば、直ちに我を棄すてて渠に愛を移すのは、世に最も公平なことであると思つて、満身の血が冷くなつた。けれどもあえて数の多量なるものが、愛を購あがない得るのではなかつた。お雪は少年が優しく懸かけた、肩の手を静かに払はつて、颯さつと赤らむ顔とともに、声の下で、

「はい、私はあのお邸へ上ります訳には参りませんのでございます。」

恐る恐るいうおもはゆげな状さまを、少年は瞻みまもりながら、事もなげにいつた。

「なぜだ。」

「内に拓さんという方がございます、花を欲しいと存じましたのも、皆みんなその人のためなん

ですから。」と死を極めたものの、かえってかかるとを憚らず言つて差俯向く。

少年は屹きつとなつて、たちまち顔色を変えたのである。

理学士はこの時少年のいうことを聞こうとして、思わず堅唾かたずを飲んだ。

夢中の美少年に憤つた色が見え、

「おいら、島野とは違うぜ。今までな、おい、欲ほしい思ったものは取らねえこたあねえ、しようと思つたことをしねえこたあなかつたんだ。可いいじやあないか、不可いけねえツて？ 不可いけねえか。うむそうか、可いいや、へん、おいら詰つまらねえことをしたぜ。」

と投げるようにいつて、大空を恍惚うつつりと瞠みめた風情。取留めない夢の想おもいで、拓はこの時少年がお雪に向つてなす処は、一つ一つ皆思びうことあつて、したかのごとく感じられて、快活かくのごとき者が、恋には恐るべき神秘を守つて、今までに秋しゅう毫ごうも、さる気色のなかつたほど、一層大いなる力あることを感じて、愕がく然ぜんとした。同時に今までは、お雪を救うために造られた、巖いわに倚よる一個白面、朱唇、年少、美貌びぼうの神将であるごとく見えたのが、たちまち清く麗しき娘を迷わすために姿を変じた、妄執の蛇であると心着いたが、手も足も動かず、叫おのばんとする声も己が耳みみには入いらなかつた。

驚おどがその三回目の襲撃を試みない瞬間、白い花も動かず、二人は熟じつとして石に化したも

ののように見えた。やがて少年は袂を探つて、一本の花を取出した。学識ある理学士が夢中の目は、直ちにそれを黒百合の花と認めたのである。

これがためにこそ餓えたり、傷付いたれ、物怪ある山に迷うたれ。荒鷲には襲わるる、少年の身に添えて守つていたと覚ゆるのを、掴むがごとく引出して、やにわに手を懸けて撈り棄てようとした趣であつた。けれども、お雪が物いたげに瞳を動かして、衝と胸を抱いて立つたのを、卑むがごとく、嘲けるがごとく、憎むがごとく、はた憐むがごとくに熟と見て、舌打して、そのまま黒百合をお雪の手に与えると齊しく、巖を放れてすつくと立つて、

「不可ねえや、お前良人があるんなら、おいら一所に死ぬのは厭だぜ。じゃあ、おい勝手にしねえ。」

といい棄てて、身を翻すとたちまち歩き去つた。

## 五十七

我が手働かず、足動かず、目はただ天涯の一方に、白き花に埋もれたお雪を見るばかり。



片手をもつて抱き得るような、細い窠れた妻の体を、理学士はいかんともすることならず。お雪は黒百合の花を捧げて、身に影も添わず、淋しく心細げに亘んでいたが、およそ十歩を隔てて少年が一度振り返つて見た時、糸をもて操らるるかど二足三足後を追うたが、そのまま素気なく向うを向いてしまったので、力無げに歩を停めた、目には暗涙を湛えたり。やがて後姿に触れて、ゆさゆさと揺ぶられる、のりうつぎの花の梢は、少年を包んで見えなくなつた。

これをこそは待ち得たれ、黒い星一ツ遙か彼方の峰に現れたと見ると、風に乗つて矢のごとくに颯と寄せた。すわやと見る目の前の、鷲の翼は四辺を暗くした中に、娘の白い膚を包んで、はたと仰向に僵れた。

「あれえ、」

叫ぶに応じて少年は、再び猛然として顕れたが、宙を飛んで躍りかかった。拳を握つて高く上げると、大鷲の翼を踏んで、その頸を打つたのである。

「畜生、おれが目に見えねえように殺せやい！」

と怒気満面に溢れて叱咤した。少年はほとんど身を棄てて、その最後の力を尽したのであろう。

黒雲一団渦く中に、鷲は一双の金の瞳を怒らしたが、ぱつと音を立てて三たび虚空に退いた。二ツ三ツ四ツ五ツばかり羽は斑々として落ちて、戦の矢を白い花の上に残した。

少年が勇威凜々として今大鷲を搏つた時の風采は、理学士をして思わず面を伏せて、僵れたる肉一団何かある、我が妻をもてこの神将に捧げんと思わしめたのである。

かくして少年ははた掌を拍つて塵を払つたが、吐息を吐いて、さすがに心弛み、力落ちて、よろよろと僵れようとして、息も絶々なお雪を見て、眉を擧めて、

「ちよッ、しよウのねえ女だな。」

やがて手をかけて、小脇に抱上げたが、お雪の黒髪は逆に乱れて、片手に黒百合を持つたのを胸にあてて、片手をぶらりと垂れていた。大鷲は今の一撃に怒をなしたか、以前のごとく形も見えぬまでは遠く去らず、中空に凧のごとく居つて、やや動き且つ動くのを、屹と睨んでは仰いで見たが、衝と走つては打仰ぎ、走つては打仰ぎ、ともすれば咲き満ちたうつぎの花の中に隠れ、頭れ、隠れて、道を求めて駆けるのを、拓は追慕うともなく後を跟けて、ややあつて一座の巖石、形墓の天窓に似たのが前途を塞いで、白い花は、あたかも雪間の飛々に次第に消えて、このあたりでは路とともに尽きて見えなくなる処に来た。

もとより後は見も返らず、少年はお雪を抱いたまま、ひだを踏み、角に縫つて蝙蝠の攀ずるがごとく、ひらりひらりと巖の頂に上つた。この巖の頂は、渠を載せて且つ歩を巡らさしむるに余あるものである。

時に少年の姿は、高く頭上の風に驚を漾わせ、天を頂いて突立つたが、何とかしけむ、足踏をして、

「滝だ！ 滝だ！」と言つて喜びの色は面に溢れた。ただ聞く、どうどうと水の音、巖もゆらぐ響である。

少年はいと忙しく瞳を動かして、下りるべき路を求めたが、衝と端に臨んで、俯向いて見る見る失望の色を顕した。思わず嘆息をして口惜しそうに、

「どこまで崇るんだな、獣め。」

## 五十八

少年を載せた巖は枝に留まつた梟のようで、その天窓大きく、尻ツこけになつて幾千仞とも弁えぬ谷の上へ、蔽い被さつて斜に出ている。裾を踏んで頭を叩けば、ただこの

一座山のごとき大奇巖は月界に飛ばんず形。繁れる雑種の喬木は、梢を揃えて件の巖の裾を包んで、滝は音ばかり森の中に聞えるのであった。頂なる少年は、これを俯し瞰して、雲の棧橋のなきに失望した。しかるに倒に伏して覗かぬ目には見えないであろう、尻ツこけになつた巖の裾に居て、可怪い喬木の梢なる樹々の葉を褥として、大胡坐を組んだ、——何等のもので。

面赭く、耳蒼く、馬ばかりなる大ききもの、手足に汚れた薄樺色の産毛のようで、房々として柔かに長い毛が一面の生いて、人か獣かを見分かぬが、朦朧としてただ霧を束ねて鑄出したよう。真俯向になつて面を上げず、ものとも知らぬ濁みたる声で、

「猿の年の、猿の月の、猿の日に、猿の年の、猿の月の、猿の日に、猿の年の、猿の月の、猿の日に、」と支干を数えて呟きながら、八九寸伸びた蒼黒い十本の指の爪で、件の細々とした、突けば折れるばかりの巖の裾をごしごしと掻撈る。時に手を留めてその俯向いた鼻先と思う処を、爪をあつめて巖の欠を掘取ると見ると、また掻きはじめた。その爪の切入るごとに、巖はもろくぼろぼろと欠けて、喰い入り喰い入り、見る内に危く一重の皮を残して、まさに断切れて逆さまに飛ばんとする。

あれあれ、とばかりに学士は目も眩れ、心も消え、体に悪熱を感ずるばかり、血を絞

つて急を告げようとする声は糸より細うして己おのに耳にも定かならず。可おそろ恐しきものの巖を切る音は、肝きも先さきを貫きいて、滝ひびの響きは耳みみを聳もよほするようであつた。

羽は撃は聞きえて、鷲はは颯さつと大空から落ちて来た。頂高く、天近く、仰げば遙かに小さな少年の立姿は、狂うがごとく位置を転じて、腕白く垂れたお雪の手が、空ざまに少年かの頭かしらに継ると見た。途端に巖は地を放れて山を覆えるがごとく、二人の姿はもんどり打つて空に舞い、滝の音する森の中へ足を空おちに陥いつたので、あつと絶叫したが、理学士は愕がく然ぜんとして可おそろ恐い夢から覚めたのである。

拓は茫然自失して、前さきのまま机に頬杖を突いた、その手も支えかねて僵たおれようとしたが、ふと闇やみのままうとうとと居眠つたのに、いつ点ついたか、見えぬ目ともに燈しびが映えるのに心着いた。

確かたかに傍わらに人けの気勢はい。

## 五十九

「誰だ、」と極めて落着いて言つたが、声は我ながら異常なものであつた。

急に答がないので、更に、

「誰だ。」

「はい、」と幽かに応えた。

理学士が一生にただ一度目を開いて見たいのは、この時の姿であつた、今のは疑も無いお雪である。

これを聞いて渠は思わず手を差延べて、抱こうとしたが、触れば消失せらるであろうと思つて、悚然として膝に置いたが、打戦く。

「遅くなりましたして済みませんでした、拓さん。」

と判然、それも一言ごとに切なく呼吸が切れる様子。ありしがごとき艱難の中から蘇生つて来た者だということが、ほぼ確かめらるると同時に、吃驚して、

「おお、お雪か、お前！　そして千破矢さんはどうした、」と数分時前、夢に渠と我ともにあつた少年の名をいつた。

お雪はその時答えなかつた。

理学士は繰返してまた、

「千破矢さんはどうしたんだ、」と、これは何心なく安否を聞いたのであつたが、ふと夢

の中の事に思い当った。お雪の答が濁ったのを、さてはとばかり、胸を跳らして口を嚙む。しばらくして、

「送つて来て下さいましたよ。」

「そして」

「あの、お向の荒物屋に休んでいらつしやいます。」

「そうか、」といったが、我ながら素気なく、その真心を謝するにも、怨をいうにも、喜ぶにも、激して容易くは語も出でず。あまりのことに、生きて再び家に帰つて、現のごとき男を見ても直ぐにはものも言懸けなかつた、お雪も同じ心であろう。ものいう目にも、見えぬ目にも、二人齊しく涙を湛えて、差俯向いて黙然とした。人はかかる時、世に我あることを忘るるのである。

「かまち 框に人のあしおと 足音がしたが、あわただ 慌しく奥に来て、さかん 壮な激しい声は、沈んで力強く、  
「に 遁げろ、遁げねえか、何をしとる！」

お雪は薄暗い燈の影に、濡れしおれた髪を振つて、蒼白い顔を上げた。理学士の耳にも正に滝太郎の声である、と思うも疾しや！

「みず 洪水だ、しつかりしろ。」

お雪は半ば膝を立てて、滝太郎の顔を見るばかり。

「早くしねえかい、べらぼうめ。」と叱るがごとくにいつて、衝と縁側に出た、滝太郎はすつくと立った。しばらくして、あれといったが、お雪は蹶起きようとして燈を消した。

「周章てるない、」といつて滝太郎は衝と戻つて、やにわにお雪の手を取った。

「助けてい！」と言いきまに、お雪は何を狼狽えたか、扶けられた滝太郎の手を振放して、僵れかかつて拓の袖を千切れよと曳いた。

## 六十

お雪は曳いて、曳き動かして、

「どうしましょう、あれ、早く貴方、貴方。」

拓は動じないで、磐石のごとく坐っているので、思わず手を放して、一人で縁側へ出たが、踏込んだのか腰を突いた。しばらくは起きも得なかつたが、むつくと立上ると柱に縋つて、わなわなと顛えた。ただ森として縁板が颯と白くなつたと思うと、水はひたひたと畳に上つた。



「ええ、」といって学士も立った。

「可おそろ恐しい早さだ、放すな！」と滝太郎は背せなかをお雪に差向ける。途端すさまに凄じい音がして、わつという声が沈んで聞える。

「お雪！ お雪。」

学士も我を忘れて助たすけを呼んだのである。

「あれ、若様、拓さんは、拓さんは目が見えません。」

「うむ、」

「助けて下さい、拓さんは目が見えません。」

「二人じゃあ不可いけねえや、」

「内の人を、私の夫を。」

「おいら、お前でなくつちやあ、」

「厭いや、厭ですよ、厭ですよ、」と、捕いうる滝太郎の手を摺すり抜ける。

「だって、汝おめえていしゆの良人なら、おいらにやあ敵かたきだぜ。」

「私は死んでしまいます。」

「へへ、駄目だい、」と唾つばするがごとく叫んで、滝太郎は飛んで拓に來た。

「滝だ、大丈夫だ。」

「お雪には義理があるんです、私に構わず、」といって、学士は身を退つて壁にひたりと背をあてた。

「あれ、拓さん、」とばかり身を急るお雪が膝は、早や水に包まれているのである。

「いや、いけない、」と学士は決然として言放つた。

滝太郎は真中に立つて、件の鋭い目に左右を、して瞳を輝かした。

「ええ二人ともつかまんな。構うこたあねえ、可けなけりや皆で死のう。」

雨は先刻に止んで、黒雲の絶間に月が出ていた。湯の谷の屋根に、処々立てた高張

の明が射して、眼のあたりは赤く、四方へ黒い布を引いて漲る水は、随处、亀甲形に畝

り畝り波を立てて、ざぶりざぶりとの山の裾へ打当てる音がした。拓を背にし、お雪を頸に

縋らせて、滝太郎は面も触らず件の洞穴を差して渡つたが、縁を下りる時、破屋は左

右に傾いた。行くことわずかにして、水は既に肩を浸した。手を放すなどいって滝太郎が

水を含んで吐いた時、お雪は洪水の上に乗上つて、乗着いて、滝太郎に頬摺したが、

「拓さん堪忍して。」

声を残して、魚の跳るがごとく、身を翻して水に沈んだ。遙かにその姿の浮いた折から、荒物屋の媪（おば）など、五七人乗った小舟を漕寄（こぎよ）せたが、流れて来る材木がくるりと廻（まわ）つて舷（ふなばた）を突いたので、船は波に乗って颯（さつ）と退（ひ）いた。同時に滝太郎の姿も水に沈んだが、たちまち水（みづ）煙（けぶり）を立てて拔手を切ったのである。拓とともに助かったのは言うまでもない。

その夜湯（よ）の谷（おぼ）で溺（おぼ）れたのが十七人、……お雪はその中（うち）の一人であった。

水は一晚で大方退（ひ）いて、翌（あくる）日は天日快晴。四十物町はちよろちよろ流れで、兵糧を積んだ船（ゆきき）が往來（ゆきき）する。勇美子は裾（すそ）を引上げて濁水（にごり）に脛（はぎ）を浸しながら、物珍らしげに門の前を歩いていった。狛犬（かたわら）ジャムはその袖の下を、ちやぶちやぶと泳ぎ、義作は夕立の背（せな）を干して、傍（かたわら）に立（た）っていた、水はやや駒（こま）の蹄（ひづめ）を没するばかり。それでも瀬（せ）を造（つく）って、低い処へ落ちる中に、流れて来たものがある、勇美子が目敏（めざと）く見て、腕捲（うでまく）りをして採（と）上げたのは、不思議の花であった。形は貝母（ばいも）に似て、暗緑帯紫の色、一つは咲いて花弁（はなびら）が六つ、黄粉（こうふん）を包んだ薬（しやく）が六つ、苔（つばみ）が一つ。

数年（ねん）の後（のち）、いずこにも籍（せき）を置（お）かぬ一艘（そう）の冒険船（ぼうけんせん）が、滝太郎（たきたろう）を乗（の）せて、拓（たく）お兼等（かねら）が乗組（のりぐみ）んで、大洋（おやう）の波（なみ）に浮（う）んだ時は、必ずこの黒百合（くろむぎ）をもって船（ふね）に号（な）けるのであろう。

明治三十二（一八九九）年六く八月



## 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成2」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年4月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第四卷」岩波書店

1941（昭和16）年12月25日第1刷発行

※底本の誤植は親本を参照して直しました。

入力：もんむー

校正：門田裕志

2005年3月16日作成

2007年9月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 黒百合

## 泉鏡花

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>